

岐阜県文化財保護センター

調査報告書 第134集

隨縁寺裏B地点遺跡

2015

岐阜県文化財保護センター

隨縁寺裏B地点遺跡

2015

岐阜県文化財保護センター

序

岐阜県北部の飛騨地方は、豊かな山林と山あいを流れる数々の清流によって育まれた美しい自然のなかにあります。随縁寺裏B地点遺跡の所在する川上川左岸の山麓部分には、縄文時代から古代の集落跡である赤保木遺跡、古墳時代の与島古墳群・寺尾古墳群、国分寺の瓦を焼いたとされる赤保木瓦窯跡等、注目すべき遺跡が多数存在します。

このたび、国土交通省中部地方整備局高山国道事務所による中部縦貫自動車道高山清見道路の建設に伴い、随縁寺裏B地点遺跡の発掘調査を実施し、奈良時代を中心に縄文時代から近世までの遺物を発見しました。また、遺跡の東側には砂礫層が堆積した谷があり、この谷がほぼ埋まって、緩やかな地形になった後に奈良時代の堅穴建物が建てられたことを確認しました。当遺跡と高曾洞川を挟んで南側に位置する野内遺跡では、平安時代の堅穴建物跡と鍛冶工房跡を多数確認しており、野内遺跡は官衙（公的施設）との関わりがある遺跡と推定されています。当遺跡の奈良時代の堅穴建物は、窯業や鍛冶などの生産の拠点として、この地域一帯が大きく発展する直前に営まれたものであり、時代の変換期の様相を示す好例と思われます。本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成に当たりまして、多大な御支援と御協力をいただきました関係諸機関並びに関係者各位、高山市教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申し上げます。

平成 27 年 3 月

岐阜県文化財保護センター
所長 宮田 敏光

例　言

- 1 本書は、岐阜県高山市上切町に所在する隨縁寺裏B地点遺跡(岐阜県遺跡番号 21203-11313)の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、中部縦貫自動車道高山清見道路建設に伴うもので、国土交通省中部地方整備局高山国道事務所から岐阜県が委託を受けた。発掘作業及び整理等作業は、岐阜県文化財保護センターが実施した。
- 3 八賀晋三重大学名誉教授の指導のもとに、発掘作業は平成25年度に、整理等作業は平成26年度に実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当は、本書第1章第2節に一括掲載した。
- 5 本書の執筆及び編集は三島誠が行った。
- 6 発掘作業における現場管理、掘削、測量、景観写真撮影などの支援業務と、出土遺物の洗浄・注記は、株式会社ユニオンに委託して行った。整理等作業における作業管理、出土遺物の整理作業、挿図・写真図版作成などの支援業務は、株式会社太陽測地社に委託して行った。
- 7 遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。
- 8 発掘調査及び報告書の作成にあたって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である(敬称略・五十音順)。
石黒立人、岩田修、岩田崇、大石崇史、谷口和人、馬場伸一郎、三好清超、渡邊博人、隨縁寺、上切町内会、高山市教育委員会
- 9 本文中の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標系第VII系を使用する。
- 10 土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄 2005『新版標準土色帖』(日本色研事業株式会社)による。
- 11 調査記録及び出土遺物は、岐阜県文化財保護センターで保管している。

目 次

序

例言

第1章 調査の経緯.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 調査の方法と経過.....	2
第2章 遺跡の環境.....	4
第1節 地理的環境.....	4
第2節 歴史的環境.....	5
第3章 調査の成果.....	7
第1節 遺跡の基本層序.....	7
第2節 遺構・遺物の概要.....	9
第3節 遺構.....	11
発掘区図面割り図.....	36
遺構全体図分割図.....	37
第4節 遺物.....	47
遺構・遺物観察表、出土遺物一覧表.....	57
第4章 総括.....	69
第1節 遺構.....	69
第2節 遺物.....	70
第3節 遺跡の検討.....	72
引用・参考文献.....	76
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

図 1 随縁寺裏B地点遺跡の位置	1	図 26 S K110 実測図(1)	31
図 2 試掘・確認調査区位置図及び本発掘調査範囲	2	図 27 S K110 実測図(2)・S K113 実測図	32
図 3 発掘区地区割り図	3	図 28 S K114・119 実測図(1)	33
図 4 随縁寺裏B地点遺跡周辺の地形と地質	4	図 29 S K114・119 実測図(2)	34
図 5 周辺の遺跡分布	6	図 30 S K172 実測図	35
図 6 基本層序の位置	7	図 31 発掘区地面割り図	36
図 7 基本層序	8	図 32 発掘区全域分割図(1)	37
図 8 主要遺構配置図	9	図 33 発掘区全域分割図(2)	38
図 9 N R 1 実測図	11	図 34 発掘区全域分割図(3)	39
図 10 N R 2 実測図(1)	13	図 35 発掘区全域分割図(4)	40
図 11 N R 2 実測図(2)	14	図 36 発掘区全域分割図(5)	41
図 12 N R 3・4 実測図(1)	15	図 37 発掘区全域分割図(6)	42
図 13 N R 3・4 実測図(2)	16	図 38 発掘区全域分割図(7)	43
図 14 S I 1 実測図(1)	18	図 39 発掘区全域分割図(8)	44
図 15 S I 1 実測図(2)	19	図 40 発掘区全域分割図(9)	45
図 16 S I 1 実測図(3)	20	図 41 発掘区全域分割図(10)	46
図 17 S I 2 実測図(1)	21	図 42 遺物実測図(1)	52
図 18 S I 2 実測図(2)	22	図 43 遺物実測図(2)	53
図 19 S I 3 実測図	23	図 44 遺物実測図(3)	54
図 20 S I 4 実測図(1)	24	図 45 遺物実測図(4)	55
図 21 S I 4 実測図(2)	25	図 46 遺物実測図(5)	56
図 22 S I 5 実測図	26	図 47 古代の主要遺構配図	69
図 23 S I 6 実測図(1)	28	図 48 随縁寺裏B地点遺跡及び周辺遺跡の立地	73
図 24 S I 6 実測図(2)	29	図 49 随縁寺裏B地点遺跡周辺の主要遺跡	74
図 25 S I 7 実測図	30		

表目次

表 1 周辺の遺跡一覧	5	表 18 打製石斧觀察表	65
表 2 挖出遺構一覧表	10	表 19 石鏃觀察表	65
表 3 出土遺物破片数一覧表	10	表 20 磨製石斧觀察表	65
表 4 遺構觀察表(1)	57	表 21 砥石觀察表	65
表 5 遺構觀察表(2)	58	表 22 石刀觀察表	65
表 6 遺構觀察表(3)	59	表 23 鉄製品觀察表	65
表 7 遺構觀察表(4)	60	表 24 出土遺物一覧表(1)	66
表 8 舞文土器觀察表	61	表 25 出土遺物一覧表(2)	67
表 9 弥生土器觀察表(1)	61	表 26 出土遺物一覧表(3)	68
表 10 弥生土器觀察表(2)	62	表 27 舞文土器器種別破片数	71
表 11 土師器觀察表	62	表 28 弥生土器器種別破片数	71
表 12 須恵器觀察表(1)	63	表 29 石器石材別点数	71
表 13 須恵器觀察表(2)	64	表 30 須恵器器種別破片数	71
表 14 灰釉陶器觀察表(1)	64	表 31 美濃須衛窯からの搬入須恵器破片数	71
表 15 灰釉陶器觀察表(2)	65	表 32 猿投・尾北窯からの搬入須恵器破片数	71
表 16 陶磁器類觀察表	65	表 33 在地須恵器破片数	71
表 17 スクレイバー觀察表	65	表 34 随縁寺裏B地点遺跡周辺の遺跡消長表	74

写真図版目次

図版 1 随縁寺裏B地点遺跡全景(北から)		図版 6 古代の遺構	
図版 2 随縁寺裏B地点遺跡全景(南から)		図版 7 出土遺物(1)	
図版 3 発掘区全景・北地区全景		図版 8 出土遺物(2)	
図版 4 南地区全景・南地区東側近景		図版 9 出土遺物(3)	
図版 5 自然流路・古代の遺構		図版 10 出土遺物(4)	

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

隨縁寺裏B地点遺跡は、岐阜県北部、飛騨地域の中心都市である高山市に所在し、市街地が広がる高山盆地北西端に位置する（図1）。

今回の発掘調査は、国土交通省中部地方整備局高山国道事務所（以下、「高山国道事務所」という。）による中部縦貫自動車道高山清見道路の建設に伴い実施したものである。この道路は、高山市と東海北陸自動車道を直結し、高速交通サービスの提供、高山市内の交通混雑の緩和、さらには地場産業振興や観光リゾートとしての地域発展の支援等を目的に計画された自動車専用道路である。

事業に先立ち、高山国道事務所が岐阜県教育委員会（以下、「県教育委員会」という。）に対して開発事業予定地における埋蔵文化財の有無について照会を行ったところ、県教育委員会は開発事業予定地が与島B地点遺跡に近接することを確認した。このため、県教育委員会は、その取扱いについて高山国道事務所と協議し、平成20年6月6日から10日にかけて試掘・確認調査を実施した。調査の結果、TP1では遺構、TP3・4では遺構と遺物包含層中から古代の遺物、TP6では土石流により埋没したと思われる谷状地形を検出し、埋土から摩滅の少ない多数の遺物を確認した。また、TP8では竪穴建物と考えられる遺構を確認し、与島B地点遺跡とは異なる様相の遺跡が北東側に所在していることが判明した。県教育委員会教育長は、試掘・確認調査の結果及び高山市教育委員会との打合せに基づき、高山市教育委員会教育長あて岐阜県遺跡地図の変更について通知（平成20年7月9日付け社文第293号の2）し、新発見の遺跡として隨縁寺裏B地点遺跡を登録した。この結果を受けて、7月14日に県教育委員会は平成20年度第1回岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討委員会（以下、「検討委員会」という。）を開催した。検討委員会では発掘調査における適切な本発掘調査範囲・方法について検討し、



図1 隨縁寺裏B地点遺跡の位置
(国土地理院発行5万分の1地形図「飛騨古川」「三日町」「船津」「高山」)

2 第1章 調査の経緯

岐阜県発掘調査適用基準に基づきTP1・3・4・6・8周辺の開発事業予定地についての本発掘調査が必要であるとの意見をまとめた(図2)。その後、文化財保護法第94条第1項の規定に基づき、高山国道事務所長から県教育委員会教育長あて発掘の通知(平成25年3月29日付け国部整高調品確第180号)が提出され、同法第94条第4項の規定に基づき、県教育委員会教育長は高山国道事務所長あて勧告(平成25年4月8日付け社文第4号の5)により発掘調査を実施するよう通知した。高山国道事務所長は県教育委員会教育長に発掘調査の実施を依頼をした。それを受け岐阜県文化財保護センター(以下、「センター」という。)は、調査着手後文化財保護法第99条の規定に基づき、埋蔵文化財発掘調査の報告(平成25年6月5日付け文財セ第74号)を県教育委員会教育長に提出した。

第2節 調査の方法と経過

1 発掘作業の方法

発掘作業は、平成25年度に1,100 m²を対象に実施した。

グリッドの設定 世界測地系を基に、(X, Y)=(18600, 5800)を原点として100m×100m四方の大グリッドを設定し、北から南へ順にAからCとした。そして、大グリッド内に5m×5mの小グリッド(以下、「グリッド」という。)を設定し、北から南へAからT、西から東へ1から20を設定した(図3)。例えば、今回の発掘区の北西隅グリッドの呼称はAN6となる。また、発掘区が南北に2分することから、北側の発掘区を北地区、南側の発掘区を南地区とした。

表土掘削 表土掘削はバックホウによる重機掘削を行った。

遺物包含層掘削・遺構検出・遺構掘削 遺物包含層掘削・遺構検出・遺構掘削はジョレン・草削り・移植ゴテなどを用いて人力で行った。遺構掘削では、遺物の出土状況等の記録を作成しつつ、最終的に遺構埋土をすべて取り除いた。また、必要に応じて遺構断面割り調査を実施した。遺構番号は検出順の通番とし、S0001番から番号を与えた。この番号は整理等作業時に遺構種別ごとに振り替えたが、今後の資料活用時に支障を来さぬよう、本書の「遺構一覧表」にも「調査時番号」として記載した。

遺構実測 個別の遺構実測図の作成は、三次元測量・図化システムによって行ったが、遺構断面図は手測りで実測した。図面の縮尺は20分の1を基本としつつ、実測対象に応じて適切な縮尺を選択した。

写真撮影 写真撮影は、一眼レフ35mmカメラ(リバーサルフィルム、モノクロフィルム)、中判カメラ(リバーサルフィルム、モノクロフィルム)、デジタルカメラで撮影した。遺跡全景写真は、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。

遺物取り上げ 出土遺物については、トータルステーションによる三次元座標の測定を行った。



図2 試掘・確認調査区位置図
及び本発掘調査範囲

2 発掘作業の経過

第1週(5/27～5/31)27日、基準点設

置・水準測量。28日、南地区表土掘削・グリッド設定測量開始。31日、南地区表土掘削・グリッド設定測量終了。

第2週(6/3～6/7)4日、北地区表土掘削・グリッド設定測量開始。同日終了。5日、作業員作業(南発掘区遺物包含層掘削)開始。

第3週(6/10～6/14)10日、遺構検出・遺構掘削を開始。

第4週(6/17～6/21)20日、南地区的自然流路(NR2)の埋土掘削を開始。

第5週(6/24～6/28)24日、南地区中央の堅穴建物(SI1)の遺構及び、先後関係のある堅穴建物を確認。27日、堅穴建物(SI1)の遺構掘削を開始。

第6～8週(7/1～7/19)1日、南地区中央の堅穴建物・方形土坑(SI5・SK171)の遺構掘削を開始。

第9～10週(7/22～8/2)26日、南地区的自然流路(NR4)の掘削を開始。

第11～12週(8/5～8/16)7日、北地区的遺構検出・遺構掘削を開始。8日、自然流路(NR1)の掘削を開始。14日～16日、夏季休業。

第13週(8/19～8/23)遺構掘削作業を続行。

第14～15週(8/26～9/6)29日、遺構掘削終了。3日、三重大学名誉教授八賀晋氏による指導。

第16週(9/9～9/13)10日、ラジコンヘリコプターによる景観撮影。

第17週(9/17)17日、地元向けの現地説明会を開催(参加者40名)。全作業終了。

3 整理等作業の経過

遺物洗浄・注記は平成25年度に実施した。整理等作業(遺物実測・分類等)・報告書作成はセンター飛騨駐在事務所において平成26年度に実施した。

4 調査体制

発掘作業及び整理等作業の体制は、以下のとおりである。

センター所長	丸山和彦(平成25年度)、宮田敏光(平成26年度)
総務課長	二宮隆(平成25・26年度)
調査課長	成瀬正勝(平成25・26年度)
調査担当係長	大宮次郎(平成25・26年度)
担当調査員	三島誠(平成25・26年度)

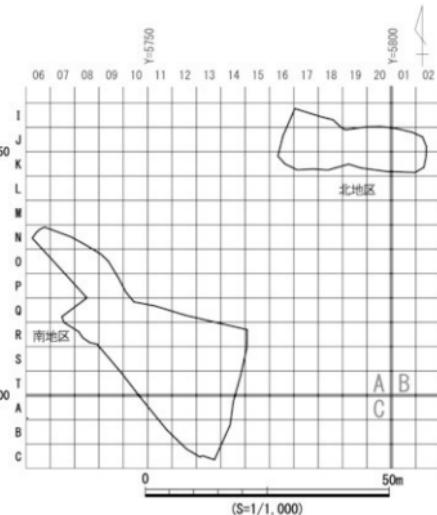


図3 発掘区地区割り図

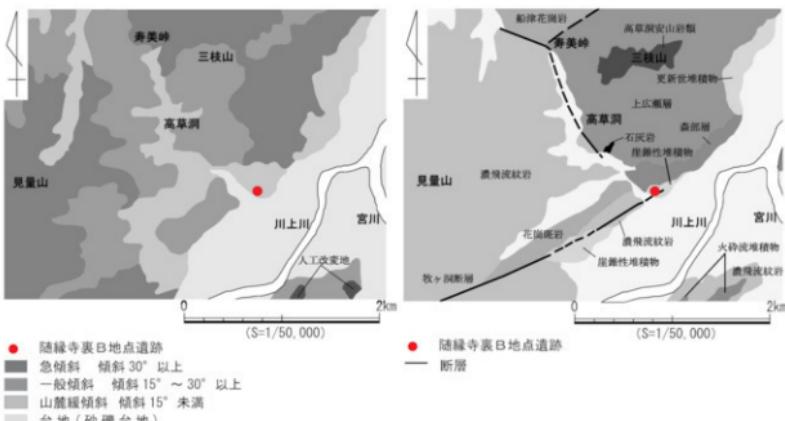
第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

高山市市街地の北西部には、見量山(997m)や三枝山(825m)の山々が連なる。この2つの山の間に高草洞が北西から南東方向へ直線状に走り、高曾洞川が両岸に狭い氾濫原を形成する。隨縁寺裏B地点遺跡は、この谷の入口部分に位置し、高曾洞川左岸の緩斜面に立地する。

当遺跡の西側の見量山南麓には、北東から南西方向へ牧ヶ洞断層が延びる。この断層は、高山市国府町から高山市莊川町にかけて延びる国府断層帶の一つで、当遺跡西側の高草洞谷まで延びると考えられる。遺跡の周辺は、この断層の影響によると考えられる凹地や高まり、河川流路の屈曲など特徴的な地形が認められる。遺跡の西側は、断層に平行するように直線状の谷が走り、細長い半島状の丘陵を形成する。当遺跡の周辺の断層南側は、丘陵が崩壊してできた崖錐・崩積性堆積物により斜面地を形成する。また、断層に直交する高曾洞川は、直線的な奥行きの深い谷になっている。

地質学的には、当遺跡の南西側の見量山山系の基盤は、濃飛流紋岩で形成される。一方、三枝山の地層は上広瀬層や森部層のように礫岩・砂岩・凝灰岩・石灰岩・粘板岩・結晶変岩等で形成され、飛騨外縁帯の一部をなしている。当遺跡内で見られる自然堆積層の多くは、三枝山の基盤層に由来とみられる粘質土や微細砂をラミナ状に含む細砂及び粘土層、1mを超える礫を含む土石流堆積物が認められることから、崩落と氾濫を繰り返しながら斜面地を形成したと推定される。



地質図(右)は地質調査所『5万分の1地質図(1975「飛騨古川」・1982「三日町」)』を基に作成、地形分類図(左)は『岐阜県「5万分の1土地分類基本調査(地形分類図)2005「白木峰・古川」・2000「三日町」)』を基に作成した。

図4 隨縁寺裏B地点遺跡周辺の地形と地質

第2節 歴史的環境

当遺跡周辺には、川上川左岸の山麓を中心に遺跡が分布する(図5)¹⁾。当遺跡の発掘調査では、縄文時代・弥生時代の遺物、古代の遺構・遺物を確認していることから、本節は、当遺跡との関わりがあると考えられる縄文時代・弥生時代・古代の調査内容が報告されている遺跡を中心に概観する。

縄文時代の遺跡は、中切上野遺跡(8)、赤保木遺跡(55)がある。中切上野遺跡の発掘調査²⁾では早期の集石遺構2基、前期の竪穴建物15軒などを検出した。赤保木遺跡では高山市教育委員会が実施した発掘調査³⁾において、中期後半の竪穴建物2軒、掘立柱建物1棟を検出した。また、当センターが実施した発掘調査⁴⁾において、中期中葉から後葉の竪穴建物25軒などを検出した。

弥生時代の遺跡は、野内遺跡(34)、三枝城跡(35)、赤保木遺跡(55)、ウバガ平遺跡(36)がある。野内遺跡はD地区の発掘調査⁵⁾において、後期の竪穴建物を検出した。また、B・C地区の発掘調査⁶⁾においては、建物は検出できなかったものの、当該期の遺物が出土した。三枝城跡の発掘調査⁷⁾では、土坑から前期の柴山出村系土器の壺が出土した。赤保木遺跡の発掘調査⁸⁾では、中期の竪穴建物2軒を検出し、内垣内式の横羽状文甕や櫛描波状文を施す中部高地系の土器が出土した。ウバガ平遺跡の発掘調査⁹⁾では、中期の竪穴建物3軒を検出し、内垣内式の横羽状文甕や栗林式土器の壺が出土した。

古代の遺跡は報告例が多い。生産遺跡としては、赤保木1～6号古窯跡(52)のうち、1～4号古窯が飛騨国分寺の瓦を焼成した古窯と判明した¹⁰⁾。また、当遺跡の周辺には、よしま1～3号古窯跡(43～45)、赤保木8号古窯跡(54)などの灰釉陶器窯跡も分布する。古窯跡以外では、ウバガ平遺跡の発掘調査¹¹⁾において、平安時代の土器焼成坑とみられる遺構2基を検出した。集落跡では、野内遺跡(34)・中切上野遺跡(8)がある。野内遺跡B地区の発掘調査¹²⁾では、平安時代前半の竪穴建物と鍛冶工房を多数検出し、墨書き土器・硯・腰帶具・練釉陶器といった公的施設に関わるとされる遺物が出土した。

表1 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	隨縁寺裏B地点遺跡	集落跡	奈良、平安	32	与島B地点遺跡	散布地	奈良
2	下切遺跡	散布地	縄文、弥生	33	与島C地点遺跡	散布地	古代
3	宮野B地点遺跡	散布地	縄文、弥生	34	野内遺跡	集落跡	縄文～中世
4	中切宮ヶ平遺跡	散布地	縄文、古墳	35	三枝城跡	城郭跡	中世
5	中切王塚古墳	古墳		36	ウバガ平遺跡	集落跡	縄文～古代
6	日燒(原燒き)古窯跡	生産遺跡		37	ウバガ平1～4号古墳	古墳	古墳
7	中切日燒遺跡	散布地	縄文、古代	38	与島1号古墳	古墳	
8	中切上野遺跡	散布地	縄文、奈良	39	与島2号古墳	古墳	近現代
	中切上野古墳群	古墳		40	与島3号古墳	古墳	
9	中切遺跡	古墳	縄文、弥生、奈良	41	与島4号古墳	古墳	
10	中切城跡	城郭跡	中世	42	与島5号古墳	古墳	
11	中切前平城跡	城郭跡	中世	43	与島6号古墳	古墳	
12	四十九院廃寺	寺社跡	弥生、古代	44	よしま1号古窯跡	生産遺跡	平安
13	上ヶ見古墳	古墳	古墳	45	よしま2号古窯跡	生産遺跡	平安
14	東田古墳	古墳	古墳	46	与島A地点遺跡	散布地	縄文
15	冬頭遺跡	散布地	縄文、弥生	47	上切平野古墳群	古墳	
16	流れ田古墳	古墳	古墳	48	平野遺跡	散布地	縄文
17	冬頭王塚古墳	古墳	古墳	49	平野1号古窯跡	生産遺跡	奈良
18	下岡本遺跡	散布地	縄文、奈良、平安	50	平野2号古窯跡	生産遺跡	平安
19	冬頭竹田の湯遺跡	散布地	平安	51	平野3号古窯跡	生産遺跡	平安
20	冬頭山崎1号古墳	古墳	古墳	52	赤保木1～6号古窯跡	生産遺跡	奈良、平安
21	冬頭山崎2号古墳	古墳	古墳	53	赤保木7号古窯跡	生産遺跡	平安
22	冬頭山崎1号横穴	横穴墓	古墳	54	赤保木8～12号古窯跡	生産遺跡	奈良、平安
23	冬頭城跡	城郭跡	中世	55	赤保木遺跡	集落跡	縄文～古墳
24	大洞塚古墳	古墳	古墳	56	赤保木本郷寺遺跡	散布地	縄文、江戸
25	ぼた上遺跡	集落跡	奈良	57	成田正利の墓	墓地	近世
26	赤保木ぼた上1～7号古墳	古墳	古墳	58	ミヨガ平1号古墳	古墳	古墳
27	寺尾古墳群	古墳	古墳	59	ミヨガ平2号古墳	古墳	古墳
28	上切寺尾6号古墳	古墳	古墳	60	下やせ尾1号古墳	古墳	古墳
29	上切(原本)遺跡	散布地	平安	61	下やせ尾2号古墳	古墳	古墳
30	日燒遺跡	散布地	縄文、古墳、奈良	62	眞言屋敷裏山古墳	古墳	古墳
31	隨縁寺裏A地点遺跡	散布地	縄文				

野内遺跡C・D地区の発掘調査¹³⁾では、奈良時代から平安時代の水田を検出した。中切上野遺跡の発掘調査¹⁴⁾では、7世紀末の竪穴建物1軒を検出した。この他に三枝城跡(35)の発掘調査¹⁵⁾では平安時代の山林寺院跡とみられる平場群を検出しておらず、当地域では稀な事例として特筆される。遺跡の北方には、高山盆地と国府・古川盆地を最短ルートで結ぶ寿美峠越えの道が古くから使われており、こうした利便の良さと南東向きの斜面地という立地の良さにより、遺跡が密集する結果となったと考えられる。

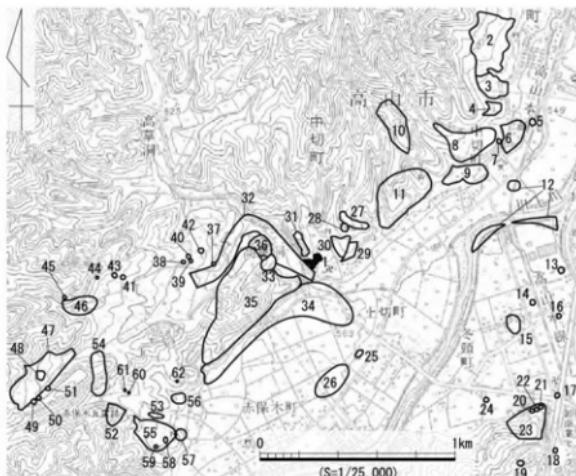


図5 周辺の遺跡分布
国土地理院発行2万5千分の1地形図「飛驒古川」「三日町」をもとに作成

第2章 第2節 注

- 1) 表1及び図5は、岐阜県教育委員会2007『改訂版 岐阜県遺跡地図』をもとに作成した。ただし、公刊後に明らかとなった情報を盛り込むための改訂を加えている。
- 2) 高山市教育委員会1999『中切上野遺跡発掘調査報告書』。
- 3) 高山市教育委員会1993『前平山陵遺跡・赤保木遺跡発掘調査報告書』。
- 4) 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『赤保木遺跡』(財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書第105集)。
- 5) 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『野内遺跡D地区』(財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書第108集)。
- 6) 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2009『野内遺跡B地区』(財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書第111集)、岐阜県文化財保護センター2012『野内遺跡C地区』(岐阜県文化財保護センター調査報告書第122集)。
- 7) 岐阜県文化財保護センター2011『三枝城跡』(岐阜県文化財保護センター調査報告書第116集)。
- 8) 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『赤保木遺跡』(財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書第105集)。
- 9) 岐阜県文化財保護センター2010『ウバガ平遺跡・ウバガ平古墳群』(岐阜県文化財保護センター調査報告書第112集)。
- 10) 高山市教育委員会1975『飛驒国分寺瓦窯発掘調査報告書』。
- 11) 岐阜県文化財保護センター2010『ウバガ平遺跡・ウバガ平古墳群』(岐阜県文化財保護センター調査報告書第112集)。
- 12) 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2009『野内遺跡B地区』(財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書第111集)。
- 13) 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『野内遺跡D地区』(財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書第108集)、岐阜県文化財保護センター2012『野内遺跡C地区』(岐阜県文化財保護センター調査報告書第122集)。
- 14) 高山市教育委員会1999『中切上野遺跡発掘調査報告書』。
- 15) 岐阜県文化財保護センター2011『三枝城跡』(岐阜県文化財保護センター調査報告書第116集)。

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の基本層序

発掘作業前の発掘区の土地利用状況は、北地区が水田、南地区が宅地・畑地であつた。いずれの地区も緩やかに高低差があるものの、1つの区画がほぼ平坦である。発掘作業では、山際の基盤層(III層)が削平され、低い部分に盛土層(Ib層)の堆積が確認できることから、山際の傾斜を削平し、低い部分に盛土することで平坦面を造り出したと理解できる。北地区は南地区よりも一段高い位置にある。北地区東側部分の標高値は約 575.0m と高く、山際の西側部分の標高値は約 573.2m と低くなる谷状の地形である。一方、南地区は、山際(北側)の標高値が約 570.4m と高く、南側の標高値が約 569.2m と低いことから、南北方向に傾斜した地形を造成したと考えられる。

基本層序は、試掘・確認調査の結果から I から III 層を設定した。さらに、I 層は層相の違いから a から c に細分した。Ia 層は表土層、Ib 層は現代の造成・整地層、Ic 層は表土・整地層下に残る旧表土層である。II 層は縄文時代から近世までの遺物包含層である。黒褐色シルトで、層厚は 0.2m から 0.3m である。III 層は基盤層で、北地区では灰黄色粘土層、南地区では黄褐色砂質シルト層である。調査では III 層上面を遺構検出面とした。発掘作業で確認した発掘区壁面の土層柱状図(図 7)及び位置を(図 6)示した。北地区は、基本層序 1 で旧表土(Ic 層)下に遺物包含層(II 層)、基本層序 2 で旧表土(Ic 層)下に遺物包含層(II 層)及び砂礫層(NR 1 埋土)、基本層序 3 で旧表土(Ic 層)下に遺物包含層(II 層)と基盤層(III 層)、基本層序 4 で表土(Ib 層)下に砂質シルト層(NR 1 埋土)が堆積する。基本層序 2 に堆積する砂礫層は、試掘・確認調査(図 2)の結果においても、試掘坑 6・11 で同様の砂礫層が層厚 0.6m から 0.8m と厚く堆積する。このことから、北地区は谷状であった地形が、砂礫の堆積により埋没したと考えられる。南地区は、基本層序 5・6 で旧表土(Ic 層)下に基盤層(III 層)、基本層序 7 で整地層(Ib 層)下に遺物包含層(II 層)、基本層序 8 で整地層(Ib 層)下に遺物包含層(II 層)及び粘質シルト・砂礫層(NR 4 埋土)が堆積する。南地区的西側は、遺物包含層が無いか層厚が薄い状態である。一方、同地区東側の遺物包含層の層厚は 0.2m から 0.3m と厚い。また、基本層序 7 付近では、谷状であった地形を埋没させる砂礫の堆積層の上層に遺物包含層が堆積していることが分かる。

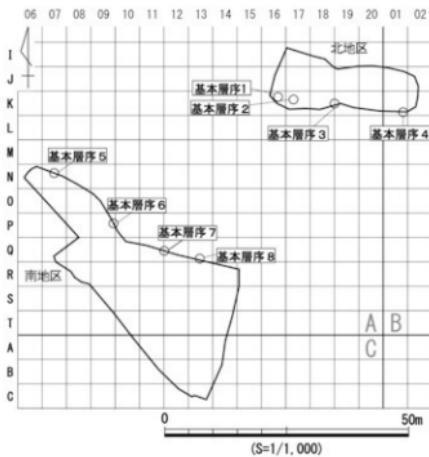


図 6 基本層序の位置

8 第3章 調査の成果

北地区基本層序

L=575.00m

基本層序 1

L=574.00m

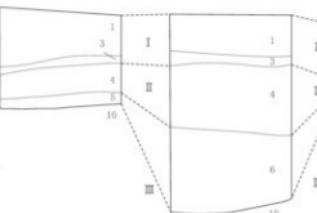
L=573.00m

L=572.00m

基本層序 2

基本層序 3

基本層序 4



1. 2.0Y3/3 線ナリープ褐色シルト ややしまる、粘性なし 径3~5cmの亜角礫を1%含む 建材等を含む Ia層
2. 2.0Y3/4 黒色シルト ややしまる、粘性なし 径3~5cmの亜角礫を20%含む Ia層
3. 2.0Y3/3 黒色ナリープ褐色砂質シルト ややしまる、粘性なし、径1~3cmの亜角礫を1%含む Ic層
4. 10Y2/1 黒色粘質シルト ややしまる、粘性あり 径3~5cmの亜角礫を5%含む 固粒を含む II層
5. 10Y4/3 にじ・黄褐色の砂質シルト しまる、粘性なし NR1埋土
6. 2.0Y3/3 黑色粘質シルト しまる、粘性あり 径3~5cmの亜角礫を5%含む 径3~30cmの円錐礫を3%含む NR1埋土
7. 2.0Y5/2 墓灰褐色砂礫 しまる、粘性なし 径3~20cmの亜角礫を15%含む NR1埋土
8. 2.0Y5/2 墓灰褐色砂 しまる、粘性なし、径3~20cmの亜角礫を15%含む NR1埋土
9. 2.0Y5/2 墓灰褐色砂 しまる、粘性なし、径3~20cmの亜角礫を15%含む Ⅲ層
10. 7.0Y3/3 黄オーラン色粘土 しまる、粘性あり 固層

南地区基本層序

L=571.00m

基本層序 5

基本層序 6

基本層序 7

基本層序 8

L=569.00m

L=568.50m

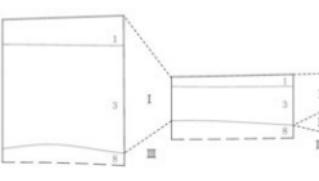


図7 基本層序

第2節 遺構・遺物の概要

1 遺構の概要

発掘調査により、自然流路及び古代の遺構を確認した。報告に当たり、新たに遺構種別ごとの通番(遺構番号)を与えた。遺構の種類、遺構記号(括弧内)、分類内容は、以下のとおりである。

- 溝 (S D) 長細い平面形で、かつ自然流路ではなく人為的に掘られたと判断できる遺構。
 - 堅穴建物 (S I) 地表を掘り下げて床面をつくり、その内部に柱穴・炉・カマドなど建物の付属施設やその跡を確認できる遺構。
 - 土坑 (S K) 人為的に掘られた穴のうち、柱穴・溝等の性格が特定できなかった遺構。
 - カマド (S L) カマド構築材の存在や周囲の土と比較し、被熱による変色が確認できる遺構。
 - 柱穴 (S P) 柱痕跡が確認できる、または遺構底部で柱の当たりの痕跡が確認できる遺構。
堅穴建物内の遺構のうち、柱が存在していたと想定される穴も含む。
 - 自然流路 (N R) 水が流れた痕跡が確認でき、かつ人為的に掘られていないと判断できるもの。
- 今回の調査で確認した遺構数は、溝 9条(堅穴建物の壁際溝を含む)、堅穴建物 7軒、土坑 171 基、カマド(焼土を含む) 6基、柱穴 19 基、自然流路 6条である(表2)。堅穴建物については残存状況が悪く、後世の土地改良により建物の床面付近まで削平されている例が多い。土坑と判断したものの中には、堅穴建物と同様の規模・形状の遺構であったが、床面・柱穴・カマドの焼土面等が確認されないため土坑と判断したものがある。カマドについては堅穴建物と同様に残存状況が悪く、カマド構築材は確認できていないが、焼土を確認でき、この焼土が堅穴建物の北壁に位置することからカマドの焼土面と判断したものがある。

地区別の傾向をみると、北地区の自然流路 1条を除く全ての遺構を南地区で検出している。南地区内では東寄りに遺構が集中する。南地区的遺構種類毎の割合は、溝 4.2%、堅穴建物 3.2%、土坑 78.8%、カマド焼土 2.8%、柱穴 8.7%、自然流路 2.3%と土坑の割合が多い傾向にある。

遺構の所属時期は、遺物の出土状況や時期、遺構の重複関係・配置を検討して決定した。近代以降の生活痕跡等は遺構と



図8 主要遺構配置図

10 第3章 調査の成果

して扱わず、平面図ではケバ付き破線記号で上端平面形のみを表示し区別した。

各々の遺構の寸法や出土遺物片数については、「遺構観察表」(表4～7)と「出土遺物一覧表」(表24～26)に掲載した。なお、遺構の深さについては、遺構内の柱穴や土坑など、付属遺構を除いた箇所での計測値を記載した。第3節では遺構種別毎に個別遺構図を掲載し、個別に報告する。個別遺構図の掲載縮尺は、原則として、自然流路は100分の1か200分の1、竪穴建物及び付属施設は50分の1、他の遺構は40分の1である。

2 出土遺物の概要

当遺跡で出土した遺物の総点数は、表3のとおりである。出土遺物を大きく分類すると、土器類(1718点、約98.5%)、石器類(24点、約1.4%)、金属製品(2点、約0.1%)となる。土器類が大半であり、土器類全体に占める時期別点数の割合は、縄文時代約22.7%、弥生時代約3.4%、古代約71.8%、中世約0.9%、近世約1.2%である。掲載遺物点数は合計120点であり、接合前破片数の6.9%である。その選択においては、遺構出土遺物のうち遺跡の性格や時期等を検討する上で必要なものや、遺物包含層出土遺物のうち遺跡の性格や消長を示すもの、分類別の代表的なものを中心とした。

遺物の分類については、主に本文末に示した文献を参照した。なお、整理等作業において、石黒立人(弥生土器)、岩田崇(縄文土器)、谷口和人(縄文土器)、馬場伸一郎(弥生土器)、渡邊博人(須恵器・灰釉陶器)各氏より遺物の所属時期、产地、器種名等について、指導・助言をいただいた。ただし、本書における記載内容の責任は編集者にある。

本報告書における遺物実測図の縮尺は3分の1である。

表2 掘出遺構一覧表

遺構種別	記号	検出遺構数			挿図掲載 遺構数
		北地区	南地区	総数	
溝	SD	0	9	9	2
竪穴建物	S I	0	7	7	7
土坑	SK	0	170	170	19
炉・カマド<焼土>	S L	0	6	6	5
柱穴	S P	0	20	20	20
自然流路	NR	1	5	6	4
総 数		1	217	218	57

表3 出土遺物片数一覧表

種別	北地区	南地区	総数	本書掲載数
縄文時代	縄文土器	13	376	389
弥生時代	弥生土器	1	58	59
古代	土師器	35	205	240
	須恵器	55	803	858
	灰釉陶器	9	126	135
士器類	山茶碗	0	1	1
	片口鉢	0	1	1
	常滑産陶器	5	1	6
	中国産磁器	0	3	3
	土師器皿	0	4	4
	瀬戸美濃産陶磁器	0	12	12
	肥前産陶磁器	0	2	2
	中国産磁器	0	4	4
	土製品	0	1	1
	陶磁器	0	3	3
	小計	118	1,600	1,718
その他	石器	0	23	23
	石製品	0	1	1
	金属製品	0	2	2
	総数	118	1,626	1,744
				120

第3節 遺構

1 自然流路と自然流路内出土遺物

自然流路の堆積層中からは古代の遺物を中心に縄文時代から中世までの遺物が出土した。自然流路は人為的に掘られた溝ではないが、第2項で説明する古代の遺構との先後関係があり、遺構の立地や時期決定資料となるため、項を設け説明をする。

N R 1 (遺構: 図9、遺物: 図42)

北地区の西側に位置し、標高 573.8m から 573.3m 程の高さのⅢ層上面で検出した。南側が低くなる緩傾斜地である。自然流路の上端幅は最大約 11.6m を測る。平面形は不定形で、立ち上がりの角度は西側が緩やか、東側が急傾斜である。埋土は4層に分層した。埋土3層は灰黄褐色砂礫土で厚く堆積する。分級が悪いことから土石流堆積物と考えられる。この埋土3層が堆積することで自然流路がほぼ埋没し緩傾斜地になり、その後に埋土1・2層が堆積したと考えられる。

遺物は、埋土1層で111点出土した。内訳は縄文土器11点、弥生土器1点、土器器(1~3)30点、須恵器(4)55点、灰釉陶器(5)9点、中世陶器5点である。埋土1層出土の中世陶器は、N R 1の北側で出土し、出土範囲にまとまりをもつ。一方、須恵器・灰釉陶器は散在した出土分布ではあるが、N R 1の南側に多く分布する傾向がある。須恵器は7世紀後葉から8世紀前葉のものであることから、8世紀前葉以前に自然流路が埋没し、傾斜地となった後に古代以降のものが廃棄されたものと考えられる。

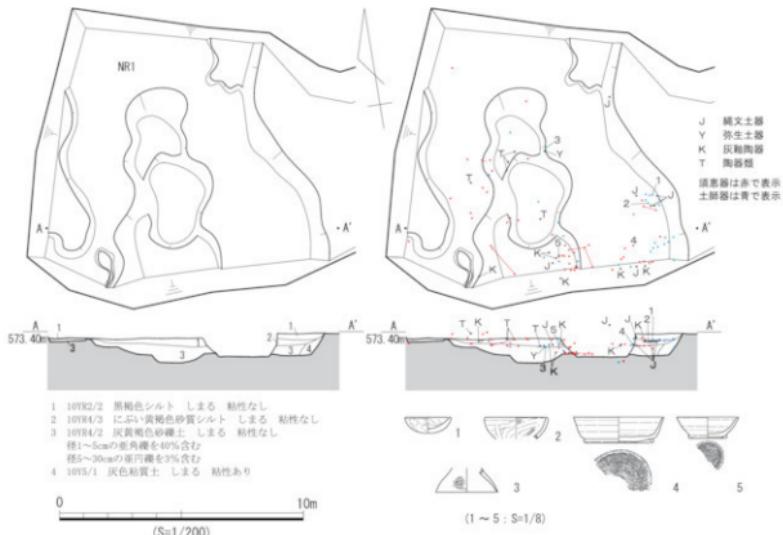


図9 N R 1実測図

12 第3章 調査の成果

N R 2 (遺構 : 図 10・11、遺物 : 図 42・43)

南地区の南側に位置し、標高 569.5mから 568.9m程の高さのⅢ層上面で検出した。南及び東側が低くなる緩傾斜地である。Ⅲ層上面で確認した。自然流路の上端幅は最大約 4.0mを測る。平面形は不定形で、立ち上がりの角度は緩やかである。B-B' の土層図から、埋土は 1 層から 5 層がシルト層、6 層より下層は砂・粘土が主体となる。埋土 6 層は西から東方向に傾くラミナがみられることから、自然流路底面の堆積物と考えられる。埋土 1・2 層は埋土 3・4 層に比べ、礫を多く含む。崩積性の堆積物か判断はできないが、礫を多く含むことから、二次堆積の可能性がある。

遺物は埋土 1 層から埋土 4 層で 191 点出土した。須恵器と灰釉陶器の出土標高は、全体的に灰釉陶器の方が高い値を示す。層位間の接合では、埋土 2 層と埋土 4 層出土の須恵器の接合(33)がある。埋土 1 層からは縄文土器(6) 2 点、土師器(7) 3 点、須恵器(8~15・17) 95 点、灰釉陶器(16・18・19) 24 点、鉄釘(20) 1 点が出土している。遺物は 7 世紀後葉から 10 世紀後半までのものが認められ、特に 7 世紀後葉から 8 世紀前葉の須恵器が多い。埋土 2 層からは縄文土器 2 点、土師器(21) 11 点、須恵器(22~27) 24 点、灰釉陶器 3 点、石器(28) 2 点が出土した。7 世紀後半から 8 世紀後半のものと 10 世紀後半のものが主体である。埋土 3 層からは須恵器(29・30) 10 点が出土し、図化した 29 以外は 7 世紀後葉から 8 世紀前葉のものである。埋土 4 層からは須恵器(31~34) 12 点、土師器 2 点が出土し、7 世紀後葉から 8 世紀前葉のものである。埋土 1・2 層出土の遺物は 7 世紀後半から 10 世紀と時期幅があるが、埋土 3・4 層のものは 7 世紀後葉から 8 世紀前葉が主体になることから、埋土 6 層までは河川により堆積し、その後 7 世紀後葉から 8 世紀前葉頃のものがまとまって廃棄されたと考えられる。埋土 1・2 層については、本来は埋土 3・4 層中にある遺物を含みながら、二次堆積した可能性が高い。

N R 3 (遺構 : 図 12・13、遺物 : 図 43)

南地区的東側に位置し、標高 568.5mから 567.8m程の高さで検出した。N R 3 は古代の竪穴建物及び方形土坑を完掘後に確認し、N R 4 の埋土 2 層(暗灰褐色砂礫土)上面で全体を検出した。N R 3 の上端幅は最大 2.3mを測る。平面形は不定形で、立ち上がりの角度は緩やかである。埋土は 7 層に分層でき、埋土 3 層が砂層である以外、全て砂質シルトである。

遺物は、埋土 1 層で 14 点出土した。内訳は縄文土器(35) 11 点、弥生土器(36・37) 3 点である。埋土 1 層出土の弥生土器から、弥生時代中期後葉頃に N R 3 が埋没したと考えられる。

N R 4 (遺構 : 図 12・13、遺物 : 図 43)

南地区的東側に位置し、標高 569.8mから 568.1m程の高さのⅢ層上面で検出した。南及び東側が低くなる緩傾斜地である。N R 4 の上端幅は東肩が発掘区外となるため不明であるが、発掘区内で 16.3 m を確認した。平面形は不定形で、立ち上がりの角度は緩やかである。埋土は 4 層に分層でき、埋土 1 層が粘質シルト、埋土 2 層が砂層、3 層が砂礫土、埋土 4 層が粘土である。試掘・確認調査では N R 1 と N R 3 とをつなぐ谷状の地形を確認しており、層相から埋土 3 層が N R 1 の埋土 3 層に対応すると考えられる。

遺物は、埋土 1 層で 295 点出土した。内訳は縄文土器(38~46・48) 217 点、弥生土器(47・49~52) 8 点、土師器(53・54) 24 点、須恵器(55~60) 38 点、灰釉陶器 1 点、中世陶器(61) 1 点、石器(62~65) 6 点である。縄文土器は、後期後葉が主体である。縄文土器の出土位置は N R 4 の中央と南東側にまとまりをもつ。特に 46 は摩耗が少ない大きな破片であり、また出土位置も集中することから、一括廃

棄された可能性がある。須恵器は1点を除き、すべて7世紀後葉から8世紀前葉のものである。須恵器の出土位置は、NR 3の南側にまとまりをもつ。灰釉陶器・中世陶器それぞれ1点と少なく、出土位置も上方に位置することから混入の可能性がある。このことから、縄文時代後期頃には自然流路が埋没し傾斜地となり、小規模な自然流路NR 3が存在した段階があり、その後、NR 3が埋没し、古代のものが廃棄されたと考えられる。

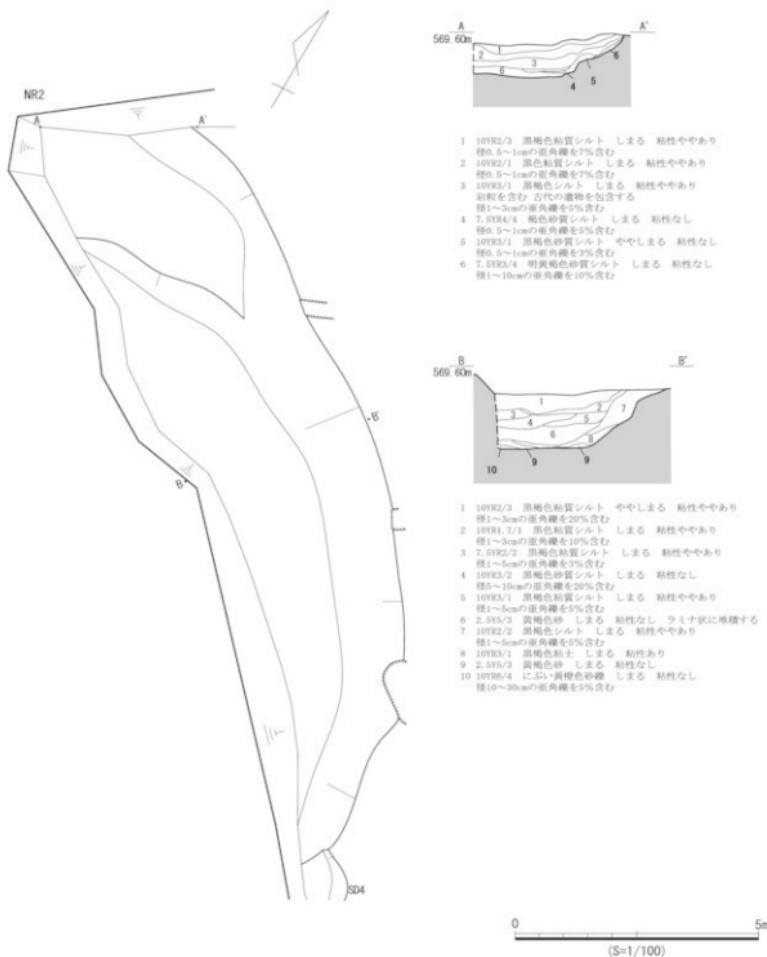


図10 NR 2実測図(1)

14 第3章 調査の成果

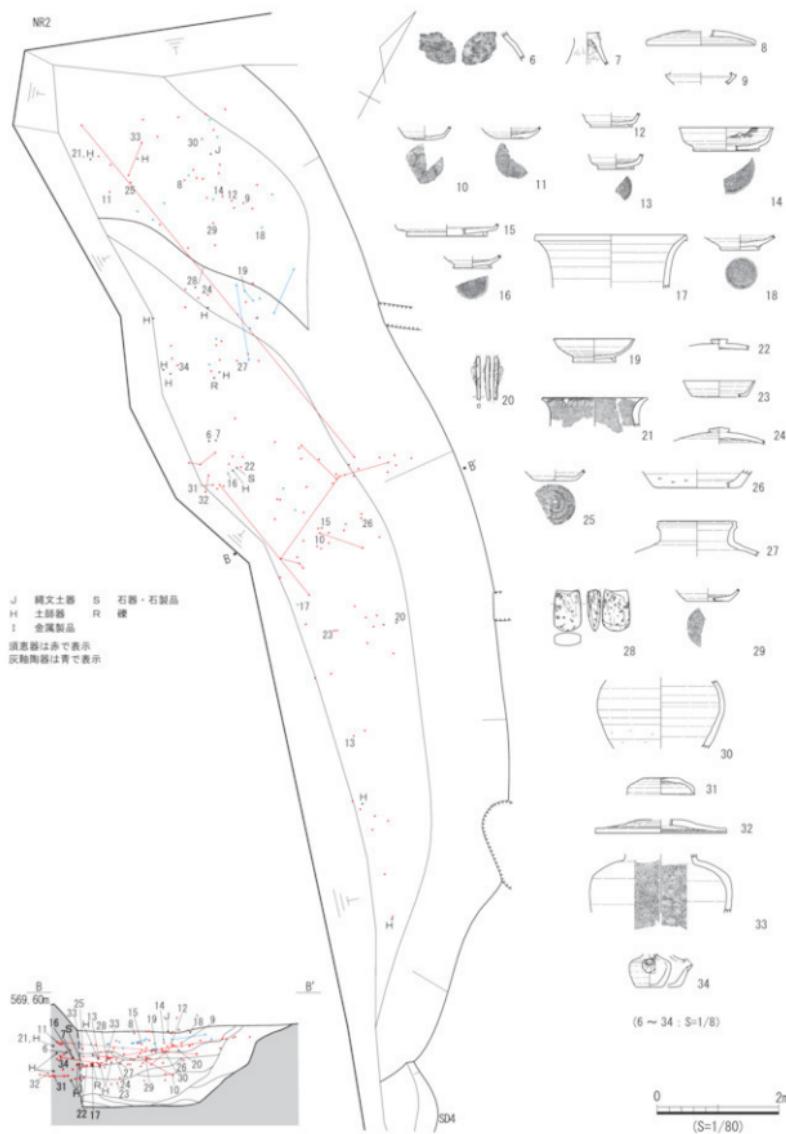


図 11 NR2 実測図(2)

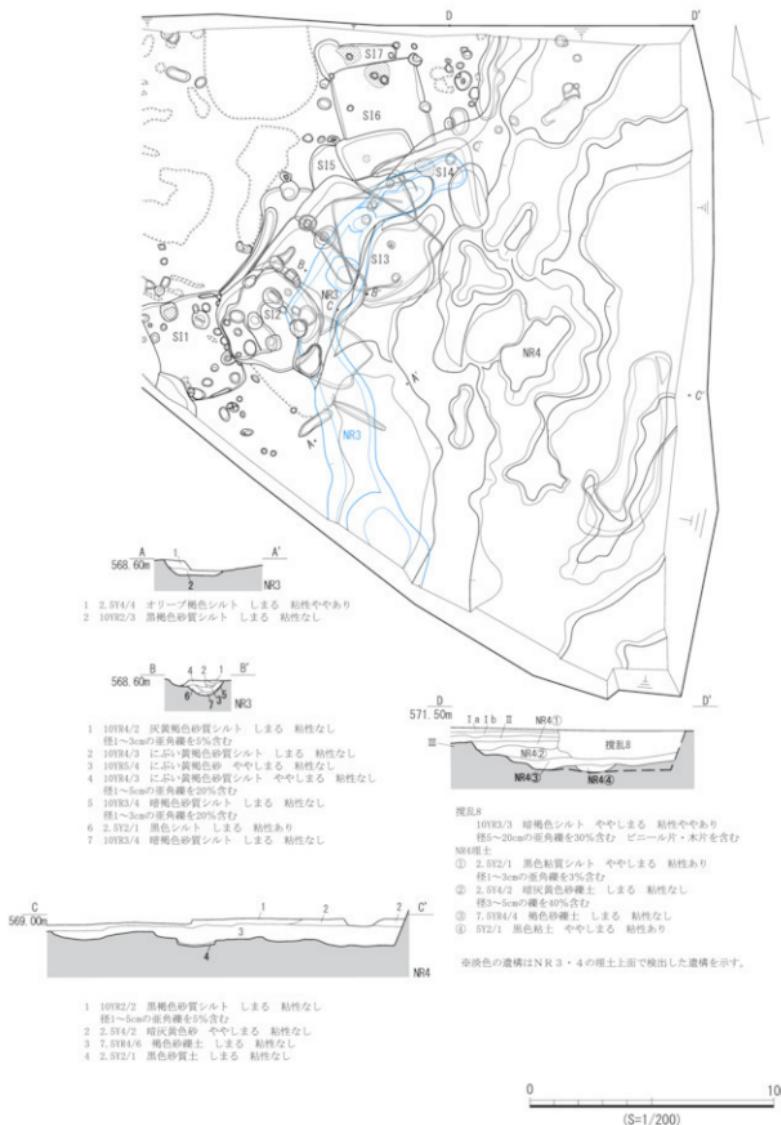


図12 NR3・4実測図(1)

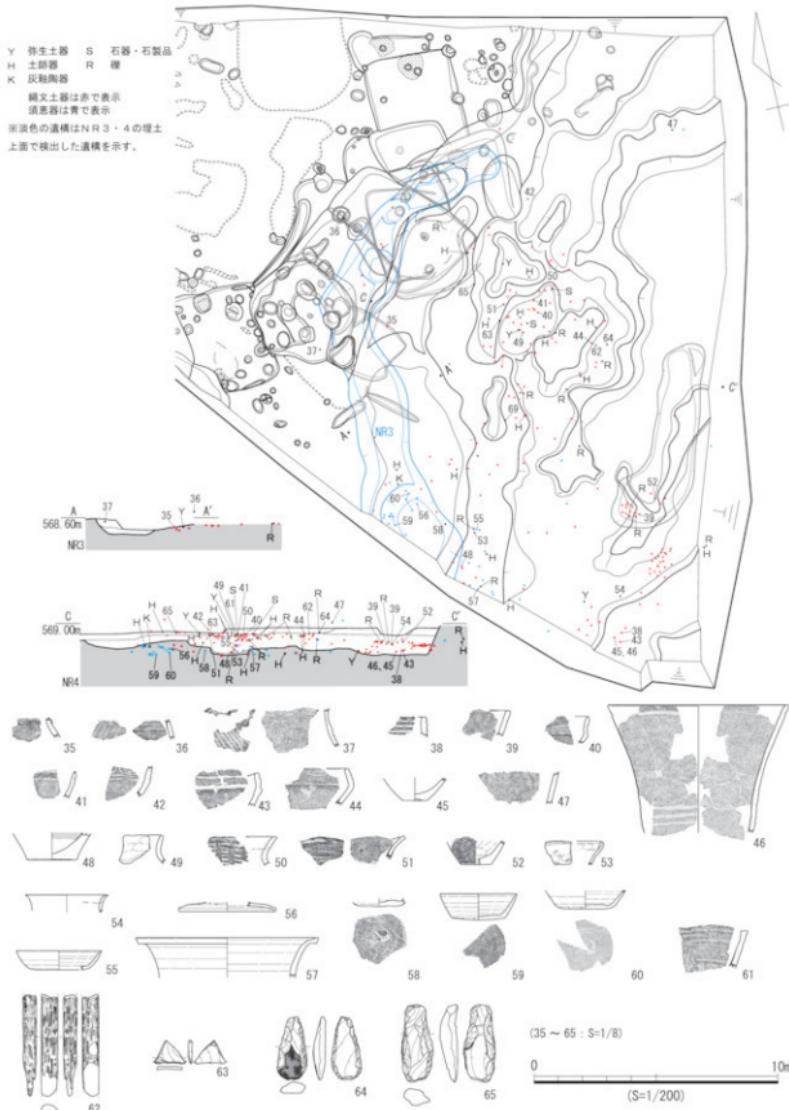


図 13 NR3・4 実測図(2)

2 古代の遺構

南地区で堅穴建物7軒、堅穴建物とほぼ同規模の方形土坑5基を確認した。堅穴建物は後世の土地改良により床面付近まで削平を受け、残存状況が悪い。特にS I 3は、堅穴建物内の床面やカマドを確認できなかったため、堅穴部の遺構は基本的に床面より下で検出した遺構である。

(1) 堅穴建物

S I 1(遺構: 図14~16、遺物: 図45)

位置・検出状況 南地区中央のAS10からAT10グリッドに位置し、標高568.8mから568.6m程の緩傾斜地で検出した。III層上面で検出したが、建物西側はNR2により侵食される。建物の東側はS I 2と重複し、S I 2より後出す。

規模・形状 堅穴の西側がNR2・SD4により削りとられるが、南北長5.02m、残存部分の東西長3.39m、深さ0.11mを測る。堅穴の平面形状は正方形である。堅穴の壁面角度は急傾斜である。

埋土 2層に分層した。埋土1・2層は硬化した土である。埋土1層は黄褐色ロームブロック土の混入もあることから、人為的な堆積と考えられる。また、埋土1・2層上面は平坦になるため、床面と考えられる。

堅穴部 埋土1・2層上面で土坑14基、柱穴3基、壁際溝3箇所、カマド1基を確認した。柱穴はSP3で柱痕跡を確認した。平面的な位置関係から、SP2からSP4が柱穴と考えられる。また、SP1はNR2底面検出の遺構であるが、想定する柱の位置に近いことから柱穴の可能性がある。壁際溝は検出した範囲の壁面を途切れながら巡る。カマドは柱穴から想定できる建物の北壁中央に位置する。カマドの構築土は確認できなかったが、焼土を含む埋土1層中で支脚と考えられる直立する棒状礫を確認した。

出土遺物 埋土上層から弥生土器1点、土器器1点が出土した。この他に小破片の胴部片が出土したが、いずれも図化していない。カマド埋土から須恵器(72)が出土した。

時期 カマド埋土から出土した土器から、7世紀後葉から8世紀前葉の遺構と考える。

S I 2(遺構: 図17・18、遺物: 図45)

位置・検出状況 南地区中央のAS10からAS11グリッドに位置し、標高568.9mから568.5m程の緩傾斜地で検出した。建物西側はIII層上面で検出したが、建物東側はNR3の埋土上で検出した。建物の北側はS I 1、北東側はSK110と重複し、S I 1に先行し、SK110より後出す。

規模・形状 堅穴の西側がS I 1に切られるが、長辺4.40m、短辺3.97m、深さ0.60mを測る。堅穴の平面形状は正方形である。堅穴の壁面角度は急傾斜である。

埋土 9層に分層した。埋土はいずれもしまりがある。埋土2・4・6・7はほぼ水平の堆積で黄褐色ロームブロック土の含まないことから、自然堆積と考えられる。埋土8・9層上面で硬化した面を確認した。上面がほぼ平坦になることから床面と考えられる。埋土8・9層は黄褐色ロームブロック土の混入であることから、人為的な堆積と考えられる。

堅穴部 9層及び基盤層上面で土坑4基と柱穴5基、掘方内側に沿う幅広の溝(SD7)、SD7底面で柱穴2基(SP8・20)を確認した。柱痕跡を確認できなかったが、平面的な位置関係から、SP5・6・9・10(柱配置1)、SP7・8・20(柱配置2)が柱穴と考えられる。SP20がSD7・SP10に先行することから、柱配置1は柱配置2の改築後の柱配置と考える。壁際溝・カマドは確認でき

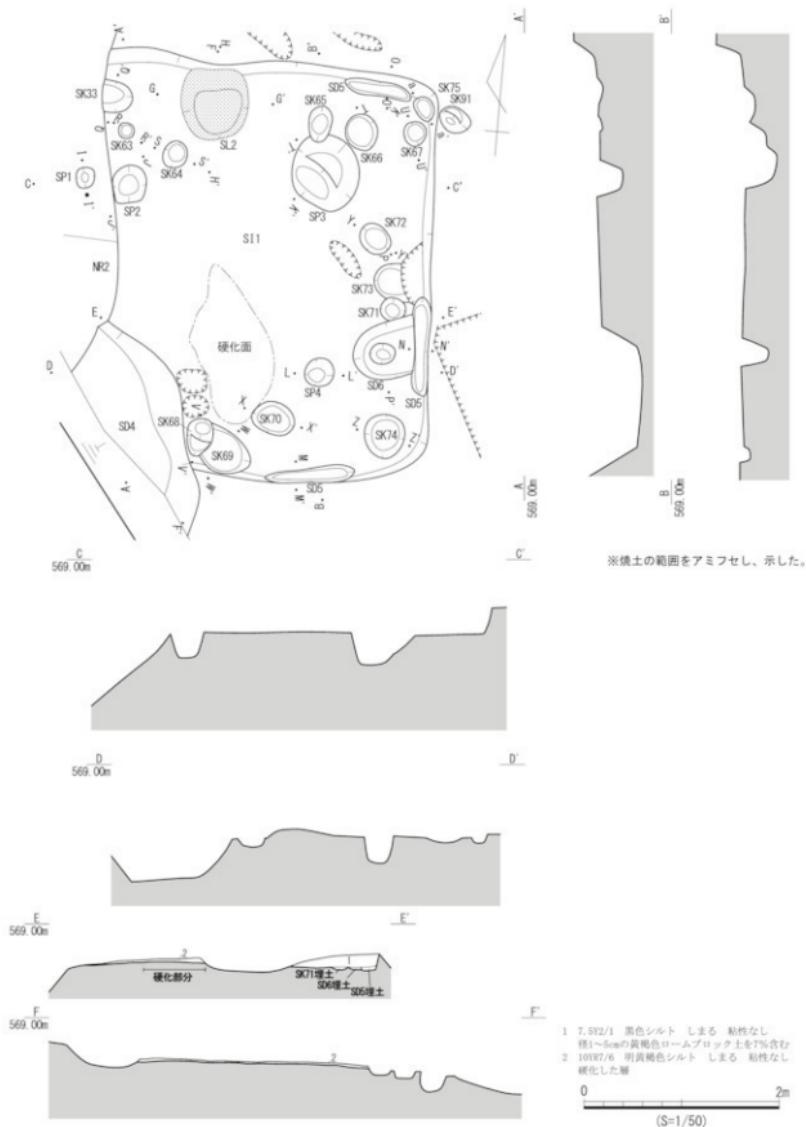


図 14 S I 1 実測図(1)

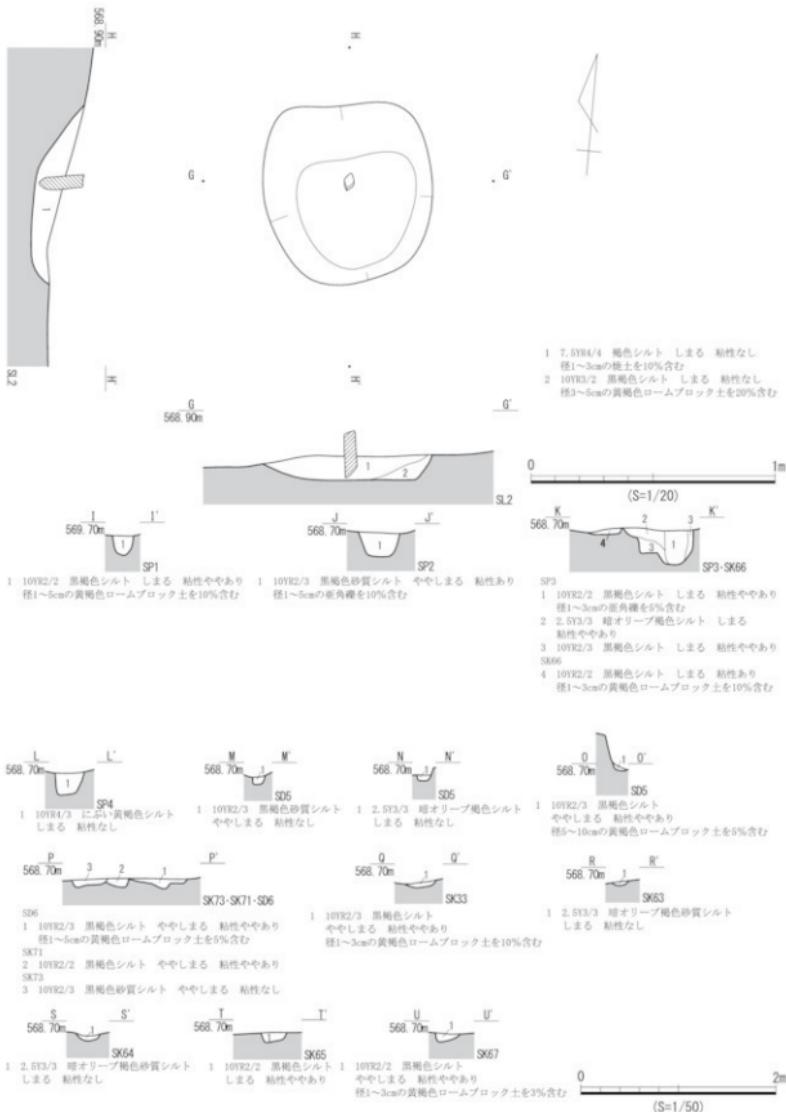


図15 S I 1実測図(2)

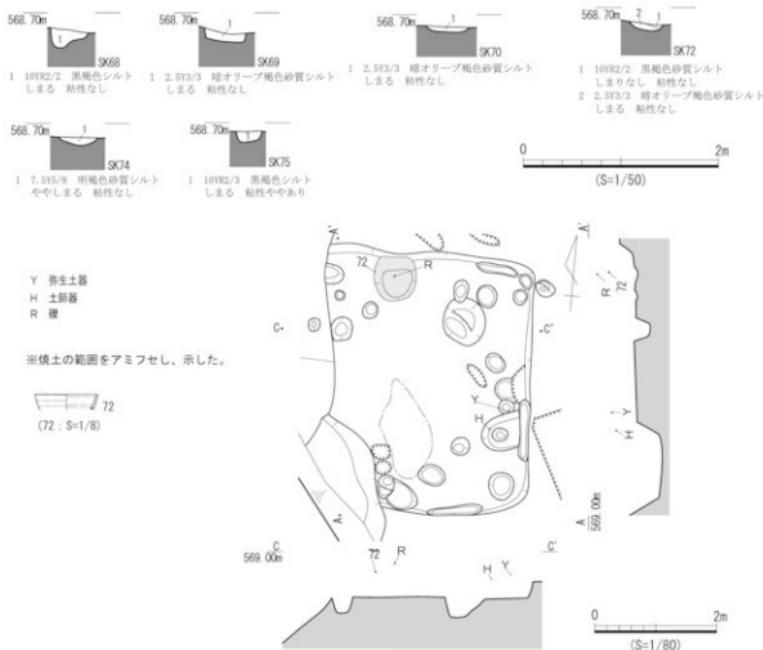


図 16 S I 1 実測図(3)

なかつた。

出土遺物 埋土の下層を中心に縄文土器(66)8点、弥生土器(67~71)15点、土師器3点、須恵器1点、石器1点が出土した。68の出土状況は、竪穴の南壁中央付近に集中する。接合関係はないが、同様に横羽縄文を施すN R 3出土遺物38と同一個体の可能性が高い。本遺構の廃絶に伴い壁面が崩落し、N R 3・4の埋土にあったものが入りこんだと考えられる。この他にSD 7から縄文土器1点、土師器(73)3点が出土した。

時期 S I 1に先行することから、7世紀後葉から8世紀前葉以前の遺構と考える。

S I 3 (遺構: 図19、遺物: 図45)

位置・検出状況 南地区中央のAS 11からAS 12グリッドに位置し、標高569.5mから568.7m程の緩傾斜地で検出した。建物はN R 3・4の埋土上で検出した。建物は方形土坑のSK 110、SK 113からSK 119と重複するが、先後関係はSK 110・113・114・118・119より後出する。

規模・形状 竪穴の東側を搅乱坑により削平されるが、南北長3.92m、残存部分の東西長2.89m、深さ0.43mを測る。竪穴の平面形状は方形である。竪穴の壁面角度は急傾斜である。

埋土 2層に分層した。1・2層ともにややしまる。カマドや硬化した層を確認できないことから、

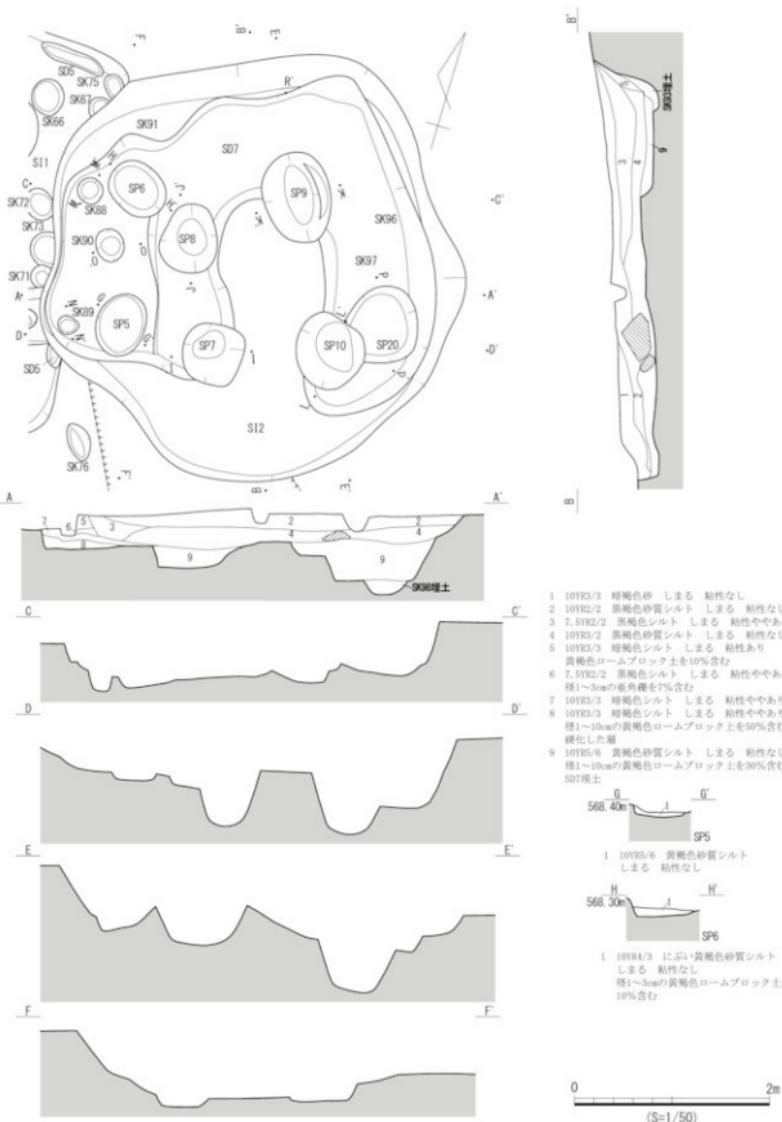
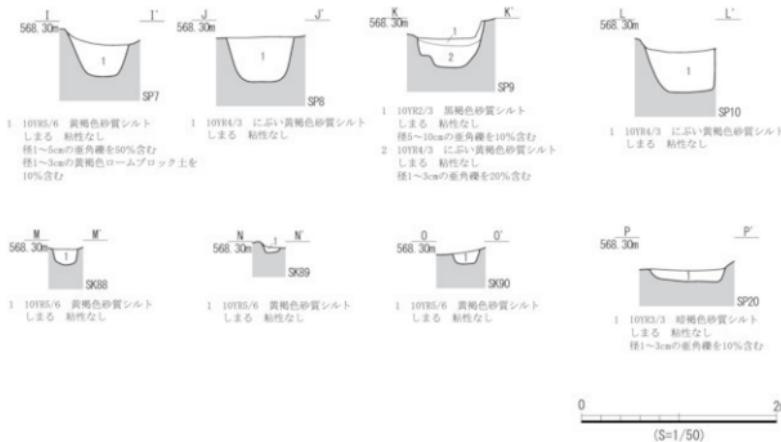


図17 SI2実測図(1)

22 第3章 調査の成果



0 2m
(S=1/50)

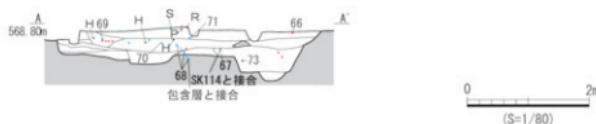
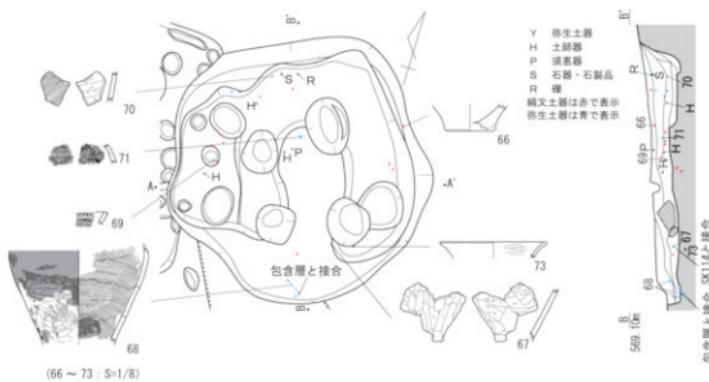


図 18 S I 2 実測図(2)

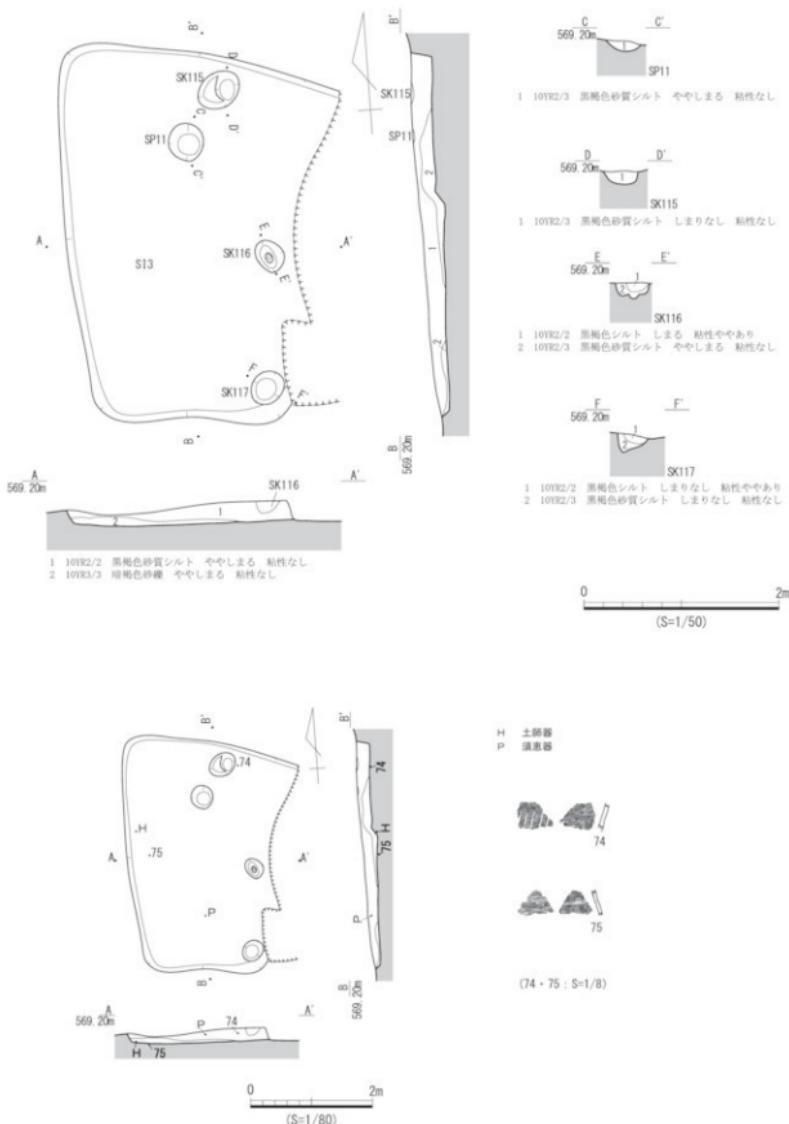


図 19 S I 3実測図

1・2層ともに掘方の埋土と考えられる。

豊穴部 埋土1層上面で土坑3基、柱穴1基を確認した。柱痕跡を確認できなかつたが、平面的な位置関係から、S P11を柱穴と判断した。壁際溝・カマドは確認できなかつた。

出土遺物 埋土1層から須恵器1点、下層から弥生土器(74・75)2点、土師器1点が出土した。

時期 出土した須恵器は甕の胴部小片のため図化しなかつたが、7世紀後葉から8世紀前葉のものであることから当該期の遺構と考える。

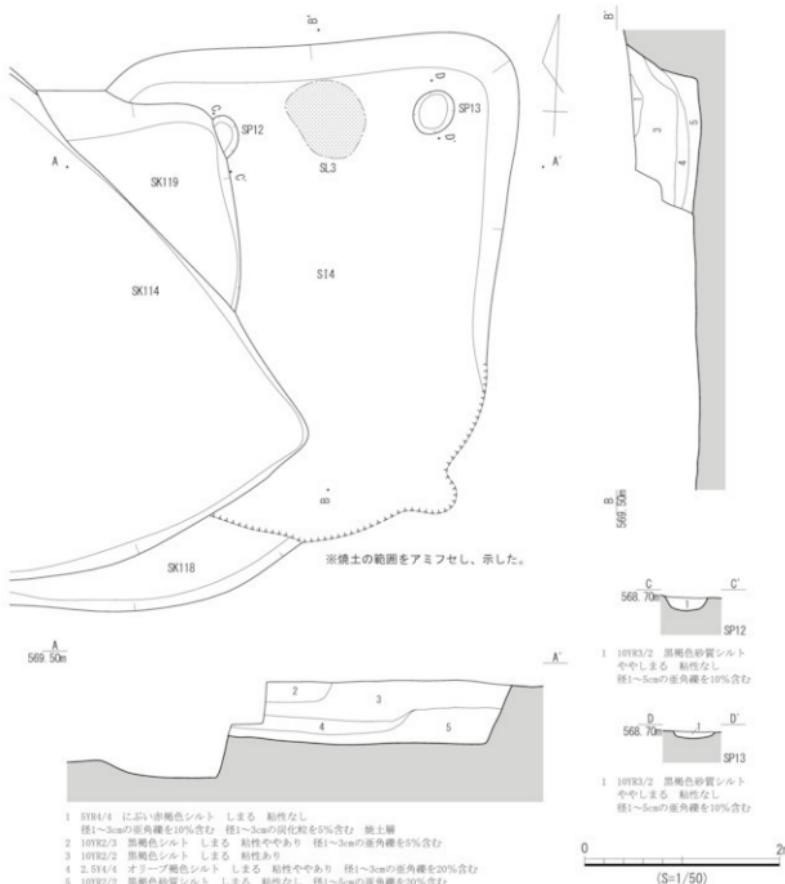


図20 S14実測図(1)

S I 4 (遺構: 図 20・21、遺物: 図 45)

位置・検出状況 南地区中央の A R 12 から A S 12 グリッドに位置し、標高 569.4m から 568.6m 程の緩傾斜地で検出した。建物は N R 3・4 の埋土上で検出した。S I 5・6 と重複し、先後関係は後出する。

規模・形状 壁穴の西側が SK 119・114 に削平されるが、残存部分で南北長 4.24m、東西長 3.72m、深さ 0.74m を測る。壁穴の平面形状は方形である。壁穴壁面の角度は急傾斜である。

埋土 5 層に分層した。埋土は 5 層ともしまりがある。埋土 2・3 層上面でカマドの焼土面を確認したが、硬化した面を確認できないことから、5 層ともに掘方の埋土と考えられる。

壁穴部 埋土 2・3 層上面で焼土 1 箇所、柱穴 2 基を確認した。焼土 (S L 3) は建物北壁中央に位置することからカマドの焼土面と考えられる。柱穴は柱痕跡を確認できなかったが、平面的な位置関係から、S P 12・13 と考えられる。壁際溝は確認できなかった。

出土遺物 埋土 1 層を中心に散在した状態で、縄文土器 (76) 7 点、弥生土器 1 点、須恵器 1 点、石器 1 点が出土した。

時期 出土した須恵器は环の体部片で器表面が剥落しているために図化しなかったが、7 世紀後葉から 8 世紀前葉のものであり、当該期の遺構と考える。

S I 5 (遺構: 図 22)

位置・検出状況 南地区中央の A R 12 グリッドに位置し、標高 569.4m から 569.1m 程の緩傾斜地で

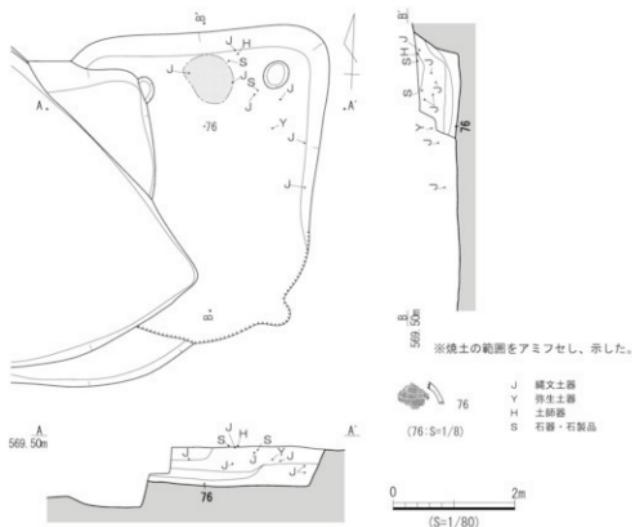


図 21 S I 4 実測図(2)

検出した。建物はIII層上面で検出した。S I 4・S K114・119と重複し、先後関係はS I 4・S K114・119に先行する。

規模・形状 堅穴の南側がS I 4・S K114・119に削平されるが、残存部分で長辺3.20m、短辺2.12m、深さ0.22mを測る。堅穴の平面形状は方形と考えられる。堅穴壁面の角度は急傾斜である。

埋土 埋土は1層でしまりがある。埋土1層上面でカマドの焼土面を確認していることから、埋土1層上面は床面と考えられる。埋土1層は黄褐色ロームブロック土の混入はないが、亜角礫を多く含むことから人為的な堆積と考えられる。

堅穴部 埋土1層上面で土坑2基、柱穴2基、焼土1箇所を確認した。S P15は柱痕跡を確認できなかつたが、平面的な位置関係から、柱穴と判断した。焼土(S L 4)は建物北壁中央に位置することからカマドの焼土面と考えられる。壁際溝は確認できなかつた。

出土遺物 出土遺物はなかった。

時期 出土遺物から遺構の時期を特定できないが、遺構の先後関係からS I 4に先行する遺構であるため、所属時期は8世紀前葉以前の遺構と考える。

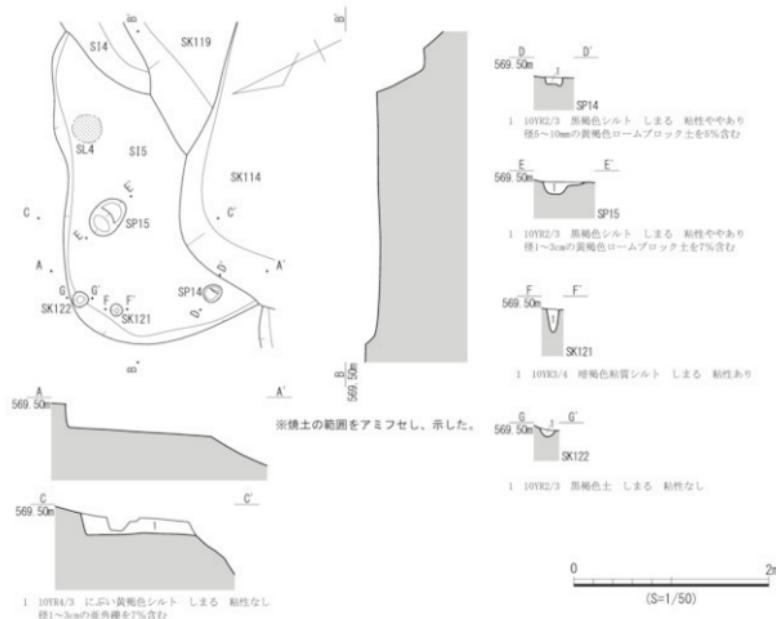


図 22 S I 5実測図

S I 6(遺構: 図23・24、遺物: 図45)

位置・検出状況 南地区中央のA R12 グリッドに位置し、標高 569.7mから 569.3m程の緩傾斜地で検出した。建物はIII層上面及びN R 3 の埋土上で検出した。建物はS I 4・7、SK172 と重複し、先後関係はS I 4・SK172 に先行し、S I 7 に後出す。

規模・形状 壓穴の南側がSK172 に削平されるが、残存部分の南北長 4.24m、東西長 3.72m、深さ 0.29mを測る。壓穴の平面形状は長方形である。壓穴壁面の角度は急傾斜である。

埋土 3層に分層した。埋土はいざれもしまりがある。埋土3層上面でカマドの焼土面し、3層上面に硬化した層を確認できることから、3層上面が床面と考えられる。1・2層は焼土ブロック土の混入があることから、カマド破壊土の可能性がある。埋土1層は黄褐色ロームブロック土の混入はないが、亜角礫を多く含むことから人為的な堆積と考えられる。

竪穴部 埋土3層上面で土坑7基、柱穴2基、焼土(S L 5) 1箇所、S L 5底面でS P17・SK138、掘方底面でSK132を確認した。S P17では柱痕跡を確認した。平面的な位置関係から、S P16・18 が柱穴と判断した。焼土は建物北壁中央に位置することからカマドの焼土面と考えられる。壁際溝は確認できなかった。

出土遺物 埋土1・2層を中心に縄文土器1点、土師器1点、須恵器(77・78) 9点が出土した。この他にSK140 から須恵器3点が出土した。

時期 出土した須恵器から7世紀後葉から8世紀前葉の遺構と考える。

S I 7(遺構: 図25、遺物: 図45)

位置・検出状況 南地区中央のA Q12 グリッドに位置し、標高 569.8m程の平坦地で検出した。北側はIII層上面で検出した。建物はS I 6と重複し、先後関係はS I 6に先行する。

規模・形状 壓穴の南側がS I 6 に削平されるが、残存部分で東西長 4.00m、残存部分で南北長 3.95m、深さ 0.25mを測る。壓穴の平面形状は不明である。壓穴壁面の角度は急傾斜である。

埋土 埋土は2層でしまりがある。埋土1層上面でカマドの焼土面を確認したことから、1層上面が床面と考えられる。埋土2層は黄褐色ロームブロック土の混入はないが、亜角礫を多く含むことから人為的な堆積と考えられる。

竪穴部 埋土1層上面で土坑6基、柱穴1基、焼土1箇所を確認した。S P19 は柱痕跡を確認できなかつたが、平面的な位置関係から、柱穴と判断した。焼土は建物北壁に位置することからカマドの焼土面と考えられる。壁際溝は確認できなかつた。

出土遺物 埋土1層から弥生土器5点、土師器(79~81)35点、須恵器4点が出土した。

時期 出土した須恵器は細片のため図化しなかつたが、7世紀後葉から8世紀前葉のものであることから当該期の遺構と考える。

(2) 土坑

S K110(遺構: 図26・27、遺物: 図45)

位置・検出状況 南地区中央のA S11 グリッドに位置し、標高 568.6m程の緩傾斜地で検出した。III層上面で検出した。遺構はS I 2・3と重複し、先後関係はS I 2に先行し、S I 3より後出す。しまりのある埋土4層上面で遺構検出作業を実施したが、遺構はなく、掘方底面で3基の小土坑を確認した。規模や形状が竪穴建物と類似するが、カマド・壁際溝・柱穴がないことから土坑とした。

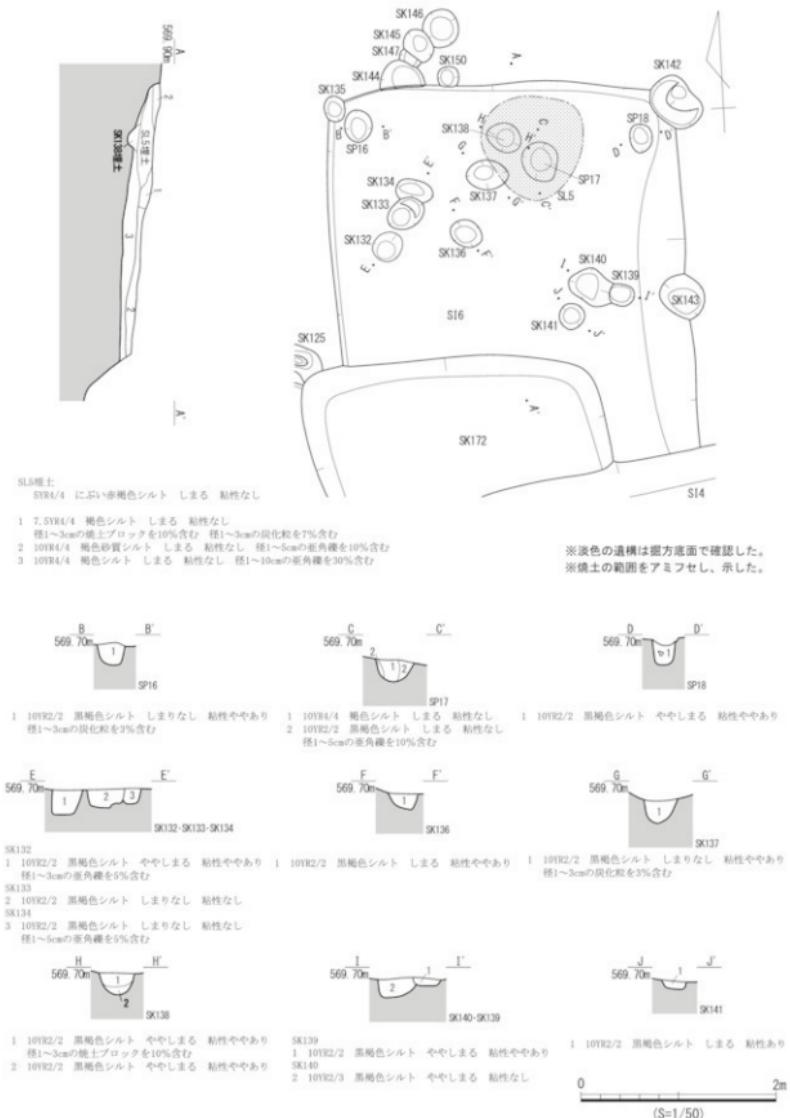


図 23 S 16 実測図(1)

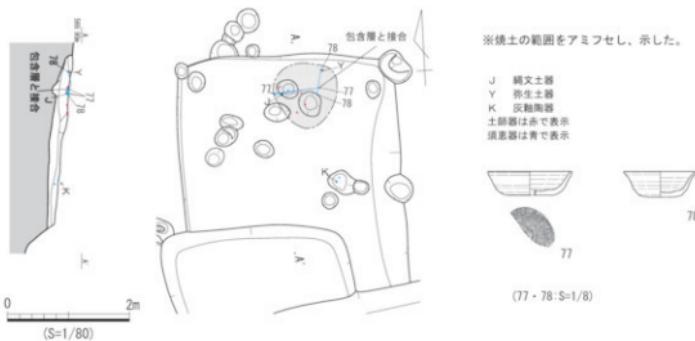


図24 S I 6実測図(2)

規模・形状 遺構の東側がS I 2に削平されるが、残存部分で長辺4.43m、短辺2.96m、深さ0.74mを測る。平面形状は方形または長方形と考えられる。掘方の立ち上がり角度は急傾斜である。

埋土 埋土は7層で4・5・7層にしまりがある。

出土遺物 埋土から繩文土器6点、弥生土器(82・83)2点、土師器(84)6点が出土した。

時期 出土遺物から遺構の時期を特定できないが、遺構の先後関係からS I 2・3に先行する遺構であることから所属時期は8世紀前葉以前の遺構と考える。

S K113(遺構:図27)

位置・検出状況 南地区中央のAR11からAS11グリッドに位置し、標高568.7m程の緩傾斜地で検出した。III層上面で検出した。遺構はS I 3と重複し、先後関係はS I 3に先行する。埋土1層上面と掘方底面で遺構検出作業をしたが、SK113内に遺構はなかった。

規模・形状 遺構の大半がS I 3に削平されるが、隅部の形状から平面形状は方形または長方形と考えられる。掘方の立ち上がり角度は急傾斜である。

埋土 埋土は1層でややしまりがある。

出土遺物 出土遺物はなかった。

時期 出土遺物がなく、遺物から遺構の時期を特定できないが、遺構の先後関係はS I 3に先行する遺構であることから所属時期は8世紀前葉以前の遺構と考える。

S K114(遺構:図28・29、遺物:図45)

位置・検出状況 南地区中央のAR11からAS12グリッドに位置し、標高569.2m程の緩傾斜地で検出した。NR3の埋土上で検出した。遺構はS I 3、SK110・118・119と重複し、先後関係はSK110・118・119に先行し、S I 3に後出する。硬化部分を確認した埋土5層上面で遺構検出作業をしたが、遺構はなかった。規模や形状が竪穴建物と類似するが、カマド・壁際溝・柱穴がないことから土坑とした。

規模・形状 土坑の南東側が削平されるが、残存部分で南北長5.59m、東西長3.85m、深さ0.76m

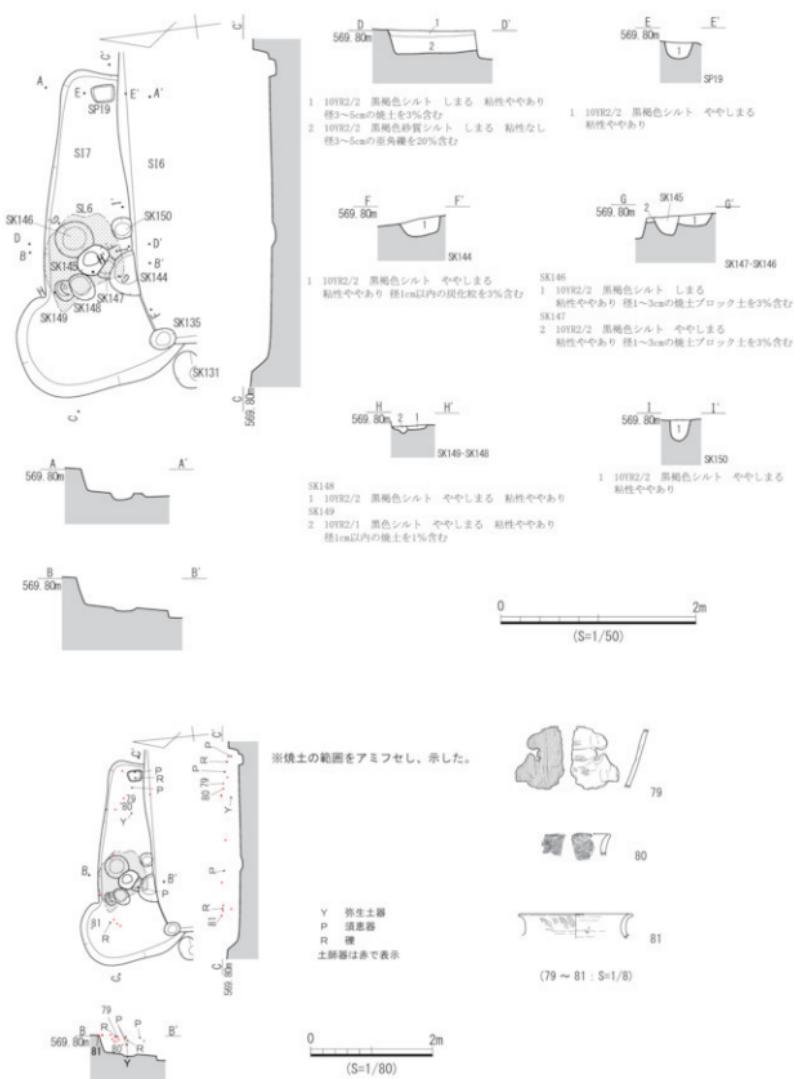


図25 S17実測図

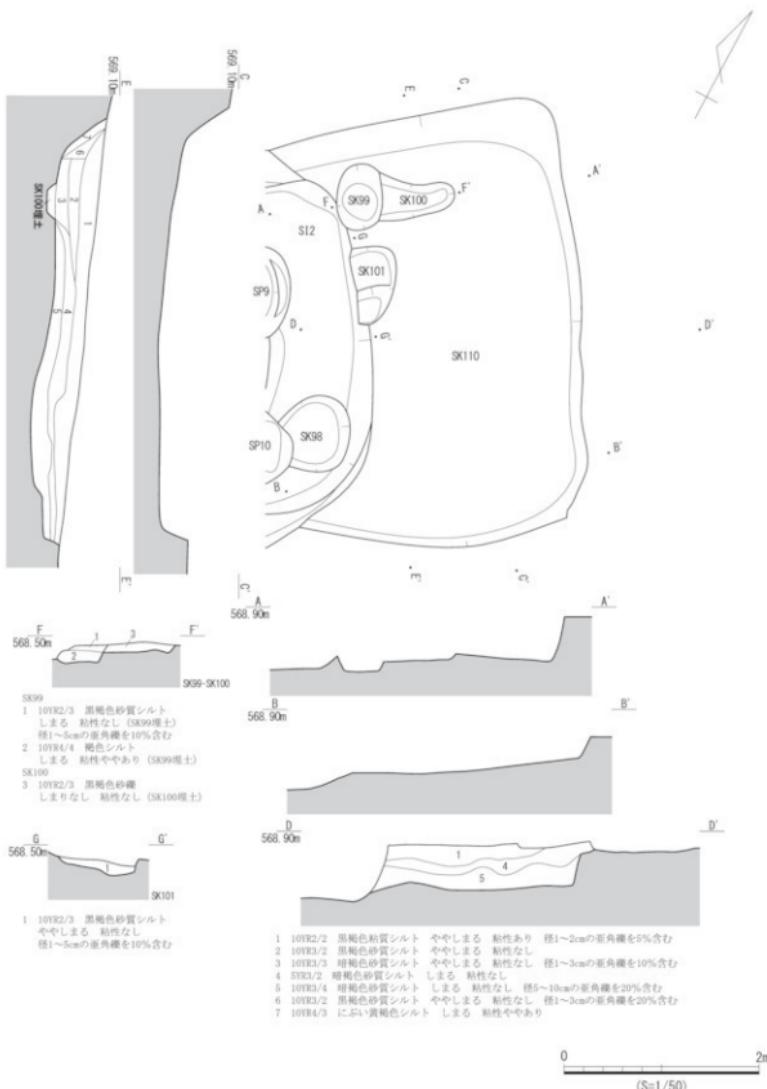


図26 SK110 実測図(1)

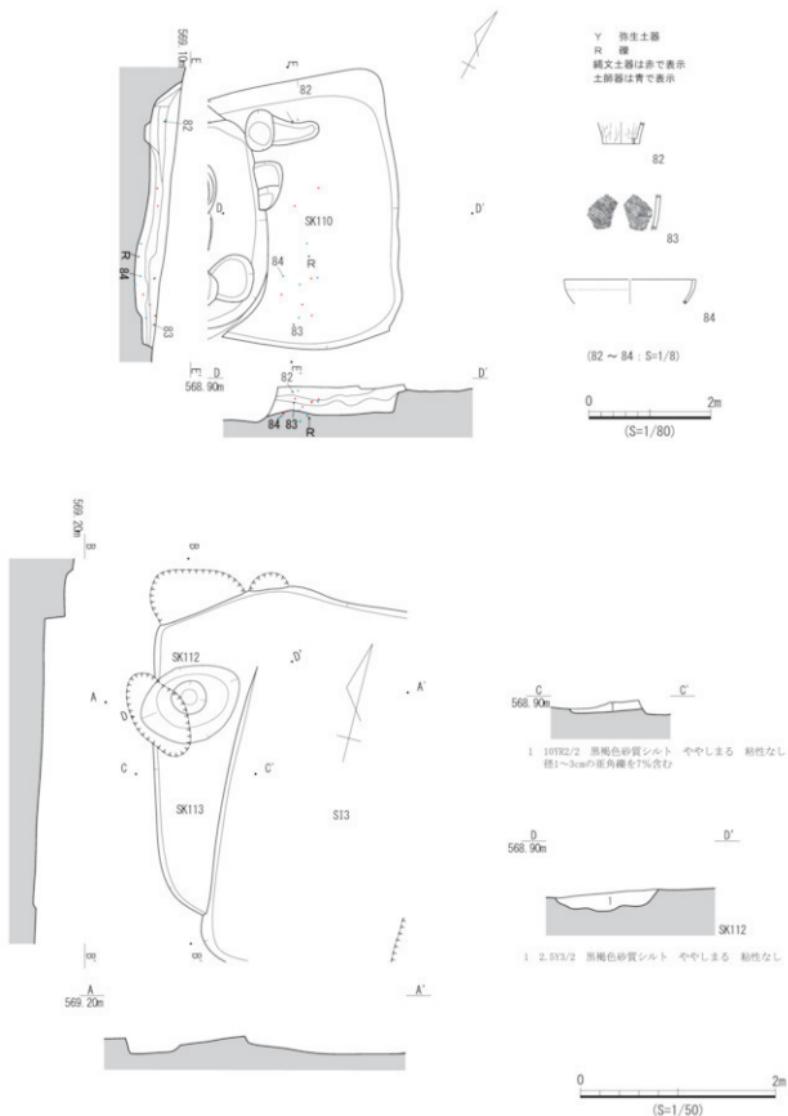
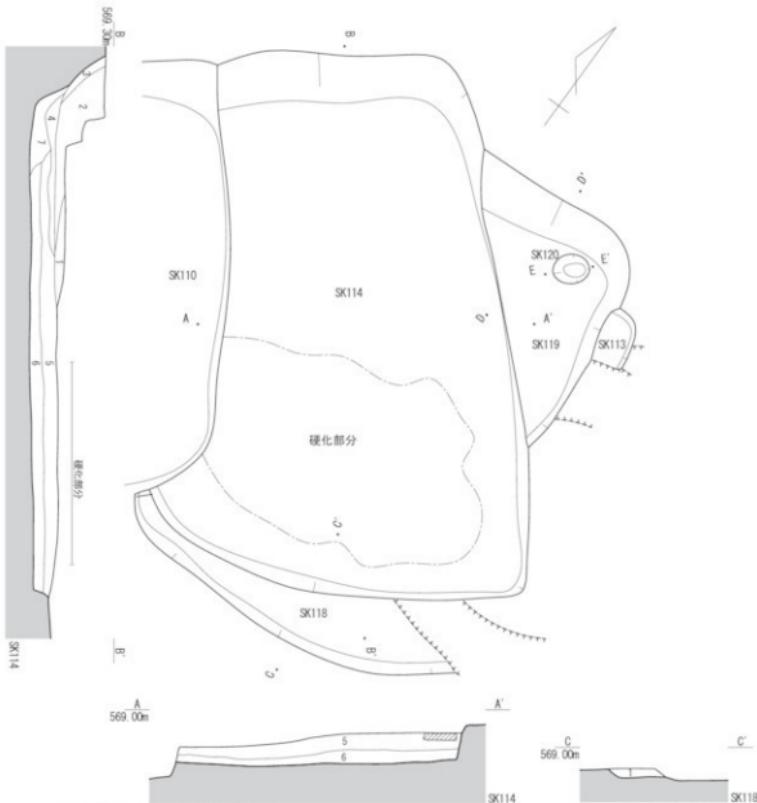


図 27 SK110 実測図(2)・SK113 実測図



- 1 10YR2/3 黒褐色砂質シルト しまる 粘性なし
- 2 10YR2/2 黒褐色シルト しまる 粘性ややあり
- 3 10YR3/3 にぬい黄褐色シルト しまる 粘性ややあり 径1~5cmの粗角礫を10%含む
- 4 10YR2/2 黒褐色シルト ややしまる 粘性なし
- 5 10YR3/3 増褐色砂質シルト ややしまる 粘性なし
- 6 2.5Y3/2 増褐色砂質シルト しまる 粘性なし 径3~10cmの粗角礫を20%含む
- 7 10YR2/2 黒褐色シルト しまる 粘性ややあり 径5~10cmの黄褐色ロームブロック土を20%含む

- 1 10YR3/2 黑褐色砂質シルト ややしまる 粘性なし

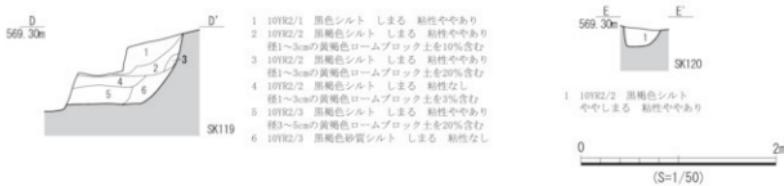


図 28 SK114・119 実測図(1)

を測る。平面形状は方形または長方形と考えられる。掘方の立ち上がり角度は急傾斜である。

埋土 埋土は7層で埋土4層以外はしまりがある。

出土遺物 埋土上層を中心とした状態で、縄文土器22点、弥生土器(85~87)5点、土師器(88)3点、石器4点が出土した。弥生土器1点はS I 2出土の67と接合する。

時期 出土遺物から遺構の時期を特定できないが、遺構の先後関係はS I 3に先行し、S I 5に後出する遺構であることから、所属時期は7世紀後葉から8世紀前葉の遺構と考える。

S K119(遺構:図28・29、遺物:図45)

位置・検出状況 南地区中央のAR12グリッドに位置し、標高569.2m程の緩傾斜地で検出した。III層上面で検出した。遺構はSK114と重複し、先後関係はSK11に先行する。

規模・形状 遺構の大半がSK114に削平されるため、規模・形状は不明である。掘方の立ち上がり角度は急傾斜である。

埋土 埋土は6層でいずれの層にもしまりがある。埋土1層上面で小土坑(SK120)1基を確認した。SK120は堅穴建物の隅部に位置する柱穴の可能性があるものの、SK119の規模・形状が不明であることやカマド・壁際溝を確認できることから土坑とした。

出土遺物 埋土4層中から縄文土器(89)2点が出土した。

時期 出土遺物から遺構の時期を特定できないが、遺構の先後関係はS I 3に先行し、S I 5に後出する遺構であることから、所属時期は7世紀後葉から8世紀前葉の遺構と考える。

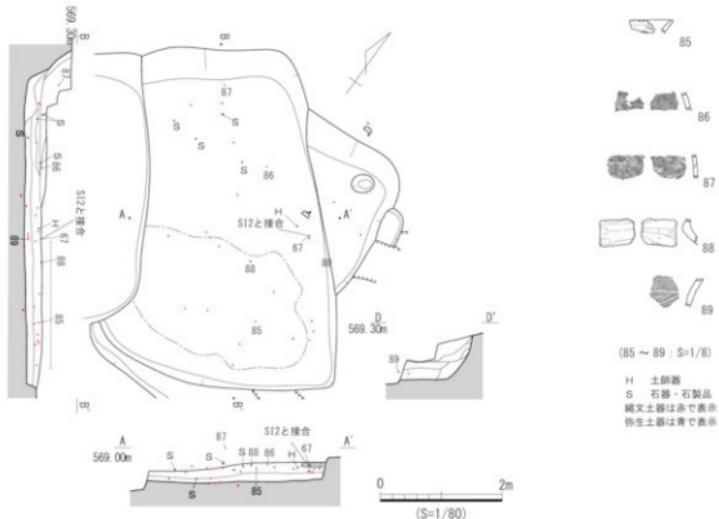


図29 SK114・119実測図(2)

SK171(遺構:図30)

位置・検出状況 南地区中央のAR12からAR13グリッドに位置し、標高569.4m程の緩傾斜地で検出した。Ⅲ層上面で検出した。遺構はSI4・5・6と重複し、先後関係はSI4・5に先行し、SI6より後出する。

規模・形状 遺構の南側がSI4に削平されるが、残存部分で東西長3.12m、南北長1.82m、深さ0.49mを測る。平面形状は方形または長方形と考えられる。掘方の立ち上がり角度は急傾斜である。

埋土 埋土は3層でしまりがある。埋土1層上面で4基の小土坑を確認した。これらの土坑は竪穴建物を想定した場合、カマド付近に該当するが埋土中に焼土や炭化物は確認できなかった。規模や形状が竪穴建物と類似するが、カマド・壁際溝・柱穴が不明であることから土坑とした。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

時期 出土遺物から遺構の時期を特定できないが、遺構の先後関係から、所属時期は7世紀後葉から8世紀前葉の遺構と考える。

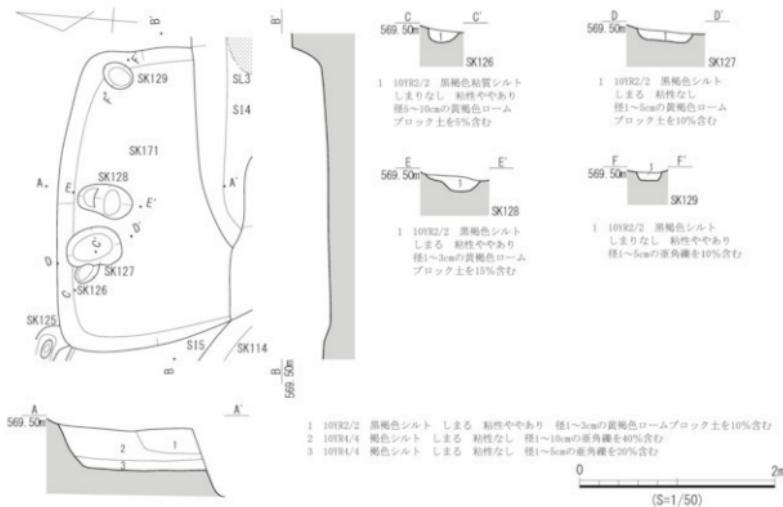


図30 SK171実測図

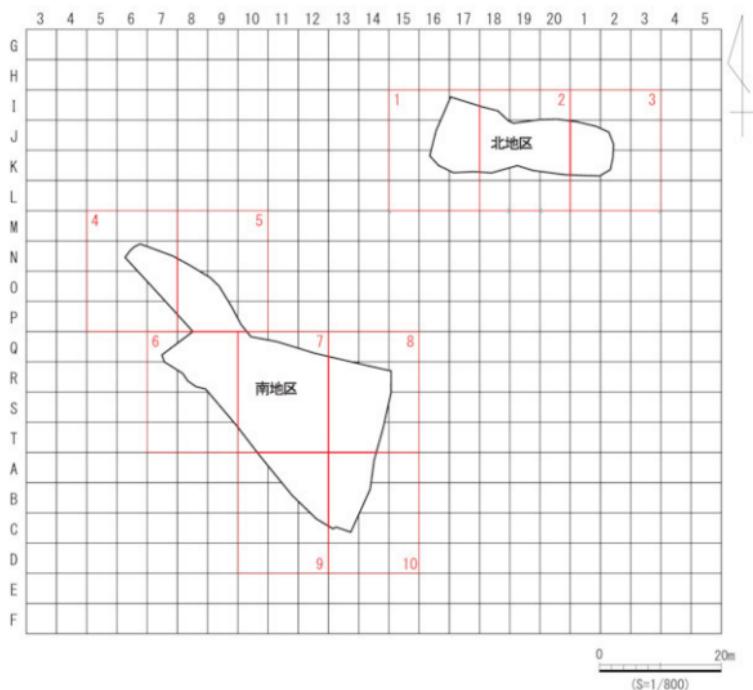


図 31 発掘区図面割り図

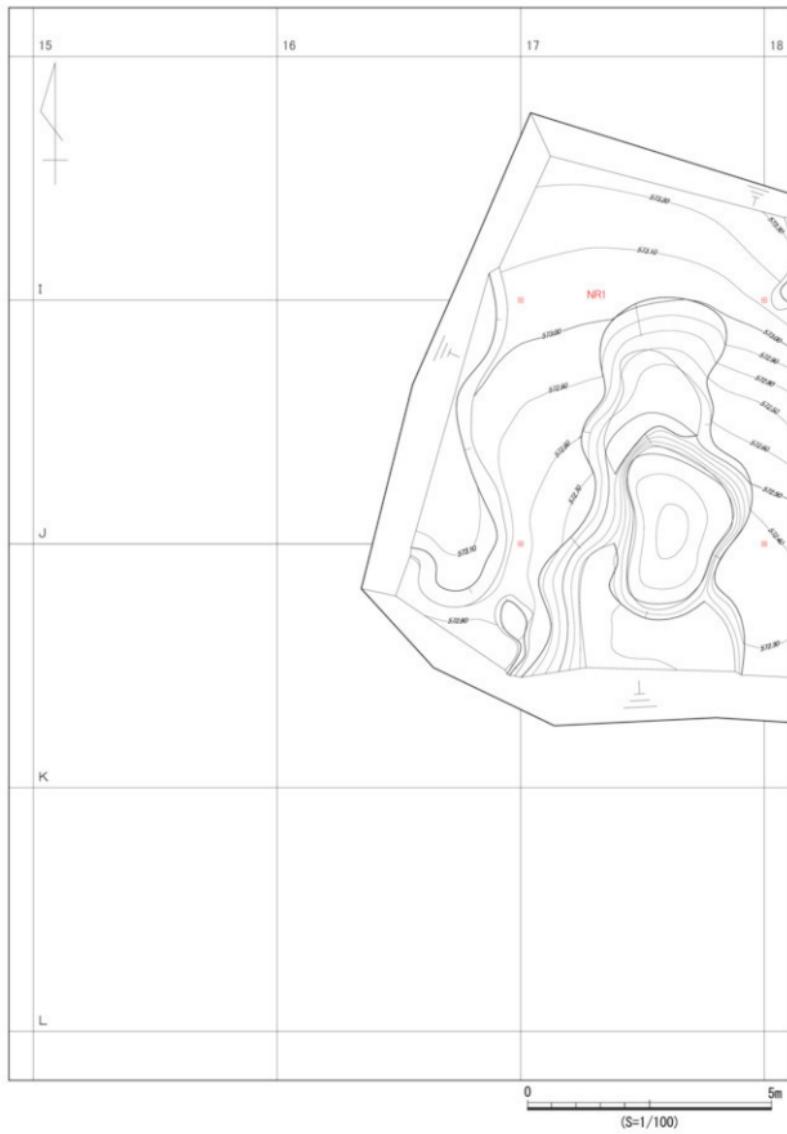


図 32 遺構全体図分割図(1)

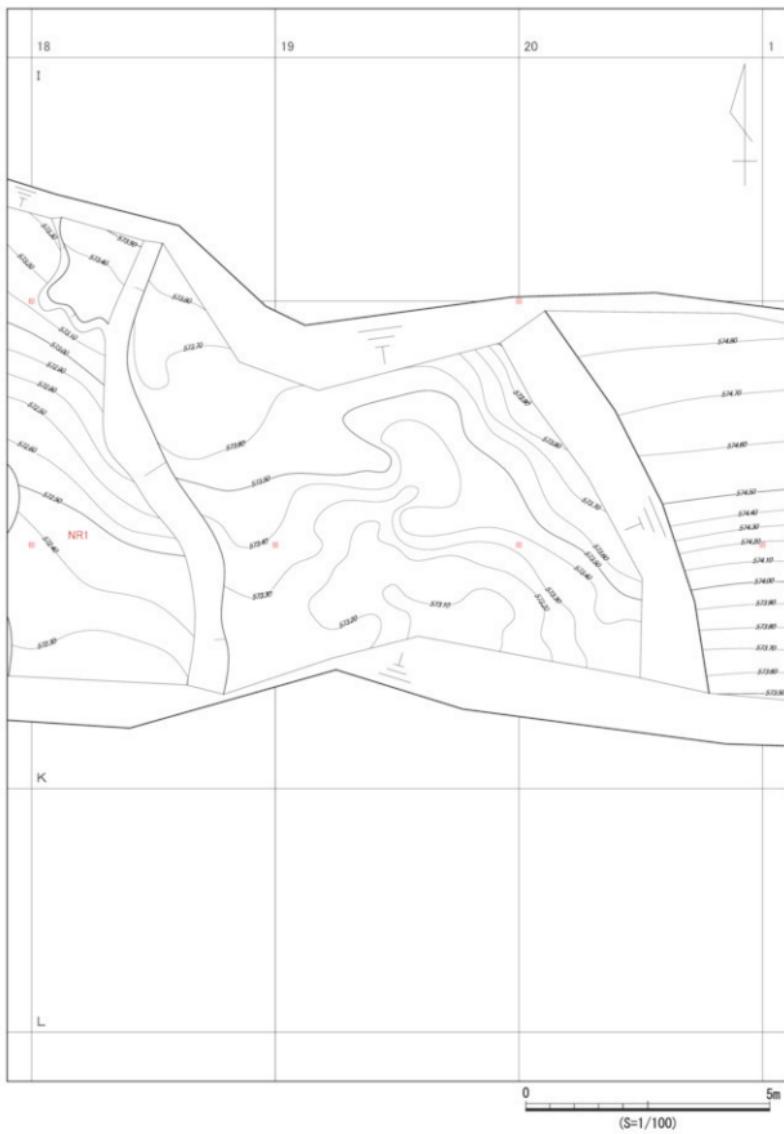


図 33 造構全体図分割図(2)

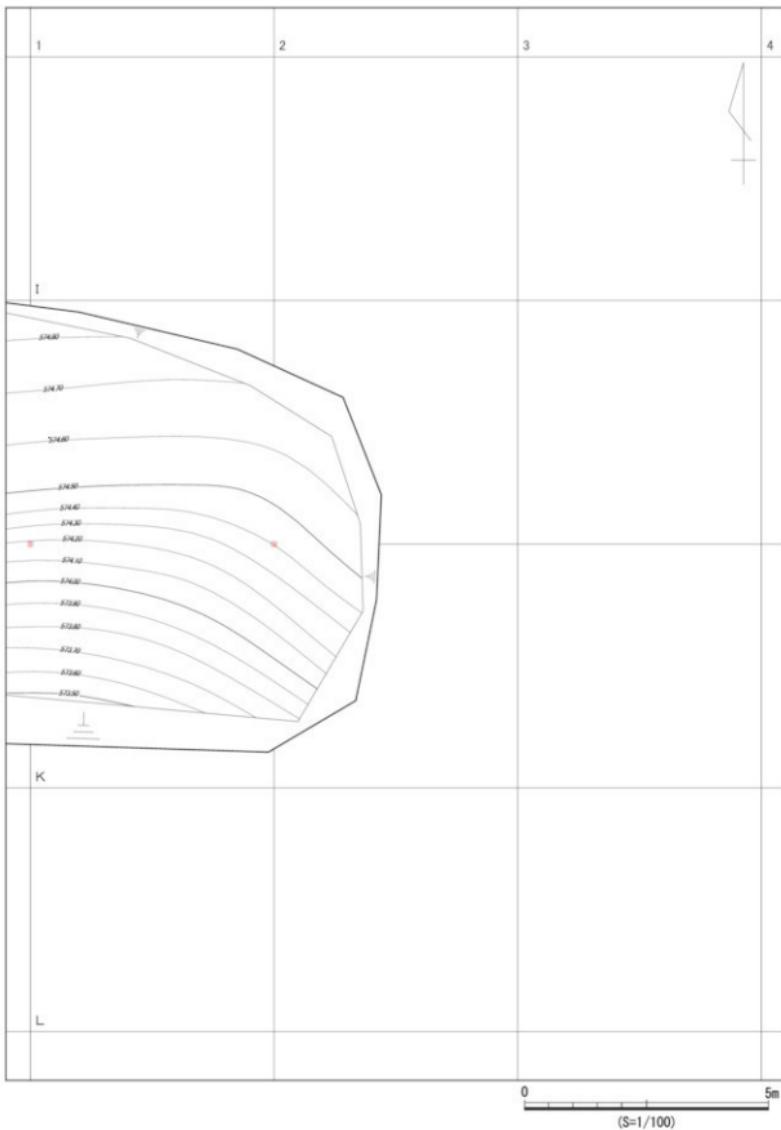


図 34 造構全体図分割図(3)

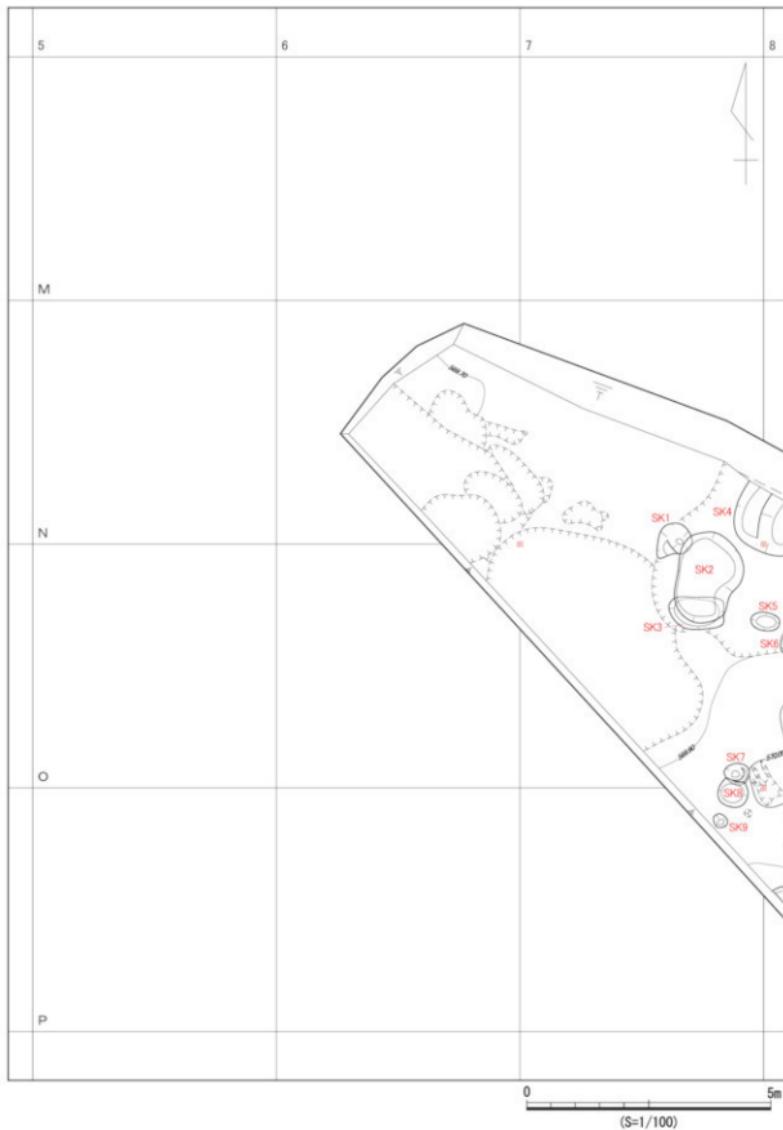


図35 遺構全体図分割図(4)

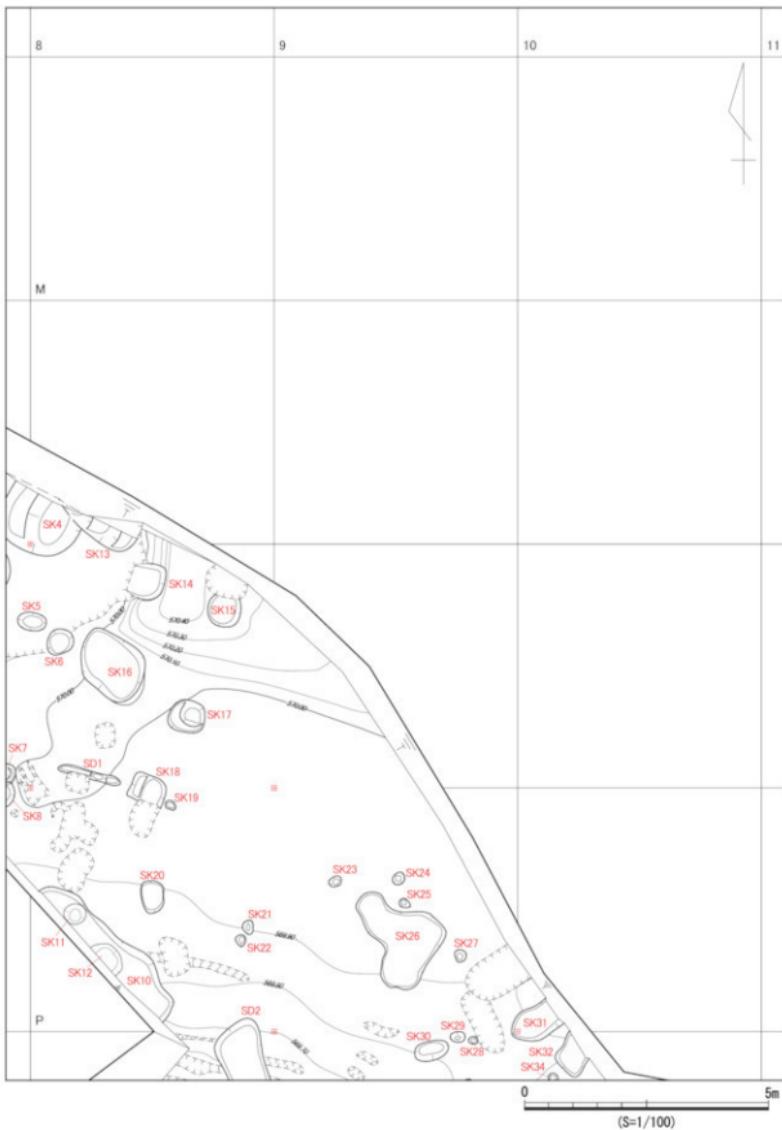


図 36 遺構全体図分割図(5)

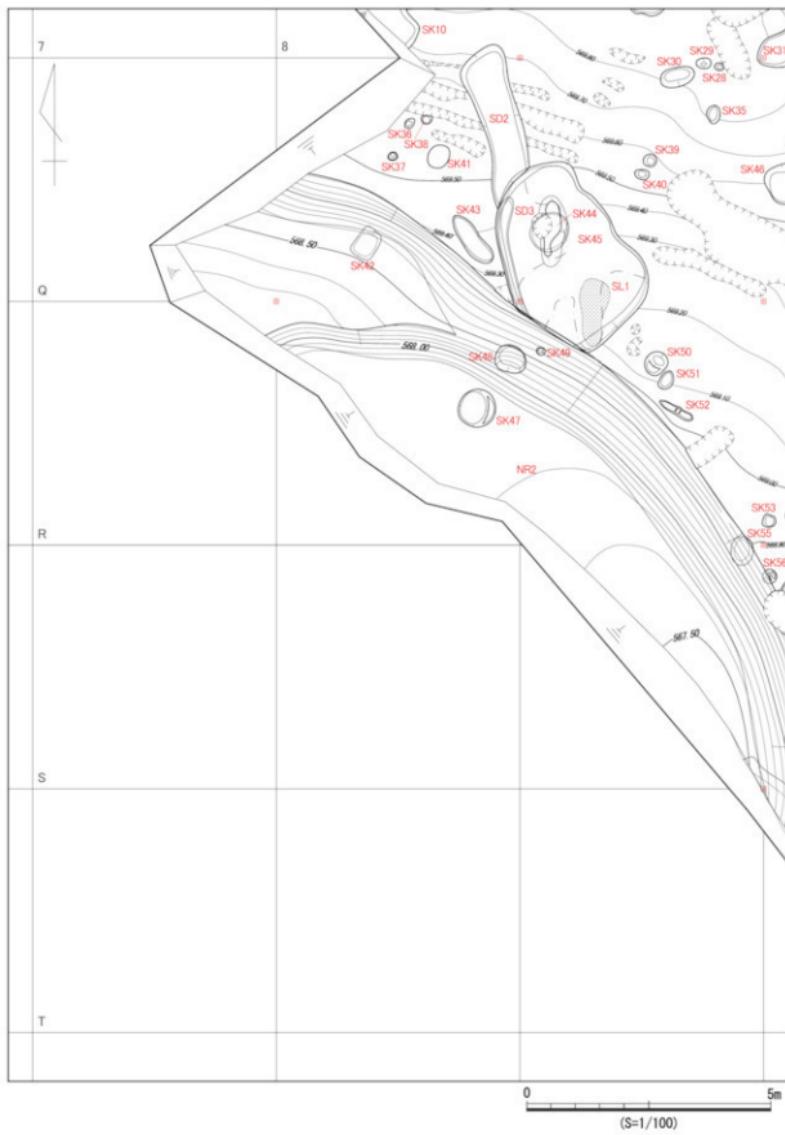


図 37 遺構全体図分割図(6)

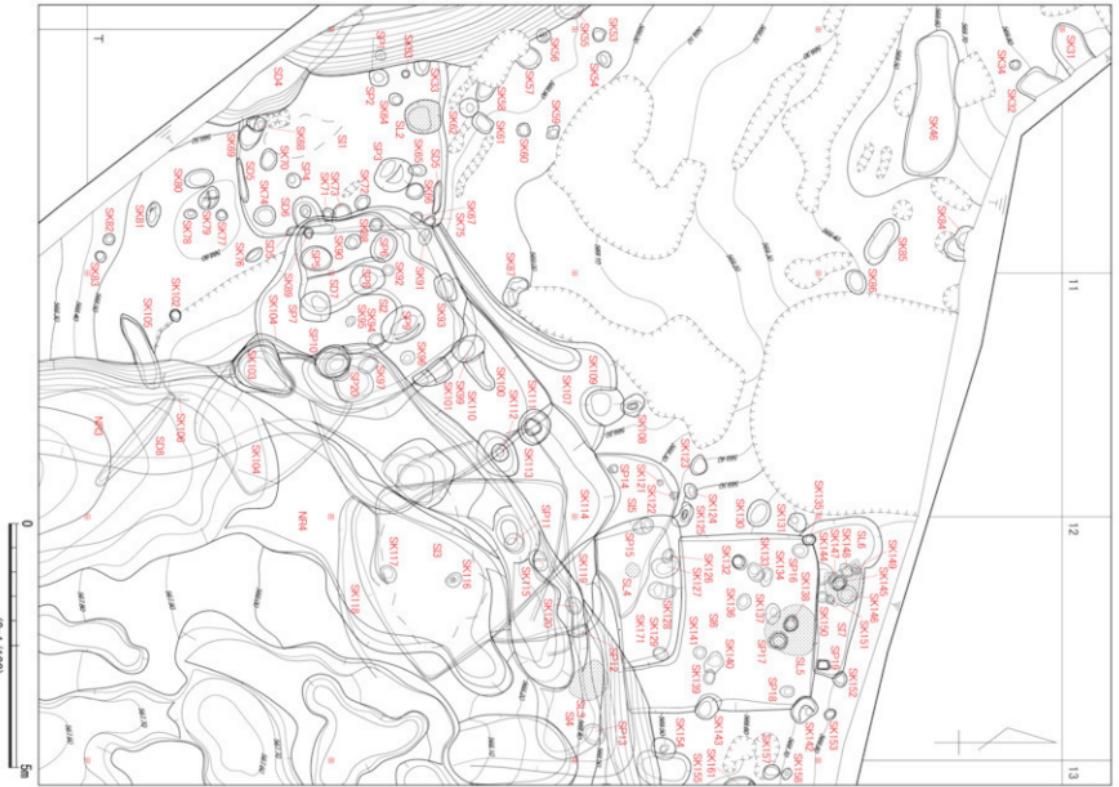


図38 遺構全体図分割図(7)

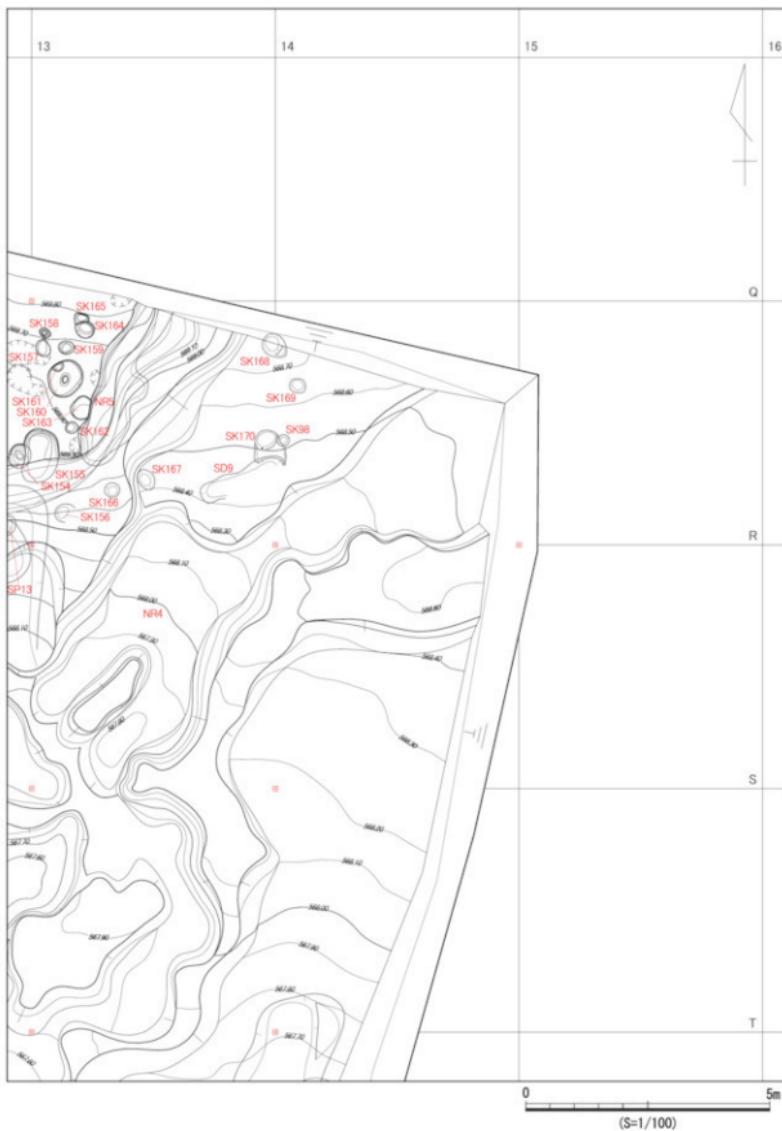


図39 遺構全体図分割図(8)

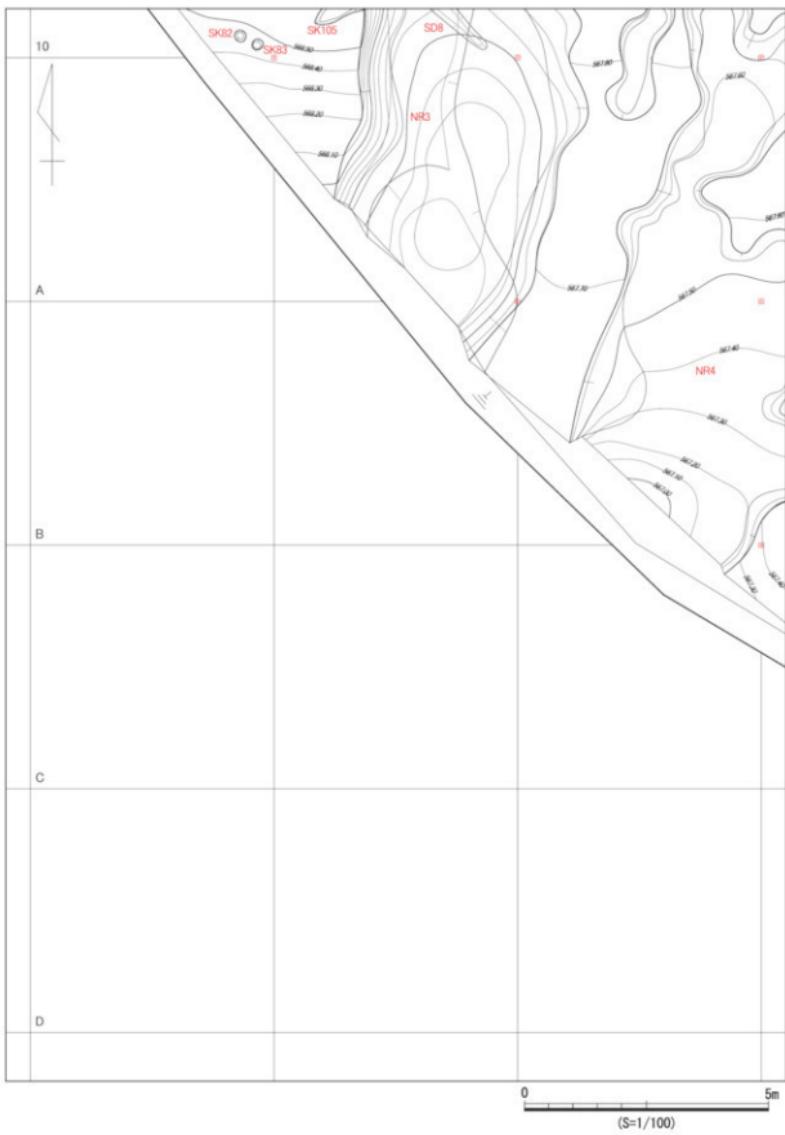


図 40 遺構全体図分割図(9)

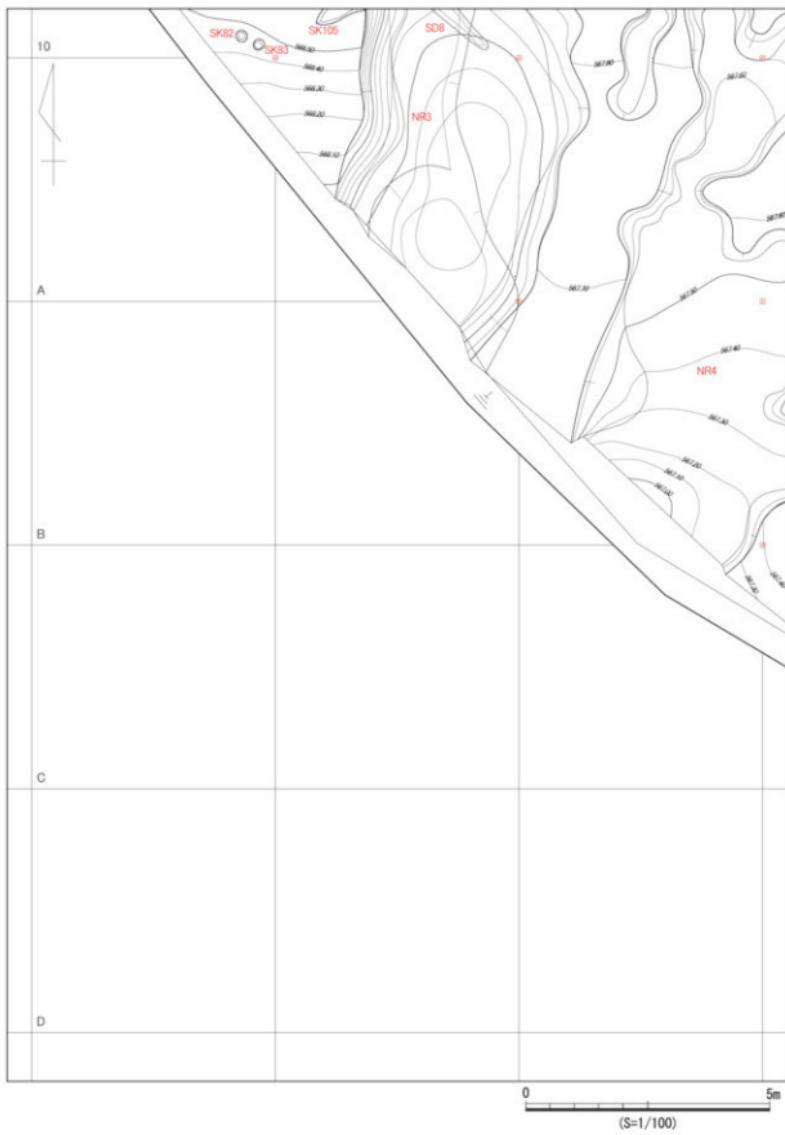


図 41 遺構全体図分割図(10)

第4節 遺物

1 主要遺構出土遺物

第1項では3節で記載した遺構の出土遺物について説明する。

(1) 自然流路内出土遺物

N R 1 出土遺物(図42)

1・2は土師器の鉢である。坏部が碗状で、胎土に砂粒が目立つ。1は内面にナデ調整、2は内面にハケ後ナデ調整を施す。2は、高坏の坏部の可能性がある。3は高坏の脚部で、裾部がやや内湾して接地面は尖る。外面に横方向のミガキ調整を施す。4は7世紀後葉から8世紀前葉の須恵器の有台坏で、底部外面全体に回転ヘラ削り調整を施す。底部端に高台を付け、体部が直線的に立ち上がる。底部は、器厚が厚く、やや丸みをもつ。体部下半に稜をもつ。形態的な特徴は美濃須衛窯のものに類似するが、胎土に砂粒を多く含むため飛騨産のものと考えられる。5は10世紀後半の灰釉陶器の碗で、底部外面に回転糸切り痕を残す。

N R 2 出土遺物(図42・43)

6は縄文時代晩期の粗製深鉢の胴部片で、頸部にナデ調整による段をもつ。7・21は土師器である。7は高坏の脚部で胎土に砂粒を多く含む。21は壺で、口縁部が外反し、口縁外面に指頭圧痕を残す。8から15・17、22から27、29から34は須恵器である。31は小型の坏蓋で、天井部外面に回転ヘラ削り痕を残す。8・22・24・32は摘み蓋である。8は端部を短く折り返す。天井部外面は回転ヘラ削り調整を施す。内面全体に滑らかな摩耗痕が認められることから、硯に転用したと考えられる。形状から摘み蓋と考えられ、胎土や形状から8世紀前葉の美濃須衛窯のものと考えられる。22は摘み部分がボタン状に近く、また器厚が厚いことから8世紀代のものと考えられる。胎土に砂粒を多く含むことから在地の土器と考えられる。24は摘み部分が宝珠形である。胎土や形状から8世紀前葉の美濃須衛窯のものと考えられる。32は天井部外面に回転ヘラ削り調整を施す。胎土に砂粒を多く含むことから在地の土器と考えられる。時期は、器厚が厚いことや形状から8世紀前葉と考えられる。9は坏身である。口縁端部が欠損するが、短く内傾すると思われる。胎土や形状から7世紀後葉の美濃須衛窯のものと考えられる。10・11・25・29は無台坏である。10は8世紀後葉のもので、底部外面に手持ちのヘラ削り調整を施す。11は8世紀前半の美濃須衛窯のもので、底部外面に回転糸切り痕を残す。25は底部外面に回転ヘラ削り痕を残す。胎土や形状から8世紀前葉の猿投産のものと考えられる。29は底部外面に回転糸切り痕を残す。底部の器厚は薄く、体部は丸みをもつ。胎土や形状から8世紀後葉の美濃須衛窯のものと考えられる。12から14・23是有台坏である。12は8世紀から9世紀のものである。胎土に砂粒を多く含むことから、在地の土器である可能性が高い。13は体部下半に稜をもつ。底部外面に回転糸切り痕を残す。胎土から美濃須衛窯のものと考えられる。時期は、底部外面に回転糸切り痕を残すことから8世紀中葉以降の可能性があるが、体部下半の外面に稜をもつことから8世紀前葉のものと考えられる。14は口縁端部が外反する。底部外面に回転ヘラ削り及びナデ調整を施す。高台は底部縁より中央に付けられる。口縁部内面に墨が付着する。胎土や形状から9世紀前葉の美濃須衛窯のものと考えられる。23は器厚が薄く体部が直線的に立ち上がる。口縁端部でわずかに外反す

る。高台部分の剥がれた痕跡が認められることから有台坏とした。胎土や形状から8世紀末葉から9世紀初頭の美濃須衛産のものと考えられる。15は有台盤で、底部内面にロクロ目を残す。形は美濃須衛産のものに近いが、胎土に砂粒を含むことから在地の土器と考えられる。時期は8世紀末葉頃と考えられる。26は鉢の底部片である。体部外面にヘラ削り調整を施す。胎土や形状から7世紀後葉から8世紀前葉の美濃須衛産のものと考えられる。34は小型の甌で、体部の肩が張るタイプのものである。口縁部を欠損する。胎土や形状から7世紀後葉の美濃須衛産のものと考えられる。27は横瓶で、口縁端部が屈曲し、上面に平坦面をもつ。胎土や形状から8世紀後半の美濃須衛産のものと考えられる。30・33は壺類である。30は体部外面下半に削り調整を施す。肩に丸みをもつ。形状から7世紀後葉から8世紀前葉のものと考えられる。胎土に砂粒を多くことから在地の土器と考えられる。33はやや張りのある肩部をもつ。形状から7世紀代のものと考えられる。17は甌で、頸部は直線的に立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。形状から7世紀後葉から8世紀前葉のものと考えられる。16・18・19は灰釉陶器の碗である。高台は三日月状に近いが、高台径は小さい。また、高台を底部の体部際に付けることから、東山72号窯式併行のものと考えられる。20は鉄製の角釘である。頭部・先端部を欠損する。28は蛇紋岩製の磨製石斧である。刃部に摩痕・線状痕が認められる。基部を欠損する。

N R 3 出土遺物(図43)

35は縄文時代土器で、突带上に縄文LRを施す。36・37は弥生土器の甌である。36は外面に櫛条痕による横羽状文、内面は横ナデ調整を施す。弥生時代中期中葉のものと考えられる。37はヘラ描きの横羽状文を施す。内・外ともに粗いハケ調整を施す。36と比べ、胎土中に砂礫を多く含む。弥生時代中期後葉の内垣内式と考えられる。

N R 4 出土遺物(図43・44)

38から46・48は縄文時代後期後半の縄文土器である。38は直立する口縁部の外面に幅広の沈線を施し、沈線間に短沈線を施す。39は外傾する口縁部の外面にRL縄文、口縁端部に沈線を施す。40は内側に屈曲した口縁部の外面に3条の沈線を廻らす。沈線の途切れる部分に縱方向の刻みを入れる。41は胴部外面に2条の沈線を施し、その沈線の間に縄文RLと列点文を施す。42は胴部外面の下方にやや波状になる横方向の沈線、上方に稍円形のような屈曲した沈線で施す。43は口縁部が内側に屈曲し、2条の回線の外側に縄文RLを施す。44は口縁部が内側に屈曲し、外面に2条の沈線を施し、その沈線の間に縄文LRと弧状の沈線を施す。45は底部片で、上底状になる。46は口縁部が外反する器形で、口縁部下に縄文LRと回線、体部下半に回線を3条廻らす。48は底部片で、平底である。47・49から52は弥生土器である。47は弥生時代中期前半の甌の体部片で横方向の条痕調整を施す。49は甌としたが、口縁部が擬口縁の可能性がある。50は弥生時代前期の甌で、頸部が屈曲し外反する。口縁部下に短沈線を廻らす。51は弥生時代中期前葉の甌で、僅かではあるが波状になる。外面に条痕調整を施す。52は弥生時代中期の壺の底部片である。体部外面に撲糸文が認められる。53は手捏の土器で、胎土が粗く器厚が薄いことから、古代の製塩土器と考えられる。54は古代の土師器甌で外面に横方向のハケ調整を施す。55から60は須恵器である。56は蓋である。天井部は回転ヘラ削り調整を施し、端部は直線的に短く折り返す。形状は美濃須衛産のものに近いが胎土に砂粒を多く含むことから、在地の土器と考えられる。8世紀前葉のものと考えられる。55・58

から 60 は無台坏である。55 は底部外面にヘラ削り後ナデ調整を施す。58 は底部外面にヘラ切り後無調整、59 は底部外面に回転ヘラ削り調整、60 は底部外面に回転ヘラ削り調整後ナデ調整を施す。胎土や形状から 55・58・60 は 7 世紀後葉から 8 世紀前葉の美濃須衛産、59 は 7 世紀後葉から 8 世紀前葉の猿投産のものと考えられる。57 は甕で、頸部は直線的に立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。胎土や形状から 7 世紀後葉の猿投産のものと考えられる。61 は中世の擂鉢である。62 は石刀で、頭部と尾部を欠損する。黒色の泥岩製であるが、一部に熱を受け、白く変色した部分が認められる。63 は下呂石製のスクレイパーで、直線的な縁辺に片面から剥離調整を行い、刃部を作り出す。64・65 は凝灰岩製の打製石斧である。いずれも素材となる剥片を横位に用い、縁辺を調整加工する。64 は表面に原礫面を大きく残す。原礫面には線状痕が認められる。65 は表面左側辺付近に原礫面を残す。裏面中央には摩耗痕が認められる。

S I 1 出土遺物(図 45)

72 は須恵器坏の口縁部分である。口唇部が厚く丸みをもつ。胎土や形状から 7 世紀後葉から 8 世紀前葉の美濃須衛産と考えられる。

S I 2 出土遺物(図 45)

66 は繩文土器の底部で、底部内面に炭化物が付着する。67 から 71 は弥生土器である。67 は弥生時代中期中葉の甕の体部片で外面に縱方向の削り調整、内面に横方向の削り調整が認められる。68 は弥生時代中期後葉の甕の体部片で内外面に横方向の粗いハケ調整が認められる。体部外面の胴が張る部分から上方の部分に、ヘラ描きの横羽状文を施す。NR 3 出土 37 と胎土や調整が類似し、出土位置が近接することから、接合関係はないものの同一個体の可能性が高い。体部内面には粘土接ぎ痕が認められる。体部内面下半と体部外面下半に煤が付着する。69 は弥生時代中期前半の甕の口縁部片で、外面に沈線を廻らし口縁端部を刻む。70 は弥生時代中期後半の甕の体部片で、外面は条痕調整、内面は横方向の削り調整が認められる。71 は弥生時代中期後葉の壺の体部片で沈線間に櫛状工具による波状文を施す。73 は古代の土器器甕の口縁部片で、口縁部が外反する。

S I 3 出土遺物(図 45)

74・75 は弥生土器である。74 は弥生時代中期の甕で体部外面にヘラ描きの横羽状文を施す。75 は弥生時代中期後葉の壺の体部片で、櫛描きの直線文の間に列点文を施す。胎土は赤みが強く、砂粒の混入は少ない。

S I 4 出土遺物(図 45)

76 は繩文土器の深鉢の胴部片である。区画した沈線内に繩文 L R を充填することから、繩文時代後期のものと考えられる。

S I 6 出土遺物(図 45)

77 は須恵器の無台坏である。底部外面を回転ヘラ切り後、ナデ調整を施す。器厚が厚く、器高も高い。胎土や形状から 7 世紀後葉の美濃須衛産と考えられる。78 は須恵器の無台坏で、口縁部が外反する。底部外面は回転ヘラ削り調整する。胎土に砂粒を多く含むことから在地の土器と考えられる。時期は、器厚が厚く体部外面の下半に稜をもつことから 8 世紀前葉頃と考えられる。

S I 7 出土遺物(図 45)

79から81は古代の長胴甕で、79は体部片で、外面に縦方向のハケ調整をする。80・81は口縁部片で、口縁部が短く外反する。

S K110 出土遺物(図45)

82・83は弥生土器である。82は弥生時代中期の小型甕の底部で、平底である。83は弥生時代中期前葉の甕の体部で外面に条痕調整を施す。縄文時代晩期の粗製深鉢の可能性もある。84は古代の土師器の鉢で、口縁端部に平坦な面をもつ。

S K114 出土遺物(図45)

85から87は弥生時代中期後半の甕である。85は口縁部が肥厚し、端部に刻みを施す。86は外面に櫛描きの横羽状文を施し、内面は削り調整を行う。87は甕の体部で、外面に条痕調整を施す。88は古代の土師器の甕で頸部が屈曲する。

S K119 出土遺物(図45)

89は縄文時代後期後半の深鉢の胴部片である。外面に沈線を施す。内面は上方が肥厚し、段を有する。

2 その他の出土遺物

第2項では、第3節で記載した主要遺構以外の出土遺物と、包含層出土遺物・撲乱出土遺物を一括して種類別に説明する。

(1) 縄文土器(図46)

90は縄文時代早期前半の高山寺式の深鉢である。胴部の外面に編目状の撚糸(L)を施す。器厚は厚く、胎土中に長石・石英を含む。また、細い繊維痕が多く認められる。内面には粘土紐痕、指頭圧痕が認められる。91は縄文時代後期の注口土器注口部分である。注口部分は、上半分を欠損する。外面に竹管による刺突文を施す。92は縄文時代後期の粗製深鉢である。口縁端部は、棒状工具による刺突が認められる。

(2) 弥生土器(図46)

93は弥生時代後期の甕の口縁部である。口縁部が受口状になる。94は弥生時代中期の甕の体部片である。横羽状文とみられる沈線があることや胎土が弥生土器に近いことから弥生土器としたが、口縁形態が波状で棒状工具による沈線であるため、縄文時代後期または晩期の深鉢の可能性もある。95は弥生時代中期後半の甕の体部片である。体部外面に横方向の平行沈線、横羽状文を施す。体部内面はハケ調整を施す。96は弥生時代中期後半の甕の体部片である。体部外面にハケ調整後に横羽状文を施す。体部内面はハケ調整を施す。

(3) 土師器(図46)

97は古代の甕の体部片で屈曲する。体部外面に縦ハケが認められる。98は古代の無台坏の底部片である。底部内面に線状ミガキによる暗文が認められる。99は甕の体部片で、内面に横ハケ、外面に縦ハケが認められる。

(4) 須恵器(図46)

100・101は摘み蓋である。100は宝珠形に近い摘み部分をもつ。器厚は厚く、天井部外面は回転ヘラ削り調整を施す。摘み部分の形状から8世紀前葉と考えられるが、胎土に砂粒を多く含むことから

在地の土器と考えられる。101 はボタン状の摘み部分をもつ。器厚は厚く、天井部外面は回転ヘラ削り調整を施す。胎土や形状から 7 世紀後葉から 8 世紀前葉の美濃須衛産のものと考えられる。102・103・105・106・111 は無台坏である。102 は底部の器厚はやや厚く、底部内側の中央部分はやや凹む。底部外面には回転ヘラ削り調整を残す。体部は深く、口縁部は直線的である。胎土や形状から 7 世紀後葉の美濃須衛産のものと考えられる。103 は底部の器厚はやや厚く、底部外面に回転ヘラ削り調整を残す。口縁部はやや外反する。胎土や形状から 7 世紀後葉から 8 世紀前葉の美濃須衛産のものと考えられる。105 は底部の器厚は厚く、底部外面にヘラ切り痕を残す。口縁部はやや外傾する。106 は底部外面にヘラ切り痕を残す。口縁部はやや外傾する。111 は底部外面に回転ヘラ削り調整を残す。体部外面下間に棱をもつ。104 は有台坏で底部端に幅広の高台を付ける。底部の器厚は厚く、底部外面は接地する。胎土に砂粒を含む在地の土器と考えられる。また、幅広の高台であることから 9 世紀初頭頃のものと考えられる。109・110 は坏身である。口縁部は内傾する。胎土や形状から 6 世紀から 7 世紀頃の美濃須衛産のものと考えられる。

(5) 灰釉陶器(図 46)

107・108・113 は碗である。112 は段皿である。いずれも、高台径は小さく、底部の体部際に付けることから、東山 72 号窯式併行(10 世紀後半頃)のものと考えられる。

(6) 陶磁器類(図 46)

114 は古瀬戸の瓶子で、外面に櫛描沈線を施す。115・116 は龍泉窯系の青磁碗で、115 は鎬蓮弁文、116 は蓮弁文を施す。

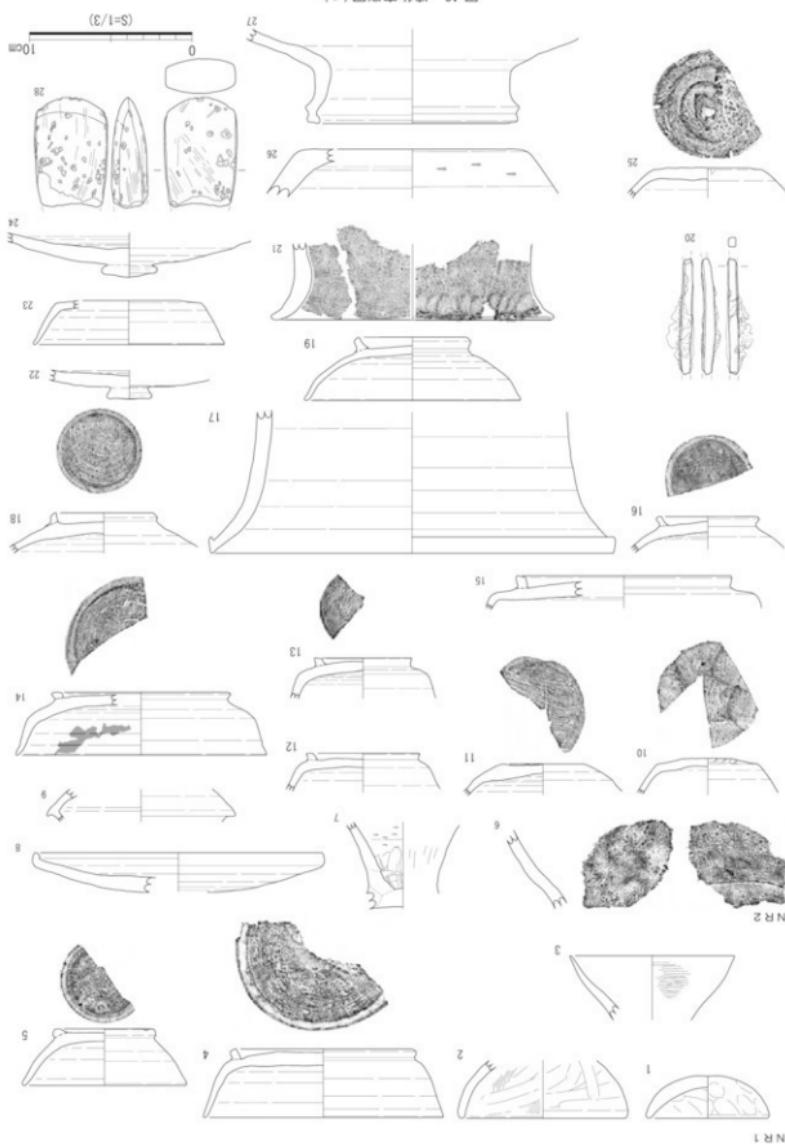
(7) 土製品(図 46)

120 は円管状の土錘で、中央部分が若干ふくらむ。

(8) 石器(図 46)

117 は流紋岩製の石鍬である。基部を欠損する。河原礫を板状に剥離したものを素材とし、側縁と刃部を成形する。縄文時代の打製石斧よりも幅広であり、弥生時代のものと考えられる。刃部付近に線状痕・磨痕が認められる。118 は粘板岩製の手持ちの砥石である。両面に砥面をもつ。中世以降のものと考えられる。119 は下呂石製のスクレイパーで直線状の刃部をもつ。縄文時代のものと考えられる。

圖 42 誤物實測圖(1)



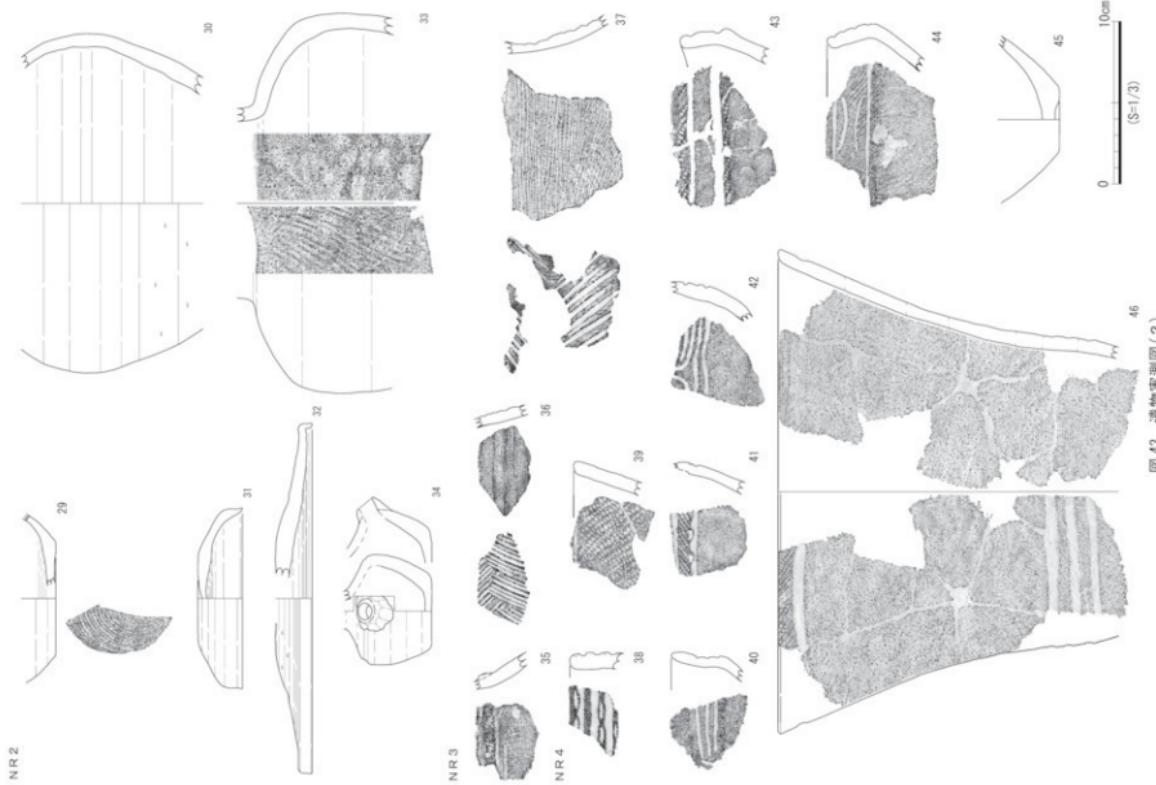


図43 遺物実測図(2)

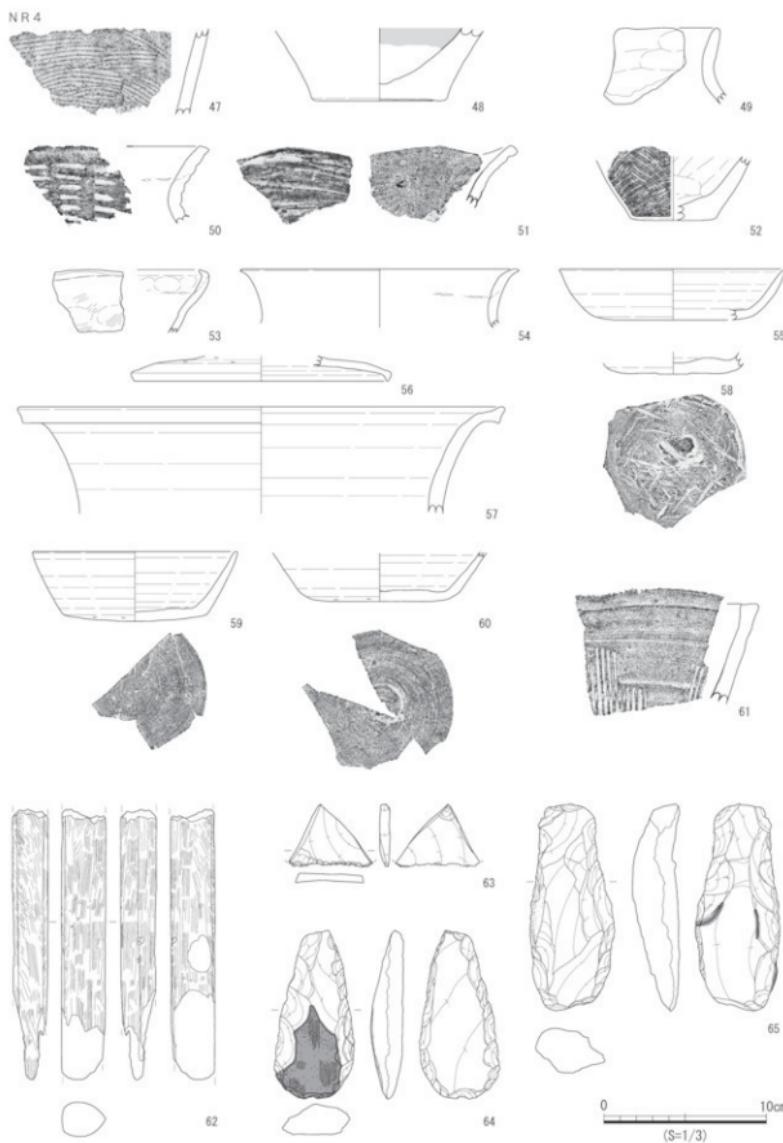


図44 遺物実測図(3)

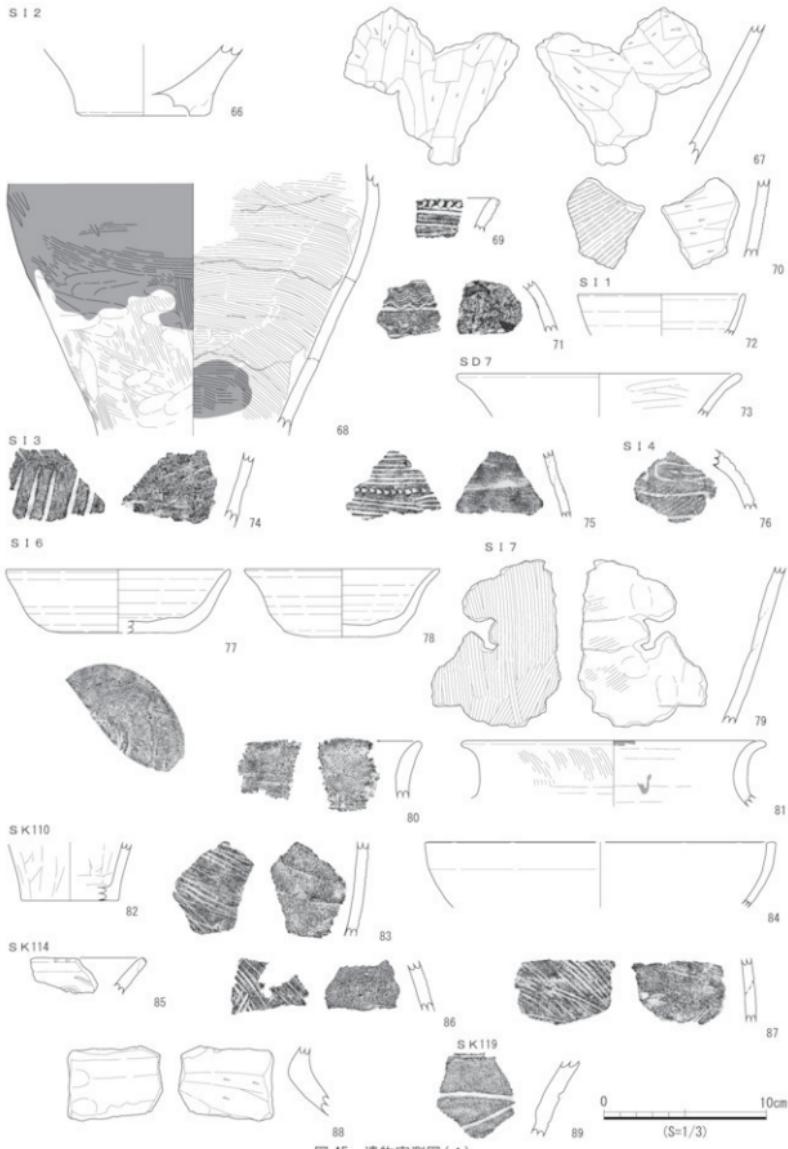


図45 遺物実測図(4)

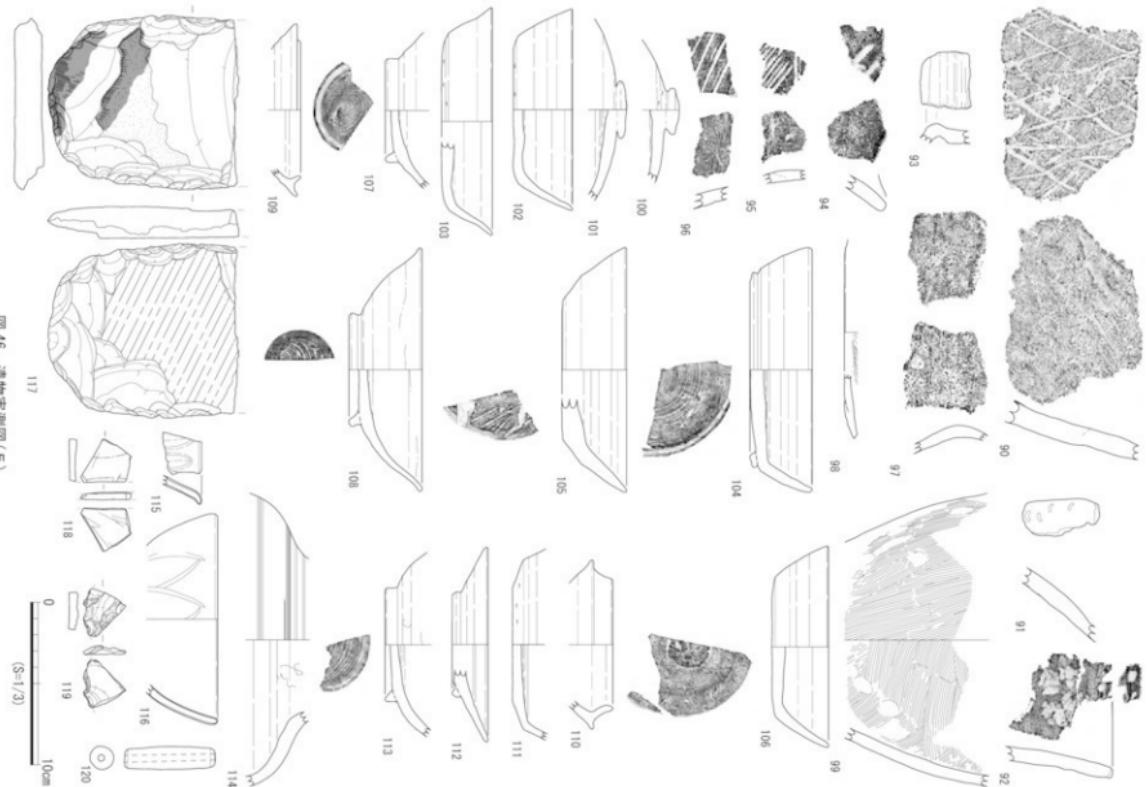


図 46 遺物実測図(5)

表4 遺構觀察表(1)

遺構番号	調査時番号	グリッド名	堆積	平面形	断面	上層規模(m)		下層規模(m)		深さ(m)	重複関係	
						長軸	短軸	長軸	短軸		>(切る)	<(切られる)
S01	S0162	A08	a	不定形	III	1.30	0.19	1.20	0.12	0.05		
S02	S0149	A08～A09	a	不定形	IV	(3.35)	1.10	(3.13)	0.89	0.17	SK45	
S03	S0245	A08	a	不定形	I	2.36	0.21	2.31	0.21	0.03	SK45	
S04	S0276	A09～A10	a	不定形	IV	(3.92)	(0.90)	(3.09)	(0.62)	0.39	NB2, S11	
S07	S0308	AS10～AT11	a	不定形	IV	3.87	3.51	3.70	3.32	0.36	S12-SK93, S12-SP5, S12-SP6, S12-SP7, S12-SP8	S11, S12, S12-SK92, S12-SP9, S12-SP10
S08	S0264	AT11	a	不定形	IV	(2.42)	0.37	(2.32)	0.19	0.19	NB3	S11, S12, S12-SK92, S12-SP9, S12-SP10
S09	S0027	AS13～AS14	a	不定形	II	1.85	(0.45)	1.55	(0.36)	0.14	NB4, SK170	
S11	S0111	AS10～AT10	a	正方形	IV	5.02	(3.39)	4.26	(3.31)	0.11	S07, S12, S12-SK88, S12-SK89	NB2, SD4
S12	S0116	AS10～AS11	a	正方形	VI	4.40	3.97	4.01	3.60	0.60	S07, SK99, SK101, SK103, SK104, SK107, SK110	S11
S13	S0098	AS11～AS12	d	円形	VI	3.92	(2.89)	3.74	(2.83)	0.43	NB3, SK110, SK113, SK114, SK118, SK119	
S14	S0061	AR12～AS12	d	円形	IV	(4.24)	(3.72)	(3.66)	(3.35)	0.74	NB3, NB4, S16, S16, SK172	SK119
S15	S0062	AR12	a	円形	IV	3.20	(2.12)	3.12	(2.05)	0.22	SK172	S14, SK107, SK114, SK119
S16	S0065	AR12	d	異形	IV	(4.00)	3.75	(3.94)	3.59	0.29	S17	S14, SK105, SK142, SK143, SK172
S17	S0054	AQ12	b	不明	IV	3.33	(1.73)	3.11	(1.29)	0.25	SK145, SK151	S16, SK152
S11-S056	S0256	AS10～AT10	a	不定形	-	-	-	0.18	0.10	0.09	S11-S06, S12-SK89	
S11-S06	S0306	AT10	a	不定形	VI	(0.64)	0.58	(0.54)	0.44	0.10		S11-S06, S11, S11-SK71
S11-SK33	S0295	AS10	a	不定形	I	(0.34)	0.31	(0.23)	0.19	0.08		NB2
S11-S063	S0301	AS10	a	円形	I	0.17	0.16	0.11	0.11	0.05		
S11-SK64	S0299	AS10	a	円形	I	0.28	0.25	0.18	0.17	0.08		
S11-SK65	S0298	AS10	a	橢円形	IV	0.37	0.24	0.20	0.15	0.10	S11-SK3	
S11-SK66	S0296	AS10	a	円形	IV	0.36	0.34	0.30	0.26	0.07		
S11-SK67	S0294	AT10	a	円形	III	0.25	0.23	0.17	0.16	0.09		
S11-SK68	S0274	AT10	a	橢円形	VI	0.39	0.30	0.30	0.21	0.20	S11-SK69	
S11-SK69	S0291	AT10	a	不定形	II	(0.58)	0.38	(0.47)	0.38	0.14	S11-SK68	
S11-SK70	S0304	AT10	a	橢円形	I	0.45	0.37	0.34	0.25	0.07		
S11-SK71	S0305	AT10	a	円形	III	0.26	0.24	0.15	0.14	0.09	S11-S06	S11-SK73
S11-SK72	S0293	AS10	d	円形	I	0.34	0.29	0.25	0.20	0.09		
S11-SK73	S0303	AS10	a	不定形	VI	0.45	(0.37)	0.33	(0.28)	0.09	S11-SK71	
S11-SK74	S0292	AT10	a	円形	I	0.45	0.42	0.32	0.29	0.08		
S11-SK75	S0307	AS10	a	橢円形	IV	0.27	0.19	0.19	0.13	0.11		
S11-SL2	S0257	AS10	d	不定形	IV	0.74	0.69	0.50	0.45	0.10		
S11-SPI	S0246	AS10	a	円形	I	0.21	0.19	0.10	0.07	0.20	NB2	
S11-SPI2	S0001	AS10	a	橢円形	IV	0.23	0.21	0.22	0.20	0.26		
S11-SPI3	S0297	AS10	a	円形	IV	0.79	0.71	0.45	0.44	0.37		S11-SK65
S11-SP4	S0273	AT10	a	円形	IV	0.30	0.29	0.17	0.14	0.23		
S12-SK88	S0317	AS10	a	円形	IV	0.26	0.26	0.18	0.17	0.16		S11
S12-SK89	S0310	AT10	a	円形	IV	0.22	0.20	0.16	0.13	0.10		S11-S05, S11
S12-SK90	S0312	AS10	a	円形	IV	0.34	0.29	0.20	0.19	0.15		
S12-SK91	S0312	AS10	a	橢円形	VI	0.33	0.26	0.20	0.17	0.23		
S12-SK92	S0298	AS10～AS11	a	円形	IV	0.23	0.23	0.14	0.14	0.14	S07	
S12-SK93	S0315	AS11	a	橢円形	VI	0.59	0.40	0.41	0.31	0.21	S07	
S12-SK94	S0277	AS11	a	円形	III	0.34	0.30	0.22	0.19	0.18	NB3	
S12-SK95	S0278	AS11	d	円形	I	0.22	0.18	0.11	0.08	0.13		
S12-SK96	S0265	AS11	a	円形	III	0.21	0.27	0.15	0.14	0.15		
S12-SK97	S0299	AS11	a	橢円形	IV	0.42	0.30	0.31	0.21	0.20	NB3, S12-SK98	
S12-SP20	S0321	AS11	a	不定形	IV	0.79	(0.76)	0.58	(0.72)	0.15	NB3	S12-SK97, S12-SP10
S12-SP5	S0311	AT10	a	円形	IV	0.59	0.50	0.58	0.44	0.12	S07	
S12-SP6	S0313	AS10	a	円形	IV	0.63	0.50	0.49	0.37	0.10	S07	
S12-SP7	S0318	AT11	a	円形	I	0.63	0.62	0.33	0.28	0.46	S07	
S12-SP8	S0314	AS10～AS11	a	円形	IV	1.11	0.60	0.37	0.30	0.46	S07	
S12-SP9	S0316	AS11	d	橢円形	IV	0.95	0.69	0.62	0.42	0.48	S07	
S12-SP10	S0319	AS11～AT11	a	円形	IV	0.73	0.73	0.52	0.37	0.48	NB3, S07, S12-SK98	
S13-SK115	S0090	AS12	c	橢円形	IV	0.46	0.37	0.33	0.27	0.14	NB3	
S13-SK116	S0099	AS12	c	橢円形	VI	0.34	0.27	0.25	0.14	0.16		
S13-SK117	S0100	AS12	d	円形	III	0.37	0.32	0.23	0.21	0.19	S13	

58 第3章 調査の成果

表5 造橋観察表(2)

造橋番号	調査時番号	グリッド名	堆積	平面形	断面	上端規格(m)		下端規格(m)		深さ(m)	重複関係	
						長軸	短軸	長軸	短軸		>(切る)	<(切られる)
S13-SPL1	S0096	AS12	a	円形	I	0.39	0.36	0.22	0.22	0.12	N83	
S14-SL3	S0058	AR12	b	不定形	-	0.86	0.70	-	-	-	N83	
S14-SPL2	S0335	AS12	a	不定形	I	0.45	(0.22)	0.31	(0.17)	0.15	N83	SK119
S14-SPL3	S0336	AS12	a	円形	I	0.47	0.40	0.38	0.28	0.07	N83	
S15-SKL21	S0091	AR13	a	円形	III	0.13	0.13	0.06	0.04	0.24		
S15-SKL22	S0090	AR11	a	円形	I	0.16	0.16	0.08	0.08	0.09		
S15-SL4	S0093	AR12	-	不定形	-	0.31	0.31	-	-	-		
S15-SP14	S0013	AR13	a	円形	I	0.20	0.17	0.15	0.12	0.09		
S15-SP15	S0092	AR12	a	複円形	VI	0.43	0.31	0.32	0.22	0.13		
S16-SKL32	S0075	AR12	a	円形	II	0.32	0.30	0.19	0.18	0.26		
S16-SKL33	S0076	AR12	a	複円形	VI	0.41	0.31	0.30	0.21	0.20	S16-SK134	
S16-SKL34	S0077	AR12	a	不定形	IV	0.38	(0.24)	0.25	0.13	0.16		S16-SK133
S16-SKL36	S0056	AR12	a	複円形	III	0.32	0.29	0.22	0.17	0.17		
S16-SKL37	S0339	AR12	a	円形	I	0.44	0.31	0.19	0.14	0.25		S16,S16-SL5
S16-SKL38	S0338	AR12	c	円形	I	0.37	0.29	0.18	0.18	0.23		
S16-SKL39	S0247	AR12	a	複円形	I	0.30	0.22	0.21	0.16	0.09	S16-SK140	
S16-SKL40	S0248	AR12	a	不定形	IV	(0.50)	0.33	0.28	0.23	0.21		S16-SK139
S16-SKL41	S0249	AR12	a	円形	IV	0.26	0.26	0.17	0.17	0.10		
S16-SL5	S0073	AR12	-	不定形	-	1.08	1.06	-	-	-	S16-SK137,S16-SP17	
S16-SP16	S0337	AR12	a	円形	IV	0.33	0.28	0.22	0.16	0.23		
S16-SP17	S0343	AR12	a	円形	I	0.42	0.37	0.24	0.21	0.24		S16-SL5
S16-SP18	S0334	AR12	a	円形	I	0.29	0.24	0.18	0.14	0.26		
S17-SKL44	S0346	AQ12	a	不定形	IV	0.47	(0.28)	0.26	(0.22)	0.21	S17-SK147	S17-SL6
S17-SKL46	S0348	AQ12	a	不定形	IV	0.38	(0.35)	0.25	0.23	0.13		SK145,S17-SL6
S17-SKL47	S0349	AQ12	a	不定形	I	0.24	(0.12)	0.14	(0.10)	0.05		SK145,S17-SL6
S17-SKL48	S0350	AQ12	a	円形	I	0.31	0.24	0.21	0.18	0.05	S17-SK149	S17-SL6
S17-SKL49	S0351	AQ12	a	不定形	VI	0.21	(0.16)	0.14	0.11	0.07		S17,S17-SK148, S17-SL6
S17-SKL50	S0342	AQ12	a	円形	I	0.23	0.22	0.16	0.13	0.21	SK151	
S17-SL6	S0987	AQ12	-	不定形	-	1.00	0.83	-	-	-		
S17-SP19	S0344	AQ12～AR12	a	方形	I	0.29	0.20	0.19	0.14	0.17		
SK1	S0156	AN7	a	不定形	VI	0.83	0.70	0.41	0.34	0.56	S82	
SK2	S0157	A07	a	不定形	IV	1.88	1.35	1.62	1.11	0.12		SK1,SK3
SK3	S0155	A07	b	複円形	II	1.14	0.68	0.93	0.56	0.47	SK2	
SK4	S0159	AN7～AN8	d	不定形	VI	1.67	(1.15)	1.18	(1.03)	0.36		SK13
SK5	S0154	A07～A08	a	複円形	I	0.59	0.38	0.40	0.24	0.27		
SK6	S0153	A08	a	円形	VI	0.60	0.53	0.42	0.40	0.06		
SK7	S0166	A07	a	円形	III	0.51	0.45	0.32	0.30	0.12	SK88	
SK8	S0167	A07	a	不定形	IV	0.62	(0.52)	0.45	0.39	0.14		SK7
SK9	S0169	A07	d	円形	IV	0.30	0.26	0.14	0.10	0.39		
SK10	S0178	AP7～AP8	a	不定形	IV	3.70	(0.78)	3.54	(0.65)	0.15		SK11,SK12
SK11	S0177	AP8	d	円形	I	0.46	0.43	0.26	0.24	0.11	SK10	
SK12	S0176	AP8	a	不定形	I	0.78	(0.34)	0.50	(0.25)	0.09	SK10	
SK13	S0158	AN8～AN9	d	不定形	VI	(1.81)	(0.43)	(1.50)	(0.37)	0.81	SK4	
SK14	S0128	A08	a	不定形	II	0.77	(0.69)	0.61	(0.59)	0.42		
SK15	S0130	A08	a	不定形	IV	0.69	(0.67)	0.57	(0.52)	0.21		
SK16	S0152	A08	a	複円形	IV	1.46	1.18	1.42	0.88	0.20		
SK17	S0150	A08	b	円形	VI	0.75	0.72	0.68	0.58	0.19		
SK18	S0171	AP8～AP8	a	不定形	VI	0.76	0.57	0.57	0.49	0.27		
SK19	S0180	AP8	a	円形	IV	0.24	0.18	0.16	0.11	0.07		
SK20	S0179	AP8	a	複円形	I	0.67	0.47	0.55	0.43	0.15		
SK21	S0198	AP8	-	複円形	IV	0.29	0.22	0.14	0.07	0.21		
SK22	S0199	AP8	a	円形	I	0.25	0.25	0.15	0.11	0.08		
SK23	S0197	AP9	a	円形	IV	0.27	0.20	0.14	0.13	0.08		
SK24	S0195	AP9	d	円形	IV	0.27	0.23	0.13	0.12	0.08		
SK25	S0194	AP9	a	円形	IV	0.25	0.19	0.11	0.11	0.12		
SK26	S0196	AP9	a	不定形	IV	1.93	1.66	1.83	1.57	0.13		
SK27	S0192	AP9	a	円形	I	0.26	0.24	0.14	0.12	0.08		
SK28	S0186	AP9	a	円形	IV	0.19	0.10	0.10	0.10	0.21		
SK29	S0187	AP9	a	複円形	III	0.30	0.22	0.12	0.07	0.30		

表6 遺構観察表(3)

遺構番号	調査時番号	グリッド名	堆積	平面形	断面	上端規模(m)		下端規模(m)		深さ(m)	重複関係	
						長軸	短軸	長軸	短軸		>(切る)	<(切られる)
SK30	50188	AQ9	d	楕円形	IV	0.70	0.39	0.52	0.22	0.20		
SK31	50183	AP9~AQ10	a	不定形	IV	(0.97)	0.79	(0.55)	0.40	0.17		
SK32	50181	AQ10	a	不定形	IV	(0.67)	0.62	(0.50)	0.56	0.09		
SK33	50182	AQ10	a	円形	III	0.23	0.20	0.14	0.08	0.24		
SK35	50191	AQ9	a	楕円形	I	0.38	0.28	0.29	0.16	0.06		
SK36	50138	AQ8	a	円形	I	0.25	0.18	0.14	0.10	0.06		
SK37	50140	AQ8	a	円形	IV	0.20	0.17	0.09	0.09	0.11		
SK38	50137	AQ8	a	円形	IV	0.23	0.18	0.16	0.13	0.02		
SK39	50189	AQ9	a	円形	II	0.27	0.26	0.16	0.15	0.26		
SK40	50190	AQ9	a	楕円形	IV	0.30	0.21	0.16	0.14	0.12		
SK41	50141	AQ8	-	円形	-	0.55	0.45	-	-	-		
SK42	50160	AQ8	a	方彌	I	0.65	0.48	0.49	0.39	0.07	NB2	
SK43	50147	AQ8	a	楕円形	I	1.20	0.39	1.12	0.32	0.04		
SK44	50143	AQ9	a	円形	IV	0.83	0.74	0.77	0.67	0.11	SK45	
SK45	50148	AQ8~AQ9	d	不定形	IV	3.72	3.34	2.69	2.47	0.41	SQ2, SQ3	NB2, SK44
SK46	50221	AQ10	a	不定形	IV	3.03	1.00	2.84	0.96	0.13		
SK47	50286	AR9	d	円形	VI	0.78	0.77	0.77	0.67	0.15		NB2
SK48	50285	AR9	a	円形	IV	0.65	0.56	0.53	0.37	0.44		NB2
SK49	50284	AR9	a	円形	I	0.18	0.16	0.12	0.10	0.16		NB2
SK50	50224	AR9	c	円形	VI	0.51	0.44	0.37	0.28	0.25		
SK51	50225	AR9	a	楕円形	I	0.28	0.40	0.31	0.19	0.12		
SK52	50204	AQ9	a	不定形	I	0.77	0.17	0.69	0.11	0.10		
SK53	50207	AR10	a	円形	II	0.27	0.26	0.20	0.20	0.27		
SK54	50208	AR10	a	円形	III	0.32	0.28	0.20	0.12	0.13		
SK55	50206	AR9~AS9	c	楕円形	IV	0.59	0.46	0.44	0.31	0.27		
SK56	50216	AS10	a	円形	VI	0.29	0.29	0.18	0.17	0.36		
SK57	50217	AS10	a	不定形	VI	0.44	(0.36)	0.37	(0.29)	0.23		
SK58	50218	AS10	a	不定形	IV	(0.37)	0.36	(0.27)	0.27	0.14		
SK59	50210	AS10	a	方彌	I	0.29	0.23	0.14	0.14	0.12		
SK60	50211	AS10	a	円形	I	0.27	0.28	0.21	0.17	0.12		
SK61	50213	AS10	a	方彌	IV	0.45	0.34	0.35	0.23	0.32		
SK62	50220	AS10	-	円形	I	0.40	0.39	0.18	0.14	0.40		
SK76	50279	AT10	a	楕円形	I	0.40	0.22	0.31	0.10	0.09		
SK77	50016	AT10	a	円形	IV	0.24	0.23	0.17	0.14	0.21		
SK78	50267	AT10	a	円形	I	0.26	0.19	0.15	0.09	0.06		
SK79	50268	AT10	d	楕円形	VI	0.51	0.37	0.41	0.25	0.36		
SK80	50269	AT10	a	楕円形	I	0.60	0.37	0.44	0.29	0.07		
SK81	50266	AT10	a	楕円形	VI	0.51	0.27	0.39	0.13	0.13		
SK82	50260	AT10	a	円形	IV	0.25	0.23	0.15	0.14	0.33		
SK83	50261	AT10	a	円形	IV	0.23	0.23	0.16	0.15	0.16		
SK84	50223	AQ10	a	不定形	VI	0.73	(0.43)	0.61	(0.37)	0.32		
SK85	50220	AQ10	c	楕円形	IV	3.02	0.45	0.89	0.33	0.21		
SK86	50225	AQ11	a	円形	IV	0.48	0.42	0.38	0.27	0.13		
SK87	50332	AS11	a	不定形	VI	0.67	0.37	0.58	0.28	0.42		
SK98	50025	AR14	a	円形	I	0.25	0.23	0.14	0.13	0.08	SK170	
SK99	50023	AS11	b	楕円形	IV	0.68	0.52	0.49	0.35	0.19	SK100	S12, SK110
SK100	50324	AS11	a	不定形	VI	(0.84)	0.53	(0.72)	0.32	0.11		SK99, SK110
SK101	50325	AS11	a	不定形	VI	0.80	(0.46)	0.73	(0.40)	0.20		S12, SK110
SK102	50017	AT11	a	円形	II	0.23	0.27	0.19	0.16	0.26		
SK103	50333	AS11	a	不定形	IV	3.39	1.16	1.17	0.81	0.24	NB3	S12, SK104
SK104	50309	AT11	a	不定形	IV	(2.84)	2.55	(2.78)	2.36	0.20	NB4, SK103	S12, SK110
SK105	50262	AT11	a	不定形	IV	1.68	0.44	1.44	0.30	0.14	NB3	
SK106	50263	AT11	a	不定形	IV	(0.73)	(0.17)	(0.39)	(0.15)	0.18	NB3, S08	
SK107	50110	AR11~AS11	d	不定形	VI	5.67	(1.90)	5.64	(1.74)	0.28	S15	S12, SK109, SK110, SK114
SK108	50010	AR10	d	不定形	VI	0.50	0.47	0.39	0.24	0.16	SK109	
SK109	50109	AR11	c	不定形	I	(0.91)	0.83	0.47	0.40	0.36	SK107	SK108
SK110	50270	AS11	d	方形または長方形	VI	4.43	(2.96)	4.01	(2.78)	0.74		S13
SK111	50330	AS11	a	円形	VI	0.71	0.66	0.61	0.53	0.20		SK110, SK113, SK114
SK112	50331	AS11	a	楕円形	VI	1.07	0.79	0.74	0.54	0.22	NB3	SK110, SK113, SK114

60 第3章 調査の成果

表7 遺構観察表(4)

遺構番号	調査時番号	グリッド名	堆積	平面形	断面	上端規模(m)		下端規模(m)		深さ(m)	遺構関係	
						長軸	短軸	長軸	短軸		>(切る)	<(切られる)
SK13	S0104	AR11～AS11	a	方形または長方形	IV	(4.67)	(3.39)	(4.57)	(3.31)	0.13	NB3, SK111, SK112, SK114, SK120	S13, SK110
SK14	S0280	AR11～AS12	d	長方形	VI	5.59	(3.89)	3.68	(5.09)	0.76	S15, SK107, SK111, SK112, SK119	S13, SK110, SK113
SK15	S0271	AS12～AT12	a	不定形	IV	(3.78)	(1.03)	(3.63)	(0.92)	0.11		S13, SK110
SK16	S0057	AR12	d	不明	IV	(2.30)	(2.18)	(2.05)	(1.84)	0.73	NB3, NB4, S14, S15, S14～SP12	S13, SK114, SK120
SK17	S0250	AR12～AS12	a	円形	IV	0.38	0.30	0.22	0.14	0.21	SK119	SK113
SK18	S0015	AR11	a	楕円形	I	0.43	0.35	0.33	0.27	0.13		
SK19	S0014	AR11	a	楕円形	I	0.33	0.25	0.22	0.13	0.15		
SK20	S0088	AR11～AR12	a	不定形	VI	0.53	0.37	0.36	0.17	0.25	SK172	
SK21	S0254	AR12	a	方形	I	0.73	0.70	0.49	0.45	0.22	SK127, SK172	
SK22	S0282	AR12	a	不定形	IV	0.57	0.42	0.42	0.25	0.15	SK172	SK126
SK23	S0281	AR12	a	楕円形	VI	0.56	0.33	0.38	0.26	0.17	SK172	
SK24	S0253	AR12	a	円形	IV	0.33	0.26	0.24	0.17	0.09	SK172	
SK25	S0083	AR11～AR12	c	楕円形	IV	0.57	0.46	0.44	0.27	0.17		
SK26	S0085	AR11～AR12	a	不定形	III	0.39	0.38	0.15	0.15	0.28		
SK27	S0341	AR12	a	円形	I	0.28	0.23	0.16	0.14	0.38	S16	
SK28	S0052	AR12	d	不定形	VI	0.57	0.45	0.50	0.36	0.24	S16	
SK29	S0055	AR12	d	不定形	III	0.58	0.47	0.33	0.25	0.29	S16	
SK30	S0347	AQ12	a	円形	IV	0.35	0.28	0.17	0.14	0.20	S17-SK146, S17-SK147	S17, S17-SL6
SK31	S0345	AQ12	a	円形	I	0.18	0.18	0.12	0.10	0.05		S17, S17-SL6
SK32	S0252	AQ12	a	不定形	I	(0.29)	0.28	0.21	0.18	0.22	S17	
SK33	S0051	AQ12	a	円形	IV	0.25	0.22	0.19	0.13	0.13		
SK34	S0033	AR12～AR13	d	楕円形	IV	0.50	0.44	0.21	0.15	0.38	SK155	
SK35	S0034	AR12～AR13	a	楕円形	IV	1.10	(0.73)	0.93	0.48	0.39	NB4	SK154
SK36	S0289	AR13	a	不定形	I	0.40	(0.33)	0.26	0.21	0.15	NB4	
SK37	S0041	AR13	a	楕円形	IV	0.35	0.29	0.29	0.18	0.08		
SK38	S0043	AR13	d	楕円形	III	0.25	0.19	0.07	0.07	0.26		
SK39	S0048	AR13	a	円形	I	0.32	0.27	0.20	0.16	0.10		
SK40	S0050	AR13	a	円形	II	0.79	0.71	0.73	0.58	0.12	SK161	
SK41	S0288	AR13	a	楕円形	IV	0.23	0.16	0.15	0.11	0.24		SK160
SK42	S0039	AR13	a	円形	I	0.25	0.24	0.16	0.16	0.25		
SK43	S0032	AR13	a	楕円形	II	0.50	(0.39)	0.47	(0.24)	0.03		NB4
SK44	S0045	AR13	a	円形	III	0.37	0.37	0.27	0.18	0.16	SK165	
SK45	S0046	AR13	a	不定形	I	0.30	(0.26)	0.19	0.14	0.23		SK164
SK46	S0290	AR13	a	円形	I	0.30	0.30	0.20	0.19	0.32	NB4	
SK47	S0036	AR13	a	楕円形	I	0.45	0.33	0.26	0.21	0.15	NB4	
SK48	S0020	AR13～AR14	a	楕円形	VI	0.57	0.45	0.47	0.29	0.18	NB4	
SK49	S0067	AR14	a	円形	II	0.33	0.29	0.24	0.20	0.17	NB4	
SK50	S0028	AR13～AR14	a	不定形	VI	(0.82)	0.62	(0.55)	0.54	0.22	S16, SK98	
SK51	S0063	AR12～AR13	d	方形または長方形	IV	3.12	(1.82)	2.75	(1.89)	0.49	S16	S14, S15, SK125, SK126, SK127, SK128, SK129
SL1	S0240	AQ11～AQ9	-	不定形	-	1.36	0.62	-	-	-		
NB1	S0340	AT16～AK18	d	不定形	VI	(11.60)	-	(10.55)	-	1.21		
NB2	S0062	AQ10～CA11	d	不定形	VI	(17.52)	(4.00)	(16.67)	2.86	1.37	S11, S11-SK33, SK45, SK47, SK48, SK49	S16, SK42, S11-SP1
NB3	S0326	AS11	d	不定形	VI	(19.92)	2.36	(18.66)	1.56	0.65	NB4	NB4, S13, S14, S12-SK94, S12-SK97, S12-SK98, SK103, SK104, SK105, SK106, SK112, SK113, S13-SK115, SK119, S14-SL3, S12-P10, S13-SP1, S14-SP2, S14-SP3
NB4	S0320	AR～AT, CA11～CB14	d	不定形	VI	(16.30)	-	(16.05)	-	1.14		NB3, NB5, NB6, S19, S14, S16, SK119, SK155, SK156, SK165, SK167, SK168, SK169
NB5	S0031	AR13	d	不定形	IV	(3.55)	1.11	(3.37)	0.90	0.33	NB4, SK163	
NB6	S0328	AT, CA13～CB14	a	不定形	I	4.05	1.35	3.77	1.15	0.17	NB4	

凡例
堆積
断面a : 単層, b : 水平堆積, c : 中央が凹む堆積, d : 団みの位置が土坑の壁に偏る堆積, e : 柱痕跡状の堆積
I : 平円形・丸底, II : 方形・平坦, III : 逆三角形・振り跡状, IV : 逆台形, V : プラスコ状, VI : 二段の削り込み

表8 縄文土器觀察表

開 示 番 号	遺 構 地 区	層 位	時 期 器種・形態	法量(cm)	現存率 (%)	表面調整		胎土	施成	備考	押因	因版
						外 面	内 面					
6	NB2	1	縄文初期 深鉢	残存高(4.8)	-	つり、3379'	つり、指壓 压痕	やや粗、直徑2mm以下の長 石・石英を多く含む	普通		42	7
35	NB3	1	縄文後期後半 深鉢	残存高(3.2)	-	陶帶上圓文(LR)	つり	やや粗、直徑3mm以下の長 石・石英を多く含む	普通		43	8
38	NB4	1	縄文後期後半 深鉢	残存高(3.3)	-	爪型の刺突と沈縫を交差に施 す	つり	術、直徑1mm以下の長石・石 英・雲母をわずかに含む	良好		43	8
39	NB4	1	縄文後期後半 深鉢	残存高(4.2)	-	圓文(RL)施文	つり	やや粗、直徑1mm以下の長 石・チトを多く含む	普通		43	8
40	NB4	1	縄文後期後半 深鉢	残存高(4.3)	-	沈縫文	つり	やや粗、直徑3mm以下の長 石・石英・チトを多く含む	普通		43	8
41	NB4	1	縄文後期後半 深鉢	残存高(4.5)	-	沈縫間に圓文(LR)、刺突	つり	やや粗、直徑3mm以下の長 石・石英・チトを多く含む	普通		43	8
42	NB4	1	縄文後期後半 鉢	残存高(5.0)	-	沈縫文、つり	つり	術、直徑2mm以下の長石・石 英をわずかに含む	良好		43	8
43	NB4	1	縄文後期後半 深鉢	残存高(5.5)	-	口縁部に圓文(LR)、2条の沈 縫下圓文(LR)	つり	やや粗、直徑3mm以下の長 石・石英・チトを多く含む	普通	波状口縁、外面一 部内保有	43	8
44	NB4	1	縄文後期後半 深鉢	残存高(6.0)	-	口縁部に沈縫文、圓文(RL)	つり	やや粗、直徑1mm以下の長 石・石英・雲母を多く含む	普通	外面保有	43	8
45	NB4	1	縄文後期後半 深鉢	底部4.0 残存高 (3.7)	底部 (3/4)	つり	つり	やや粗、直徑3mm以下の長 石・石英・チトを多く含む	不良	反転	43	8
46	NB4	1	縄文後期後半 深鉢	口径3.0 残存高(21.0)	口径 (1/12)	口縁部に圓文(LR)、幅広の沈 縫1条、脚部下に幅広の沈縫 3条、下に圓文(LR)	つり	やや粗、直徑3mm以下の長 石・石英・チトを多く含む	普通	反転	43	8
48	NB4	1	縄文後期後半 深鉢	底部8.2 残存高(4.5)	底部 (3/4)	つり	つり	粗、直徑4mm以下の長石・石 英・チトを多く含む	普通	内面保有、反転	44	8
66	S12	b	縄文中期 深鉢	底部8.3 残存高(4.4)	底部 (1/4)	つり	つり	粗、直徑4mm以下の長石・石 英・チトを多く含む	不良	内面保有、反転	45	9
76	S14	4	縄文後期後半 深鉢	残存高(3.6)	-	沈縫文、圓文(LR)	つり	術、直徑2mm以下の長石・石 英・雲母をわずかに含む	良好	外面保有	45	9
89	SK119	4	縄文後期後半 深鉢	残存高(4.6)	-	沈縫文、つり	つり	やや粗、直徑3mm以下の長 石・石英・雲母を多く含む	普通	外側わざかに保有	45	9
90	BK1	-	縄文早期前半 深鉢	残存高(8.3)	-	網目状に沈縫、つり	つり	やや粗、直徑3mm以下の長 石・石英・雲母をわずかに 含む	普通	高台寺式 内外面織縫痕	46	10
91	CB13	II	縄文後期後半 注口	残存高(4.5)	-	つり、半蔵竹管	つり	やや粗、直徑3mm以下の長 石・石英・雲母をわずかに 含む	普通		46	10
92	CB12	II	縄文後期 深鉢	残存高(6.6)	-	つり、口唇部に刺突	つり	やや粗、直徑3mm以下の長 石・石英・チトをわずかに 含む	普通	外面離離	46	10

表9 弥生土器觀察表（1）

開 示 番 号	地 區	層 位	時 期 器種・形態	法量(cm)	現存率 (%)	表面調整		胎土	施成	備考	押因	因版
						外 面	内 面					
36	NB3	b	弥生中期前葉 壺	残存高 (3.2)	-	沈縫による横羽状文	つり	術、直徑2mm以下の長石・石 英をわずかに含む	普通		43	8
37	NB3	b	弥生中期後葉 壺	残存高 (6.4)	-	口後沈縫による横羽状文	つり	術、直徑4mm以下の長石・石 英・チトを多く含む	良好	内外面保有	43	8
47	NB4	1	弥生中期前半 壺	残存高 (5.3)	-	条彌文	つり	やや粗、直徑1mm以下の長 石・石英を多く含む	普通	内面保有、 反転	44	8
49	NB4	1	弥生中期前葉 壺	残存高 (4.7)	-	つり	つり	やや粗、直徑3mm以下の長石・ 石英を多く含む	普通	内面摩耗	44	8
50	NB4	1	弥生中期前葉 壺	残存高 (4.8)	-	短沈縫文	12つり	やや粗、直徑2mm以下の長石・ 石英をわずかに含む	良好	粘土継ぎ痕	44	8
51	NB4	1	弥生中期前葉 壺	残存高 (3.8)	-	条彌文	つり	術、直徑2mm以下の長石・石 英・チトを多く含む	良好	波状口縁	44	8
52	NB4	1	弥生中期壺	底径5.2 残存高 (3.9)	-	撲糸文 滲部分	つり	やや粗、直徑2mm以下の長石・ 石英を多く含む	普通	反転	44	8
67	S12	f	弥生中期前葉 壺	残存高 (8.7)	-	削り	削り	やや粗、直徑2mm以下の長石・ 石英をわずかに含む	良好	内面保有	45	9
68	S12	e g h	弥生中期後葉 壺	残存高 (15.8)	-	上部多瘤、下半部斜位 →瓶位→後づき、横羽状文	横擦り+つり	術、直徑2mm以下の長石・石 英をわずかに含む	良好	内外面保有、 反転	45	9

表 10 弥生土器観察表（2）

開拓番号	地区 遺構	層位	時期 器種分類	法量(cm)	残存率 (0/12)	器皿調整		胎土	焼成	備考	津田	園田
						外面	内面					
69	S12	b	弥生中期前半 甕	残存高 (2.1)	-	口縁部付り、沈縫	付り	やや粗、直徑1mm以下の長石・ 石英をわずかに含む	良好		45	9
70	S12	g	弥生中期前半 甕	残存高 (4.8)	-	柔痕	削り	滑、直徑3mm以下の石英をわざ かに含む	良好		45	9
71	S12	2	弥生中期後葉 甕	残存高 (3.1)	-	波状文		やや粗、直徑2mm以下の長石を わざかに含む	普通	内面剥離	45	9
74	S13	b	弥生中期 甕	残存高 (4.6)	-	けつ後沈縫による横羽状文	付り	滑、直徑2mm以下の長石・石 英、付りを多く含む	良好		45	9
75	S13	b	弥生中期後葉 甕	残存高 (4.1)	-	柔痕、けつ後三列点列	付り	滑、直徑1mm以下の長石・石英 をわずかに含む	良好		45	9
82	SK110	1	弥生中期 甕	残存高 (3.6)	底部 1/4	付り	付り	やや粗、直徑2mm以下の長石・ 石英、付りをわずかに含む	良好	反転	45	9
83	SK110	a	弥生中期前葉 甕	残存高 (5.8)	-	柔痕	付り	やや粗、直徑1mm以下の長石・ 石英をわずかに含む	普通		45	9
85	SK114	4	弥生中期前半 甕	残存高 (2.2)	-	口唇部付り、口縁部沈縫	付り	やや粗、直徑2mm以下の石英を わざかに含む	普通	外面工具痕	45	9
86	SK114	f	弥生中期後半 甕	残存高 (3.1)	-	沈縫による横羽状文	削り後付り	滑、直徑2mm以下の長石・石英 をわずかに含む	良好		45	9
87	SK114	2	弥生中期前葉 甕	残存高 (3.9)	-	柔痕	付り	やや粗、直徑1mm以下の長石・ 石英・雲母をわずかに含む	普通	内面剥離	45	9
93	CA12	II	弥生後期 甕	残存高 (3.1)	-	けつ後付り	付り	やや粗、直徑3mm以下の長石・ 石英をわずかに含む	普通	内面一部剥離	46	10
94	-	I	弥生 甕	残存高 (2.5)	-	沈縫による文様	付り	やや粗、直徑1mm以下の長石・石英 をわずかに含む	普通	波状口縁	46	10
95	AS11	II	弥生中期 甕	残存高 (2.6)	-	沈縫	付り	滑、直徑2mm以下の長石・石英 をわずかに含む	良好	内外剥離	46	10
96	SK104	a	弥生中期後半 甕	残存高 (2.1)	-	けつ後沈縫	付り	滑、直徑2mm以下の長石をわざ かに含む	良好		46	10

表 11 土師器観察表

開拓番号	遺構 地区	層位	時期 器種分類	法量(cm)	残存率 (0/12)	器皿調整		胎土	焼成	備考	津田	園田
						外面	内面					
1	NRI	I	土師器 鉢	口径3.3 底部1.6 高さ2.6	口縁1/6 底部1/4	彫頭圧痕	付り	粗、直徑3mm以下の石英・付り を多く含む	不良	反転	42	7
2	NRI	1	土師器 鉢	口径10.2 残存高(3.6)	口縁 1/12	付後付り		粗、直徑3mm以下の長石を多く 含む	普通	反転	42	7
3	NRI	1	土師器 高杯	底部1.0 残存高(3.9)	底部1/4	一部付り		滑	普通	内外面摩耗、反転	42	7
7	NR2	1	土師器 高杯	残存高(5.3)	-	付り	絞り痕、削り、付り	やや粗、直徑2mm以下の長石・ 石英を多く含む	不良	摩耗、反転	42	7
21	NR2	2	土師器 高杯	口径17.4 残存高(4.7)	口縁 1/14	付り、口縁下部分 に指捺印有	付り	やや粗、直徑2mm以下の長石・ 石英を多く含む	普通	反転	42	7
53	NR4	1	土師器 土瓶	残存高(3.9)	-	付り	付り無しに残る、 彫頭圧痕	やや粗、直徑2mm以下の石英・ 付りを多く含む	普通		44	8
54	NR4	1	土師器 甕	口径17.2 残存高(3.6)	口縁 1/12	付後付り	付り	やや粗、直徑2mm以下の長石・ 石英を僅かに含む	普通	反転	44	8
73	SD7	a	土師器 甕	残存高(2.7)	-	けつ後付り	付り	粗、直徑2mm以下の石英・付り を僅かに含む	良好	外面剥離著しい、反転	45	9
79	S17	1	土師器 甕	残存高(9.6)	-	付り	付り、彫頭圧痕	やや粗、直徑3mm以下の石英・ 付りを多く含む	普通	外面剥離	45	9
80	S17	1	土師器 甕	残存高(3.6)	-	けつ後付り	付り	粗、直徑2mm以下の長石・石英 を僅かに含む	普通	摩耗	45	9
81	S17	1	土師器 甕	口径8.0 残存高(4.0)	口縁 1/12	付り、彫付り	付後彫付り	やや粗、直徑2mm以下の長石を 僅かに含む	普通	内外面剥離着、反転	45	9
84	SK110	2	土師器 鉢	口径(21.4) 残存高(4.0)	口縁 1/12	けつ後付り	付り	やや粗、直徑2mm以下の石英・ 付りを多く含む	普通	反転	45	9
88	SK114	4	土師器 甕	残存高(4.2)	-	けつ後付り	けつ後付り、削り	やや粗、直徑2mm以下の長石・ 石英・付りを僅かに含む	普通		45	9
97	AS11	II	土師器 甕	残存高(4.5)	-	一部付り、付り	一部付り、彫頭圧痕	粗、直徑3mm以下の長石・石 英・付りを多く含む	不良	摩耗	46	10
98	CA13	II	土師器 杯	底部2.0 残存高(0.8)	底部1/4	底部付り	付り	滑、直徑1mm以下の土器粉を 僅かに含む	良好	外面一部剥離、反転	46	10
99	SK107	1	土師器 甕	残存高(5.9)	-	底部付り、彫頭圧痕	底部付り、彫頭圧痕	やや粗、直徑2mm以下の長石・ 石英・付りをわずかに含む	普通	反転	46	10
120	AT12	II	土製品 土拂	器高5.6	注記定期	付り、彫付り	付り	滑	普通		46	10

表 12 須恵器觀察表（1）

面積番号	遺構 地区	層位	時期 器種分類	法兼(cm)	残存率 (X/12)	器面調整		備考	博國	國版
						外面	内面			
4	NR1	1	7世紀後葉～8世紀前期 須恵器 墓飾 有台杯	口径14.8 台径10.8 器高4.2	口縁1/2 底面1/4	回転けり、底部回転けりX	回転けり	貼付高台、反転	42	7
8	NR2	1	須恵器 美濃須衛 鏡み蓋	口径17.7 残存高(2.4)	口縁1/6	回転けり、回転けりX	回転けり	自然輪付着、反転 輪用鏡	42	7
9	NR2	1	7世紀後葉 須恵器 美濃須衛 环身	残存高 (2.0)	-	回転けり	回転けり	反転	42	7
10	NR2	1	8世紀前葉 須恵器 美濃須衛 無台杯	台径6.2 残存高(2.2)	底面1/2	回転けり、底部手持もけりX	回転けり	反転	42	7
11	NR2	1	8世紀前半 須恵器 美濃須衛 無台杯	台径5.2 残存高(1.9)	底面1/2	回転けり、底部回転糸切り後1/2以下 を回転けり（回転糸切り板が多く残る）	回転けり	反転	42	7
12	NR2	1	8世紀不明 須恵器 墓飾 有台杯	口径7.0 残存高(2.4)	底面1/4	回転けり、底部回転糸切り後回転けり	回転けり	貼付高台、反転	42	7
13	NR2	2	8世紀の墓 須恵器 美濃須衛 有台杯	口径6.0 残存高(2.5)	底面1/4	回転けり、底部回転糸切り後回転けり	回転けり	貼付高台、反転	42	7
14	NR2	1	9世紀後葉 須恵器 美濃須衛 有台杯	口径15.4 台径10.8 器高3.9	口縁1/12 底面1/4	回転けり、底部回転糸切り	回転けり	転写鏡、内面輪付着、 貼付高台、反転	42	7
15	NR2	1	9世紀末 須恵器 墓飾 有台盤	台径13.2 残存高(2.1)	底面1/4	回転けり、底部回転糸切り	回転けり	貼付高台、反転	42	7
17	NR2	1	7世紀後葉～8世紀前期 須恵器 漆地不明 鏡	口径24.6 残存高(8.6)	口縁1/12	回転けり	回転けり	反転	42	7
22	NR2	2	8世紀 須恵器 墓飾 鏡み蓋	残存高 (1.8)	-	回転けり、アラ部貼付	回転けり	反転	42	7
23	NR2	2	8世紀末～9世紀初頭 須恵器 美濃須衛 有台杯	口径11.8 台径9.0 器高2.7	口縁1/12 底面1/4	回転けり	回転けり	反転	42	7
24	NR2	2	8世紀前葉 須恵器 美濃須衛 鏡み蓋	残存高 (2.8)	-	回転けり、アラ部貼付	回転けり	自然輪付着、 反転	42	7
25	NR2	2	7世紀後葉～8世紀前期 須恵器 墓飾 無台杯	口径6.6 残存高(1.6)	底面3/4	回転けり、底部回転糸切り	回転けり	けり板、反転	42	7
26	NR2	2	7世紀後葉～8世紀前期 須恵器 美濃須衛 鏡	口径14.0 残存高(2.9)	底面1/4	回転けりX、底部回転けり	回転けり	反転	42	7
27	NR2	2	8世紀後半 須恵器 美濃須衛 鏡	口径13.0 残存高(5.8)	口縁1/4	回転けり、底部下よりタキ目	回転けり、底部下よ り当て具瓶	外面部自然輪付着、反転	42	8
29	NR2	3	8世紀後葉 須恵器 美濃須衛 無台杯	台径7.0 残存高(2.6)	底面1/4	回転けり、底部回転糸切り後未調整	回転けり	反転	43	8
30	NR2	3	7世紀後葉～8世紀前期 須恵器 美濃須衛 鏡	残存高 (11.2)	-	回転けり、底部下回転けりX	回転けり	反転	43	8
31	NR2	4	7世紀後半 須恵器 美濃須衛 鏡	口径11.1 器高2.8	口縁1/2	回転けり、底部回転糸切り	回転けり	反転	43	7
32	NR2	4	8世紀後葉 須恵器 墓飾 鏡み蓋	口径21.6 残存高(2.2)	口縁1/6	上半回転けりX、下半回転けり	回転けり	反転	43	8
33	NR2	2	7世紀代 須恵器 美濃須衛 鏡	残存高 (9.6)	-	回転けり、底部下よりタキ目	回転けり、当て具瓶	外面部自然輪付着、反転	43	8
34	NR2	4	7世紀後葉 須恵器 美濃須衛 鏡	台径4.0 残存高(5.4)	ほげ 完形	回転けり、往出部分、底部切り離し、回転けり切り後けり	回転けり	外面部自然輪付着	43	7
55	NR4	1	7世紀後葉～8世紀前期 須恵器 美濃須衛 無台杯	口径14.0 台径8.4 器高3.1	口縁1/12 底面1/4	回転けり、底部けりX後けり	回転けり	反転	44	8

64 第3章 調査の成果

表13 須恵器観察表(2)

実載 番号	地 域	被 住 位	時 期 器種分類	法量(cm)	残存率 (X/12)	表面調整		備 考	押 因 図版
						外 面	内 面		
56	NR4	I	8世紀前葉 須恵器 縞輪 盃	口径15.6 残存高(1.5)	口縁1/6	上半回転ひけり、下半回転ひけり	回転ひけり	反転	44 8
57	NR4	I	7世紀後葉 須恵器 縞及 縦	口径30.0 残存高(6.5)	口縁1/12	回転ひけり	回転ひけり	自然釉付着、反転	44 8
58	NR4	I	7世紀後葉～8世紀前葉 須恵器 美濃須衛 無台杯	台径8.2 残存高(1.4)	底部3/4	回転ひけり、底部ひけり、無調整	回転ひけり	反転	44 8
59	NR4	I	7世紀後葉～8世紀前葉 須恵器 縞及 縦無台	口径12.6 台径8.8 器高4.3	口縁1/6 底部1/4	回転ひけり、回転ひけり	回転ひけり	反転	44 8
60	NR4	I	7世紀後葉～8世紀前葉 須恵器 美濃須衛 無台杯	台径9.0 残存高(3.0)	底部3/4	回転ひけり、底部ひけり後回転ひけり 後、回転ひけり	回転ひけり	反転	44 8
72	SI1-SL2	I	7世紀後葉～8世紀前葉 須恵器 美濃須衛 杯	口径10.2 残存高(2.6)	口縁1/6	回転ひけり	回転ひけり	反転	45 9
77	S16	I	7世紀後葉 須恵器 美濃須衛 無台杯	口径13.8 台径8.8 器高3.9	口縁1/6 底部1/4	回転ひけり、底部ひけり、無調整	回転ひけり	反転	45 9
78	S16	I	7世紀後葉～8世紀前葉 須恵器 縞輪 無台杯	口径12.0 台径8.7 器高4.2	口縁1/4 底部1/4	回転ひけり、底部回転ひけり	回転ひけり	反転	45 9
100	CA11	II	8世紀前葉 須恵器 縞輪 盃	残存高 (2.4)	-	上半回転ひけり、下半回転ひけり、?? 部斜付	回転ひけり	-	46 10
101	CA11	II	7世紀後葉～8世紀前葉 須恵器 美濃須衛 盃	残存高 (2.4)	-	回転ひけり、??部斜付	回転ひけり	外面自然釉付着	46 10
102	AT10	II	7世紀後葉 須恵器 美濃須衛 無台杯	口径12.4 台径7.6 器高4.7	口縁1/6 底部1/4	回転ひけり、底部回転ひけり後付	回転ひけり	反転	46 10
103	AS12 CA13	II	7世紀後葉～8世紀前葉 須恵器 美濃須衛 無台杯	口径14.0 台径10.2 器高3.1	口縁1/3 底部1/4	回転ひけり、体部下半～底部回転ひけり	回転ひけり	反転	46 10
104	AS9 CA12	II	9世紀前葉 須恵器 縞輪 有台杯	口径15.0 台径10.8 器高3.9	口縁1/4 底部1/4	回転ひけり、底部回転ひけり	回転ひけり	底付高台、反転	46 10
105	AT12 AS13	II	7世紀～8世紀 須恵器 底付不明 無台杯	口径15.0 台径8.4 器高4.0	口縁1/6 底部1/4	回転ひけり、底部回転ひけり	回転ひけり	反転	46 10
106	AT14	II	8世紀後葉 須恵器 縞輪 無台杯	口径12.4 台径8.6 器高3.0	口縁1/4 底部1/4	回転ひけり、底部回転ひけり	回転ひけり	反転	46 10
109	AS13	II	7世紀後葉 須恵器 美濃須衛 身付	口径8.3 残存高(1.8)	口縁1/12	回転ひけり	回転ひけり	反転	46 10
110	CA13	II	6世紀末～7世紀前葉 須恵器 美濃須衛 身付	口径7.8 残存高(2.7)	口縁1/4	回転ひけり	回転ひけり	反転	46 10
111	CA11	II	7世紀～8世紀 須恵器 底付不明 無台杯	台径8.7 残存高(2.2)	底部1/2	回転ひけり、体部下半～底部回転ひけり	回転ひけり	反転	46 10

表14 灰釉陶器観察表(1)

実載 番号	地 域	被 住 位	時 期 器種分類	法量(cm)	残存率 (X/12)	表面調整		備 考	押 因 図版
						外 面	内 面		
5	NR1	I	10世紀後半 灰釉陶器 瓶	口径10.2 台径6.2 器高3.5	口縁1/7 底部1/2	回転ひけり、底部糸切痕	回転ひけり	口縁部歪む、外面糸痕、反転	42 7
16	NR2	I	10世紀後半 灰釉陶器 瓶	口径6.0 残存高(2.2)	底部1/2	回転ひけり、底部回転ひけり、回転ひけり	回転ひけり、体部釉付着	反転	42 7
18	NR2	I	10世紀後半 灰釉陶器 瓶	口径6.0 残存高(2.5)	底部3/4	回転ひけり、底部回転ひけり	回転ひけり	反転	42 7
19	NR2	I	10世紀後半 灰釉陶器 瓶	口径13.3 台径6.7 器高3.9	口縁1/6 底部1/2	回転ひけり、底部回転ひけり	回転ひけり	反転	42 7

表 15 灰釉陶器觀察表(2)

遺藏番号	地区	層位	時期	器種分類	法量(cm)	残存率(X/12)	器表調査		備考	博國	国版
							外面		内部		
107	AT13	II	10世紀後半 灰釉陶器 瓶	台盤6.0 底部1/4	回転けい ⁺ 、底部回転けい ⁺ 、回転系切 り痕	回転けい ⁺			反転	46	10
108	CA11	II	10世紀後半 灰釉陶器 瓶	口徑15.0 底部6.7 高さ4.1	口縁1/2 底部1/2 瓶	回転けい ⁺ 、口縁部施輪、底部系切り 痕				46	10
112	CA13	II	10世紀後半 灰釉陶器 罐	口徑6.0 底部1/4 高さ2.9	回転けい ⁺ 底部1/4	回転けい ⁺ 、底部回転けい ⁺ 切り			反転	46	10
113	CB12	II	10世紀後半 灰釉陶器 瓶	台盤6.8 底部1/4 高さ(2.8)	回転けい ⁺ 底部系切り痕	回転けい ⁺ 、底部輪付 瓶			反転	46	10

表 16 陶磁器類觀察表

遺藏番号	地区	層位	時期	器種分類	法量(cm)	残存率(X/12)	器表調査		備考	博國	国版
							外面		内部		
61	SB4	I	中世 満地不明 織跡	—	—	—	けい ⁺ 、口縁部指痕直痕	けい ⁺	捲口 1 単位 5 本	44	8
114	AS13	II	登窯 古窯戸 瓶子	残存高(3.7)	—	—	施輪、圓錐二重	施輪	外面直入、内部釉垂れ、露胎	46	10
115	AS9	II	中国製磁器 青磁碗	—	—	—	施輪、陽刻蓮弁文	施輪		46	10
116	AQ8	II	中国製磁器 青磁碗	口徑12.9 残存高(1.4)	口縁 1/12	—	施輪、陽刻蓮弁文	施輪		46	10

表 17 スクレイバー観察表

遺藏番号	遺構	層位	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	質量(g)	調整	刃部		備考	博國 番号	国版 番号
									形態	数			
63	NB4	I	下呂石	3.9	5.2	0.6	9.8	前面	直線	2		44	8
119	—	I	下呂石	2.6	3.0	0.6	3.6	前面・片面	直線	3	自然面残る	46	10

表 18 打製石斧観察表

遺藏番号	遺構	層位	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	質量(g)	形態	刃部		欠損状況	備考	博國	国版
									形態	幅(cm)				
64	NB4	I	燧灰岩	10.4	4.9	1.9	102.5	短冊形	外彫	4.8	完形	表面に自然面残る。刃部に縦状痕、磨痕	44	8
65	NB4	I	燧灰岩	12.8	5.2	2.8	183.4	短冊形	外彫	4.8	完形	表面に自然面残る。磨痕	44	8

表 19 石鍬観察表

遺藏番号	遺構	層位	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	質量(g)	形態	刃部		欠損状況	備考	博國	国版
									形態	幅(cm)				
117	砂土	—	流紋岩	(11.9)	(10.8)	(1.8)	365.0	短冊形	外彫	9.6	基部欠損	表面に自然面残る。刃部に縦状痕、磨痕	46	10

表 20 磨製石斧観察表

遺藏番号	遺構	層位	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	質量(g)	形態	刃部		欠損状況	備考	博國	国版
									形態	幅(cm)				
28	NB2	2	蛇紋岩	(6.8)	4.5	2.2	119.4	不明	不明	4.2	基部欠損	表面に裏面打痕	42	8

表 21 砥石観察表

遺藏番号	遺構	層位	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	質量(g)	形態	刃部		欠損状況	備考	博國	国版
									形態	幅(cm)				
118	AS12	II	粘板岩	(3.1)	(2.7)	(0.5)	5.0	不明	3	有	使用痕残る		46	10

表 22 石刀観察表

遺藏番号	遺構	層位	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	質量(g)	形態	刃部		欠損状況	備考	博國	国版
									形態	幅(cm)				
62	NB4	I	粘板岩	(16.8)	(2.7)	(2.1)	160.4	三角形	—	—	先端・基部欠損	縦状痕	44	8

表 23 鉄製品観察表

遺藏番号	遺構	層位	器種	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	質量(g)	刃部		欠損状況	備考	博國	国版
									形態	幅(cm)				
20	NB2	1	角釘	鉄製	(7.2)	(0.5)	0.6	22.6	頭部・脚部欠損	鋸付着			42	7

表 24 出土遺物一覽表(1)

表 25 出土遺物一覽表(2)

表26 出土遺物一覧表(3)

遺 構 番 号	調 査 文 士 器	古代			中古			近世			その他の 石器			合計						
		新 石 器	土 器	須 恵 器	灰 陶 器	山 茶 碗	淡 青 陶 器	中 國 產 鐵	土 器 三 種	和 戸 (登 陸) 陶 器	伊 万 張 産	中 國 產 鐵	金 屬 製 品							
SK61														0						
SK62														0						
SK76														0						
SK77														0						
SK78														0						
SK79														0						
SK80														0						
SK81														0						
SK82														0						
SK83														0						
SK84														0						
SK85		8												8						
SK86														0						
SK87														0						
SK99														0						
SK100														0						
SK101														0						
SK102														0						
SK103														0						
SK104		1												1						
SK105														0						
SK106														0						
SK107		6	6										1	13						
SK108														0						
SK109														0						
SK110		6	2	6										14						
SK111														0						
SK112														0						
SK113														0						
SK114		22	5	3									4	34						
SK118														0						
SK119		22												2						
SK120														0						
SK123														0						
SK124														0						
SK125														0						
SK126														0						
SK127														0						
SK128														0						
SK129														0						
SK130														0						
SK131														0						
SK135														0						
SK142														0						
SK143														0						
SK145														0						
SK151														0						
SK152														0						
SK153														0						
SK154														0						
SK155														0						
SK156														0						
SK157														0						
SK158														0						
SK159														0						
SK160														0						
SK161														0						
SK162														0						
SK163														0						
SK164			1											1						
SK165														0						
SK166														0						
SK167														0						
SK168														0						
SK169														0						
SK170														0						
SK171														0						
SK172														0						
SL1														0						
小計		304	50	135	260	38	0	1	5	0	0	0	16	0	2	812				
北地区		2	5	8												7				
		2	5	8												0				
南地区		76	6	100	594	97	1	1	9	4	1	10	2	4	3	6	1	909		
		7	5	4	4											1		16		
总数		389	59	240	858	139	11	1	6	3	4	11	121	21	4	3	23	11	2	1744

第4章 総括

第1節 遺構

本節では、主要遺構を確認した古代の遺構の変遷と配置について検討する。

1 壊穴建物について

古代では、壊穴建物7軒、壊穴建物とほぼ同じ規模の方形土坑5基を確認した。図47に壊穴建物の先後関係を示した。先行する1(SI7)から後出の11(SI1)までの先後関係があり、北東から南西へ新しくなる傾向がある。建物内の出土遺物からはそれぞれの遺構の時期差は認められず、すべて7世紀後葉から8世紀前葉の遺構である。建物の規模は、遺構の重複により不明のものが多いが、比較的残存状況のよいSI1及びSI6から長辺4mから5m、短辺3.5m前後の長方形プランと考えられる。カマドの位置は、SI1・4から7のカマド焼土の位置から建物北壁中央が多い。建物の主軸方位は北か、北からやや西へ傾くものが多い。北から西へ傾くものは、NR4の緩斜面になった部分に建てられたものが多いことから、地形の勾配に即して建てられた可能性がある。

2 自然路と壊穴建物の先後関係について

南地区的東側には砂礫層(NR4の2・3層)が堆積したNR4があり、その上面で壊穴建物と方形土坑を確認した。このことから、NR4がほぼ埋まり、なだらかな地形になった後に壊穴建物が建てられたと考えられる。また、南地区的南側にはNR2があり、NR2の1・2層にSI1の建物西側が削平される。SI1の建物西側は3層が削平され、基盤層になる。SI1は3層上面では確認できないため、NR2の1・2層より先行する遺構と考えられる。壊穴建物及び方形土坑の所属時期は、出土遺物から7世紀後葉から8世紀前葉の遺構といえる。NR4の1層及び、NR2の3・4層の出土遺物は、壊穴建物と同じ7世紀後葉から8世紀前葉がまとまって出土し、比較的狭い範囲で接合する。このことから、これらの遺物は、壊穴建物機能時もしくは廃絶時に廃棄された可能性がある。

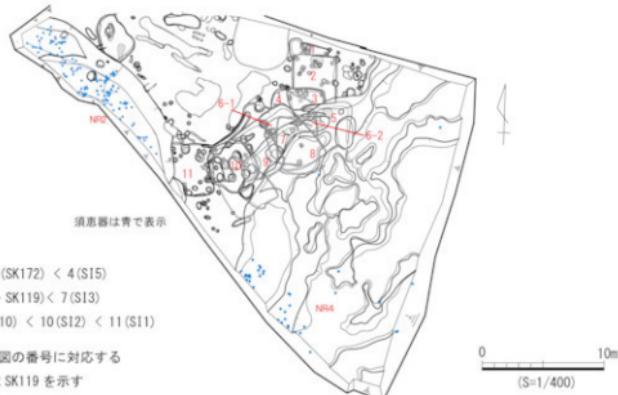


図47 古代の主要遺構配置図

第2節 遺物

本節では、遺構及び遺物包含層で出土した遺物を種類・器種毎に集計し、時期的推移及び器種毎の割合を把握する。また、石器類については器種毎の石材選択傾向を示す。須恵器については産地毎に器種別破片数を集計し、時期と器種の傾向を検討する。

縄文土器は389点出土した。N R 4 の埋土1層の出土点数は217点で全体の約56%を占める。時期は早期、後期後半、晚期後半に大別できる（表27）。時期別の点数は後期後半の土器が大半である。口縁部下に沈線を廻らし沈線間に縄文施文するもの、口縁部下に凹線を廻らすものがあることから元住吉山II式に併行する資料といえる。

弥生土器は前期から後期までのものが59点出土した（表28）。S I 2 埋土（15点）とN R 4 埋土1層（8点）の出土点数が多い。S I 2 は古代の竪穴建物であり、この遺構はN R 3・4の埋土上で検出したことから、N R 3・4から混入したと考えられる。時期別点数は中期後半の土器が大半で、内垣内式土器である。前期の土器（50）は1点と少ないが、当遺跡を含む川上川左岸地域において弥生前期の活動を示す資料は少なく、貴重な資料といえる。

石器は23点出土した。土器の出土量と比較すると、石器の出土量は少ない。砥石1点は古代、石錐は弥生時代、それ以外は縄文時代のものと考えられ、縄文時代の石器が大半である（表29）。石器はN R 4で6点と縄文土器と同様に多く出土した。S K114も縄文時代の石器4点が出土したが、S K114は古代の方形土坑であり、この遺構はN R 4の埋土上で検出したことから、石器はN R 4から混入した可能性が高い。石器石材をみると、小型剥片石器類（スクレイバー・楔形石器・R F）は下呂石、中型剥片石器類（打製石斧・石錐）は流紋岩・泥岩・凝灰岩、礫石器（磨石・敲石・砥石）は流紋岩・泥岩、石製品は泥岩である。小型剥片石器類及び剥片の石材である下呂石・玉髓を除けば、すべて川上川沿いで採集可能な石材である。

土師器は240点出土した。器種は鉢・甕があり、甕は188点と全体の約78%を占める。土師器の詳細時期は不明であるが、当遺跡出土の須恵器と同じ7世紀から9世紀前葉のものと考えられる。

須恵器は858点出土した。器種別にみると、蓋・有台坏・無台坏・坏（底部がないため、高台の有無が不明なもの）・甕が多い（表30）。時期別では7世紀後葉から8世紀前葉のものが大半である。須恵器の産地別（表31～33）では、美濃須衛産が520点（60.6%）と過半数を占め、次いで在地産102点（11.9%）、猿投・尾北産66点（7.7%）である。同時期の周辺遺跡である野内遺跡B地区では、古代1期（8世紀前半）の産地別の割合は在地産が約8割と多く、搬入土器は美濃須衛産が多い傾向（約2割）にある¹⁾。なお、当遺跡周辺の8世紀前葉頃の窯として平野1号窯跡がある。この窯で出土した坏は体部の特徴などから、美濃須衛古窯跡群の影響が強いと考えられており²⁾、製品が搬入されるだけでなく、在地産の製作技術にも影響している可能性がある。8世紀後葉から9世紀前葉の搬入土器についても美濃須衛産が大半である。野内遺跡B地区においても、この時期に美濃須衛産の搬入量が多くなり、同様の傾向を示す。

灰釉陶器は135点出土した。器種別にみると、碗が123点と大半を占める。灰釉陶器は時期を特定できないものが多いが、時期を特定できた灰釉陶器はすべて10世紀後半のものである。N R 1・2の1層で出土したものが大半で、それぞれの自然流路の最終の埋没時期を示すと考えられる。

表 27 繩文土器器種別破片數

器種	早期	後期		晚期		時期 不明	合計
		前半	後半	前半	後半		
深鉢	1	0	311	0	3	73	388
注口上器	0	0	1	0	0	0	1
盤	1	0	312	0	3	73	389

表 28 弥生土器器種別破片数

器種	前期	中期			後期	時期不明	合計
		前	中	後			
壺	0	0	1	1	0	0	3
甕	1	4	3	11	1	30	56
		1	0	5			
總數	1	27	1	30	59		

表 30 須惠器器種別破片数

时期	6世纪	7世纪	8世纪	9世纪	不明	合计
前	中	后	前	中	后	
环状	1				1	3
环茎		3			3	3
高环				1	1	1
盖		4	8	1	77	89
		23				23
無台环	7	4	2		93	106
	21				21	21
有台环		11	1	4	44	50
		1		1		2
环	20				155	175
無台輪	1				1	1
有台輪	2	1			1	3
有台輪		1		2	1	3
長形輪	1				1	1
短頭輪				2	2	2
齒	1	14	1		45	61
	2				2	2
瓶		2	1		41	44
淨瓶		1			1	1
橫瓶	1	4	2		7	9
	3	1	9		151	164
甕	1				1	1
	82				82	82
罐		1			1	1
鉢		1			4	5
圓盤		1			2	2
不明			1		2	2
			1		1	1
					670	858

表 32 猿投・尾北窯からの搬入須恵器破片数

表 29 石器石材別点数

石種	下瓦石	波紋岩	蛇紋岩	チャート	玉髓	泥岩	黒灰岩	合計
透鏡形石器	2							2
透鏡形石器	1							1
透P	2				1			2
透P								1
洞片	3			2	2			7
打製石斧						2	2	4
石劍		1						1
消滅石斧			1					1
消滅石		1						1
最右		1						1
砾石					1			1
右刀					1			1
總計	8	3	1	3	2	4	2	23

表 31 美濃須衛窯からの搬入須恵器破片数

表 33 在地產須惠器破片數

第3節 遺跡の検討

本節では、周辺遺跡の発掘成果を時期毎に整理し、周辺地域を含めた土地利用の変遷を検討する。

1 縄文時代

随縁寺裏B地点遺跡では、縄文時代早期・後期後半・晩期後半の土器が出土した。周辺地域で確認された遺構として、早期ではウバガ平遺跡の炉穴の可能性がある遺構1基及び焼穢集積遺構、三枝城跡の焼穢集積遺構、前期ではウバガ平遺跡の末葉の竪穴建物1軒、中期ではウバガ平遺跡の中葉の竪穴建物1軒がある。

早期の遺構は、高草洞谷に面する山麓尾根緩傾斜地に立地する。いずれも早期前半の遺構であるが、ウバガ平遺跡については早期後半の条痕文系土器も出土することから早期を通じて利用していたと考えられる。当遺跡も山麓尾根緩傾斜地に立地することから当該期の活動領域であったと考えられる。前期・中期の竪穴建物は各時期1軒と少ないが、飛騨地域の前期の一時期の集落の構成軒数は5軒以下が一般的であり³⁾、竪穴建物は尾根状傾斜地や台地の縁辺近くに構築される例があること⁴⁾から、当地域での集落の様相を示すといえる。また、ウバガ平遺跡で確認した中期の竪穴建物は、中葉以前に特徴的な平面形が隅丸長方形、柱穴が4本以上の竪穴建物⁵⁾であり中期中葉以前の竪穴建物と考えられる。調査では竪穴建物1軒以外に当該期の遺構を確認していないが、中期前葉から中葉の遺物が尾根先端部及び緩傾斜地に分布することから、狭い範囲での土地利用が想定できる。こうした緩傾斜地の土地利用は、高山市平野遺跡⁶⁾に類例があり、当地域での土地利用のあり方を示す。中期後葉以降、建物は当遺跡周辺では確認されていないが、当遺跡の約1kmに位置する赤保木遺跡・与島A地点遺跡で確認されており、扇状地や傾斜地に立地すると想定できる。特に赤保木遺跡は中期中葉以降に馬蹄形の集落形態を持ち、後葉まで継続する⁷⁾拠点的な集落といえる。後期以降、当遺跡周辺では建物の検出例はなくなる。後期後葉以降、中部山岳地帯では遺跡数が減少し、環状集落はみられなくなり、墓域と居住域が分化する傾向にある⁸⁾。飛騨地域では、丹生川町西田遺跡⁹⁾で後期後葉の建物が丘陵裾に並行して列状に分布する¹⁰⁾ことから当地域においても、この時期に墓域と居住域が分化する可能性がある。当遺跡では後期後葉の土器の他に石刀が出土しており墓域が想定されたため、発掘区と連続する東側の傾斜地が居住域である可能性がある¹¹⁾。

遺物については、ウバガ平遺跡で草創期の有舌尖頭器、早期・前期末から中期・後期・晩期の土器、三枝城跡で早期・後期の土器、野内遺跡B地区で中期・後期前半の土器が出土した。このことから、当遺跡を含んだ周辺地域は、断続的ではあるが、比較的長期にわたって利用されたと考えられる。

建物の他に野内遺跡B地区で21基（中期前葉）、ウバガ平遺跡で45基（詳細時期不明）の陥穴と考えられる遺構を確認しており、狩猟の場としても利用されたと考えられる。また、野内遺跡B地区で54点、当遺跡でも5点の打製石斧が出土した。打製石斧の用途は限定できないが、根茎類の採集場として利用していたとも想定できる。

2 弥生時代

随縁寺裏B地点遺跡では弥生時代前期・中期の土器が出土した。周辺地域で確認された遺構として、前期では三枝城跡の土坑1基、中期ではウバガ平遺跡の竪穴建物3軒、後期では野内遺跡D地区的竪穴建物1軒、三枝城跡の土坑1基がある。弥生時代終末から古墳時代早期（3世紀頃）では野内遺跡

B地区の堅穴建物3軒がある。この地域の弥生時代の遺跡立地は、中期は高草洞の谷口部分の丘陵傾斜地、弥生時代終末以降は山麓の崖錐・崩積地部分になる¹²⁾。当遺跡も谷口部分にあたり、中期以前の集落立地といえる。のことから、連続する当遺跡傾斜地には、中期以前の集落が所在する可能性が高いといえる。また、今回の発掘区では弥生時代の遺構は確認できなかったが、当遺跡や野内遺跡C地区¹³⁾で石鋤が出土しており、集落に近い緩傾斜地を食料獲得の場として利用していたと考えられる。

3 古墳時代以降

古墳時代については、随縁寺裏B地点遺跡では7世紀中葉以前の遺構・遺物は確認できなかった。周辺地域で確認された遺構として、前期では野内遺跡C地区の堅穴建物1軒及び水田跡30区画、前期末から中期初頭頃のウバガ平遺跡の堅穴建物1軒、中期では野内遺跡A地区の堅穴建物54軒、中期から後期前半では野内遺跡B地区の堅穴建物3軒、後期後半では野内遺跡B地区の堅穴建物2軒、終末期では野内遺跡B地区で堅穴建物2軒、終末期のウバガ平遺跡の堅穴建物7軒が知られる。

当地域の古墳時代の集落は、前期では丘陵傾斜地（ウバガ平遺跡）及び山麓に近い段丘上位面に立地するが、中期になると丘陵から離れた段丘上位面（野内遺跡A地区）へ展開すると考えられる。また、中期は堅穴建物軒数も増加して、集落の規模が拡大したと考えられる。しかしながら後期になると、この地域の集落の痕跡は希薄となる。これは5世紀後半を中心とした赤保木古墳群（赤保木ぼた上1～7号古墳）造営の終焉と軌を一にすると思われる。6世紀代の高山盆地を代表する古墳は、三福寺町の小丸山古墳、西之一色町の岩屋古墳など、この地を離れて営まれるようである。

随縁寺裏B地点遺跡では、古墳時代終末期から奈良時代前半にかけての堅穴建物7軒を確認した。これは複数軒が同時に存在したものではなく、連続して建て替えられた結果の軒数である。堅穴建物

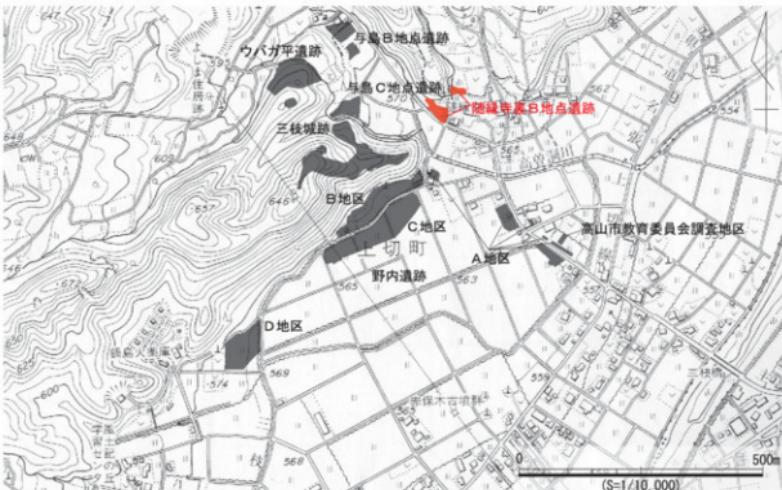


図48 随縁寺裏B地点遺跡及び周辺遺跡の立地

表34 随縁寺裏B地点遺跡周辺の遺跡消長表

時期 遺跡名 (地区)	場所・立地	縄文時代				弥生			古墳				奈良時代				
		草	早	前	中	後	前	中	後	前	中	後	終末	7世紀	8世紀		
		～	～	～	～	～	～	～	～	～	～	～	4世紀	5世紀	6世紀	7世紀	8世紀
与島B地点遺跡	谷口・緩傾斜地																
ウバガ平遺跡	谷口・丘陵傾斜地																
与島C地点遺跡	谷口・緩傾斜地																
三枝城跡	谷口・丘陵地																
野内遺跡(B地区)	山麓の崖面・崩積地																
野内遺跡(C地区)	山麓に近い段丘上位面																
野内遺跡(D地区)	山麓の崖面・崩積地																
野内遺跡(A地区)	段丘上位面・縁辺部分																
隨縁寺裏B地点遺跡	谷口・緩傾斜地																

■ 建物・炉・焼鍊集積構造が存在
 ■ 土器が存在
 ■ 遺構数が多い時期
 ※ 縄文時代草創期は石器も含む

の周囲には、幾度も土石流の痕跡が見られ、建物を造営するには条件が良いとはいえない傾斜地において、7世紀後葉から8世紀前葉の短期間にほぼ同一箇所に建て替えられる。

この時期は、高山盆地東側縁辺において三仏寺廟寺が造営される¹⁴⁾。造営にあたって、古墳時代後期の盆地内の勢力団を引き継いでいるのである¹⁵⁾。盆地北西側縁辺部に位置する当遺跡は、同時期の盆地内の主要勢力圏の周縁地ともいえるが、当遺跡周辺では平野1号窯跡を嚆矢として須恵器生産を開始し、その後飛騨国分寺瓦窯の造営を経て、9世紀前葉以降には赤保木古窯跡群やその支群ともいえる平野古窯跡群・よしま古窯跡群で大規模に展開する灰釉陶器生産に加えて、野内遺跡B地区での鉄鍛冶など、律令体制下における官営工房群の様相を呈していく。また、野内遺跡C地区では、8世紀後半ごろに大規模な水路の開削によって広域に水田を造営するようになる。さらに、隨縁寺裏B地点遺跡の堅穴建物が営まれる時期は、ウバガ平古墳群¹⁶⁾で古墳が造営される時期と重なる。隨縁寺裏B地点遺跡の堅穴建物造営時期は、当遺跡周辺で展開していく大規模で多様な生産拠点が形成される萌芽期に当たり、古墳時代から律令制下の生産体制への変換期でもある。悪条件下に建て替えを繰り返す特異な堅穴建物のあり方は、公的な生産拠点を維持する地域として機能していた可能性を示唆し、生産域優先の土地利用の結果である可能性が考えられる。これまでに調査の及んでいない当遺跡から連続する斜面や

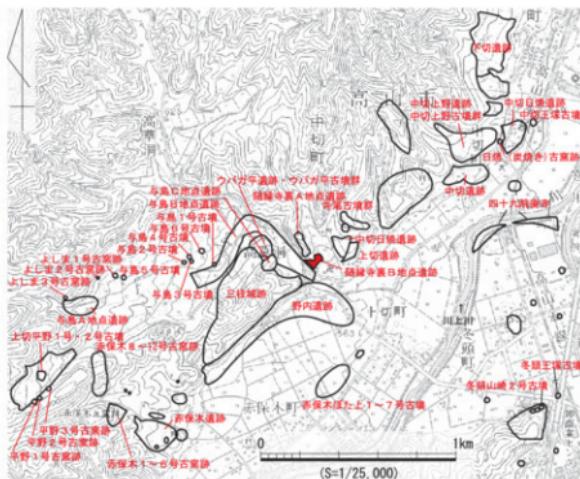


図49 隨縁寺裏B地点遺跡周辺的主要遺跡
 国土地理院発行2万5千分の1地形図「飛驒古川」「三日町」をもとに作成

建物立地としてさらに好条件である周辺部には、生産に関わる遺構やそれを維持する集落が展開している可能性があり、周辺地域における今後の調査が期待される。

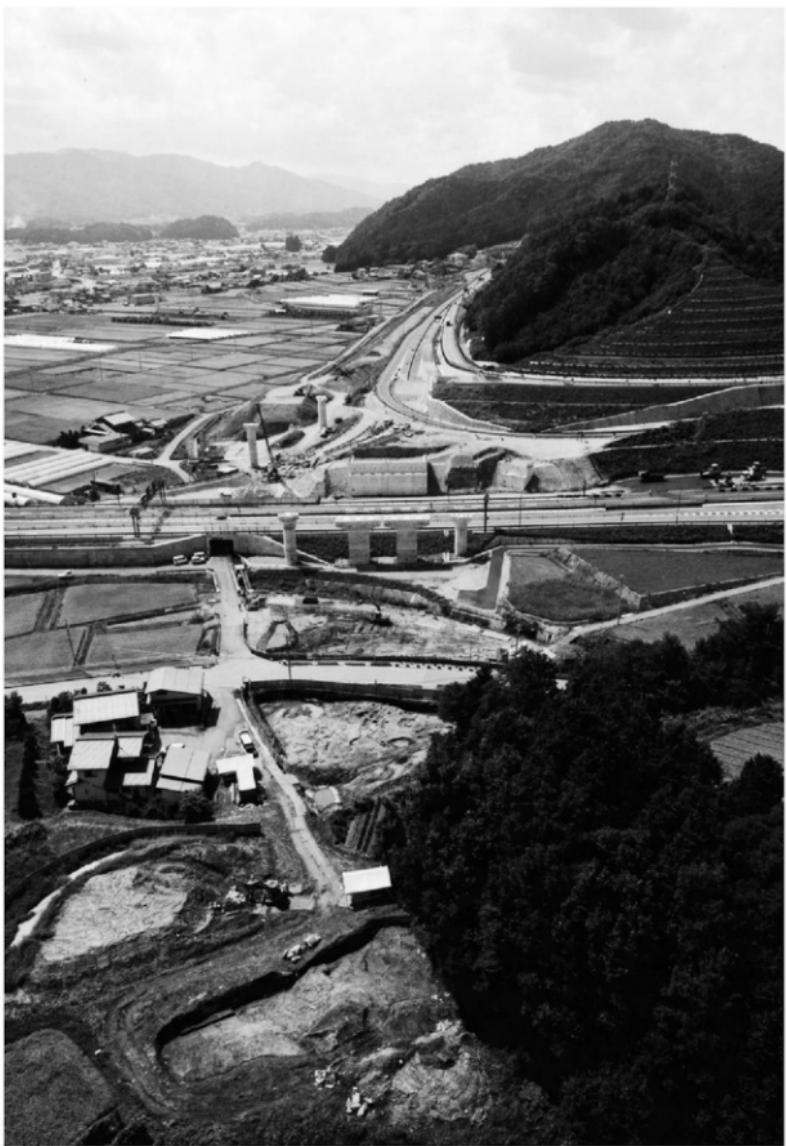
第4章 注

- 1) 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2009「第5章第2節 古代遺物の分析」『野内遺跡B地区』。
- 2) 高山市教育委員会 2005「10 平野遺跡」『高山市内遺跡発掘調査報告書』。
- 3) 大石崇史 2012「飛騨の縄文前期後半土器と住居・集落」『縄文・峰一合遺跡の再検討』。これによると、飛騨の縄文時代前期後半の遺跡から検出された住居跡数は、中切上野遺跡 15 軒、的場遺跡 19 軒を除けば、いずれも 5 軒以下である。また、集落のほぼ全城を調査した堂之上遺跡でも縄文時代前期後半の住居跡は 3 軒しかなく、当該期の一時期の集落の構成件数は 5 基以下が一般的であるとしている。
- 4) 大石崇史 2012「飛騨の縄文前期後半土器と住居・集落」『縄文・峰一合遺跡の再検討』。尾根状の傾斜地に住居を構築する遺跡として高山市中切上野遺跡、台地の縁辺部に住居を構築する遺跡として高山市向畑遺跡を例示している。
- 5) 岩田崇・大石崇史 2003「飛騨の縄文住居」『関西縄文時代の集落・墓地と生業』。これによると、宮川上流域では、中期前葉段階で不整円形・楕円形、中期中葉段階で円形・方形を呈し、柱穴は 4 本を基準とする。中期後葉になると、方形プランを主とし、4 つの主柱穴を建物中心から同心円状に規則的に配置するとしている。
- 6) 高山市教育委員会 2005「10 平野遺跡」『高山市内遺跡発掘調査報告書』。山裾の斜面地で中期前半の竪穴建物 1 軒を確認している。
- 7) 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007「第6章第1節 縄文時代の竪穴住居跡と集落の変遷」『赤保木遺跡』(岐阜県文化財保護センター調査報告書 第 105 集)。
- 8) 柳原功一・今福利恵 2001「中部・東海・北陸地方における集落変遷の面期と研究の現状」『第1回研究集会発表要旨 列島における縄文時代集落研究の現段階』。
- 9) 財団法人岐阜県文化財保護センター1997『西田遺跡』(岐阜県文化財保護センター調査報告書 第 29 集)。
- 10) 戸田哲也 2001「岐阜県における縄文時代集落の諸様相」『第1回研究集会基礎資料集 列島における縄文時代集落の諸様相』。高山市丹生川町西田遺跡では後期中葉から晚期前葉にかけての竪穴建物が確認されている。建物の分布は丘陵裾寄りに集中し、後期中葉は密集、後期後葉は丘陵裾に並行して列状に分布し、晚期前葉は台地中央部に密集する。
- 11) 周辺遺跡では、赤保木遺跡で石冠・石刀、与島 A 地点遺跡で石劍、中切遺跡で石冠、中切日燒遺跡で御物石器、下切(荒神洞)遺跡で石劍が出土しており、この付近に集落が存在する可能性がある。
- 12) 馬場伸一郎 2014「飛騨地方の弥生時代を外からの視点で考える」『飛騨考古学会発表資料』による。当遺跡一帯をみると、弥生時代中期は谷口部分の集落立地、弥生時代後期後半以降は沖積地に面した集落立地になると図示している。
- 13) 岐阜県文化財保護センター2012『野内遺跡C地区』所載の遺物 2007 から 2009。
- 14) 八賀晋 2001「飛騨国古墳について」『美濃・飛騨の古墳とその社会』では、高山盆地での 7 世紀後葉の古代寺院として三仏寺廃寺、大幡寺跡を挙げている。上枝村史編纂委員会 2000『上枝村史』によれば、この他に推定地として四十九院廃寺があるが、詳細は不明である。
- 15) 5 世紀代の古墳は冬頭王塚古墳・中切王塚・赤保木ボタ上 5 号古墳があり、高山盆地の西側に分布するが、6 世紀になると高山盆地の東側(三幡寺町)に小丸山古墳が造営される。
- 16) 岐阜県文化財保護センター2010「第5章第2節 まとめ」『ウバガ平遺跡・ウバガ平古墳群』。ウバガ平古墳群は 7 世紀後半に造営されたとしている。

引用・参考文献

- 石黒立人 2003 「中部地方の土器」『考古資料大観 第1巻 弥生・古墳時代 土器I』、小学館
- 岩田崇・大石崇史 2003 「飛騨の縄文住居」『関西縄文時代の集落・墓地と生業』、関西縄文文化研究会編
- 尾野善裕 2000 「猿投窯（系）須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』、東海土器研究会
- 岐阜県文化財保護センター2010『ウバガ平遺跡・ウバガ平古墳群』（岐阜県文化財保護センター調査報告書 第112集）
- 岐阜県文化財保護センター2011『三枝城跡』（岐阜県文化財保護センター調査報告書 第116集）
- 岐阜県文化財保護センター2012『野内遺跡C地区』（岐阜県文化財保護センター調査報告書 第122集）
- 岐阜県文化財保護センター2013『与島B地点遺跡・与島C地点遺跡』（岐阜県文化財保護センター調査報告書 第125集）
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『赤保木遺跡』（岐阜県文化財保護センター調査報告書 第105集）
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『野内遺跡D地区』（岐阜県文化財保護センター調査報告書 第108集）
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2009『野内遺跡B地区』（岐阜県文化財保護センター調査報告書 第111集）
- 財団法人岐阜県文化財保護センター1997『西田遺跡』（岐阜県文化財保護センター調査報告書 第29集）
- 柳原功一・今福利恵 2001「中部・東海・北陸地方における集落変遷の画期と研究の現状」『第1回研究集会発表要旨 列島における縄文時代集落研究の現段階』縄文時代文化研究会
- 小林達雄編 2008『総覧 縄文土器』、アム・プロモーション
- 城ヶ谷和広 2008「猿投窯・尾北窯における窯業生産体制」『日本考古学協会 2008年度愛知大会研究発表資料集』
- 高山市教育委員会 1975『飛騨国分寺瓦窯発掘調査報告』
- 高山市教育委員会 2005『高山市内遺跡発掘調査報告書』
- 高山市教育委員会 1999『中切上野遺跡発掘調査報告書』
- 田中彰 2001「飛騨地域の古墳」『美濃・飛騨の古墳とその社会』、同成社
- 東海土器研究会 2000『須恵器生産の出現から消滅 猿投窯・湖西窯編年の再構築』
- 戸田哲也 2001「岐阜県における縄文時代集落の諸様相」『第1回研究集会基礎資料集 列島における縄文時代集落の諸様相』縄文時代文化研究会
- 八賀晋 2001「飛騨国伽藍について」『美濃・飛騨の古墳とその社会』、同成社
- 馬場伸一郎 2014「飛騨地方の弥生時代を外からの視点で考える」『飛騨考古学会発表資料』飛騨考古学会
- 藤澤良祐 2007「第1章 総論」『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世・瀬戸系』、愛知県史編さん委員会
- 上枝村史編纂委員会 2000『上枝村史』
- 渡邊博人 2008「美濃須衛窯について」『日本考古学協会 2008年度愛知大会研究発表資料集』

写 真 図 版



隨縁寺裏日地点遺跡全景(北から)



随縁寺裏日地点遺跡全景(南から)



発掘区全景（西が上）



北地区全景（北が上）



南地区全景（北が上）



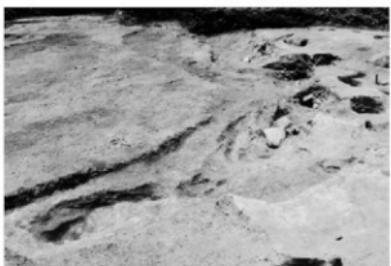
南地区東側近景（南が上）



NR 1 完掘状況（北から）



NR 2 土層断面（東から）



NR 3 完掘状況（南から）



NR 4 南地区北壁土層断面（南から）



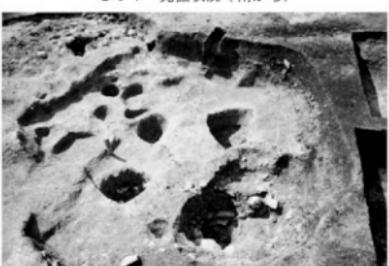
NR 4 完掘状況（北から）



SI 1 完掘状況（南から）



SI 2 底面検出状況（南から）

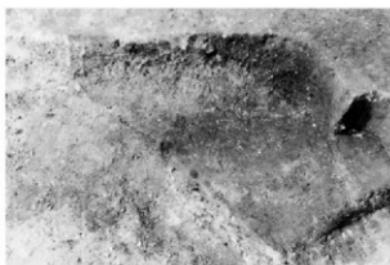


SI 2 完掘状況（南から）

図版6



S I 3 完掘状況（南から）



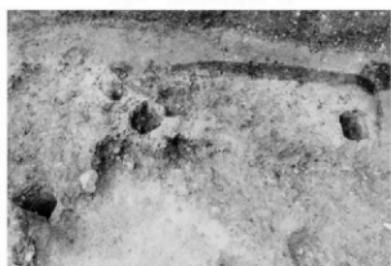
S I 4 完掘状況（南から）



S I 5 完掘状況（西から）



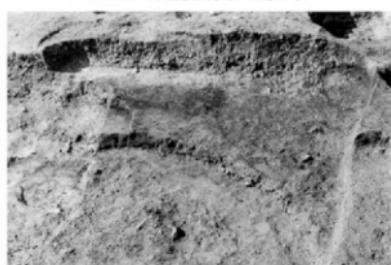
S I 6 床面検出状況（北から）



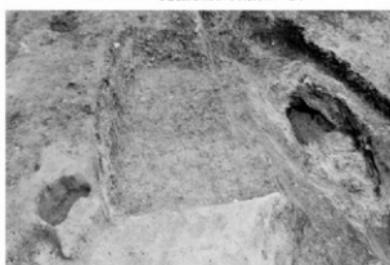
S I 7 床面検出状況（南から）



SK 114 完掘状況（南東から）

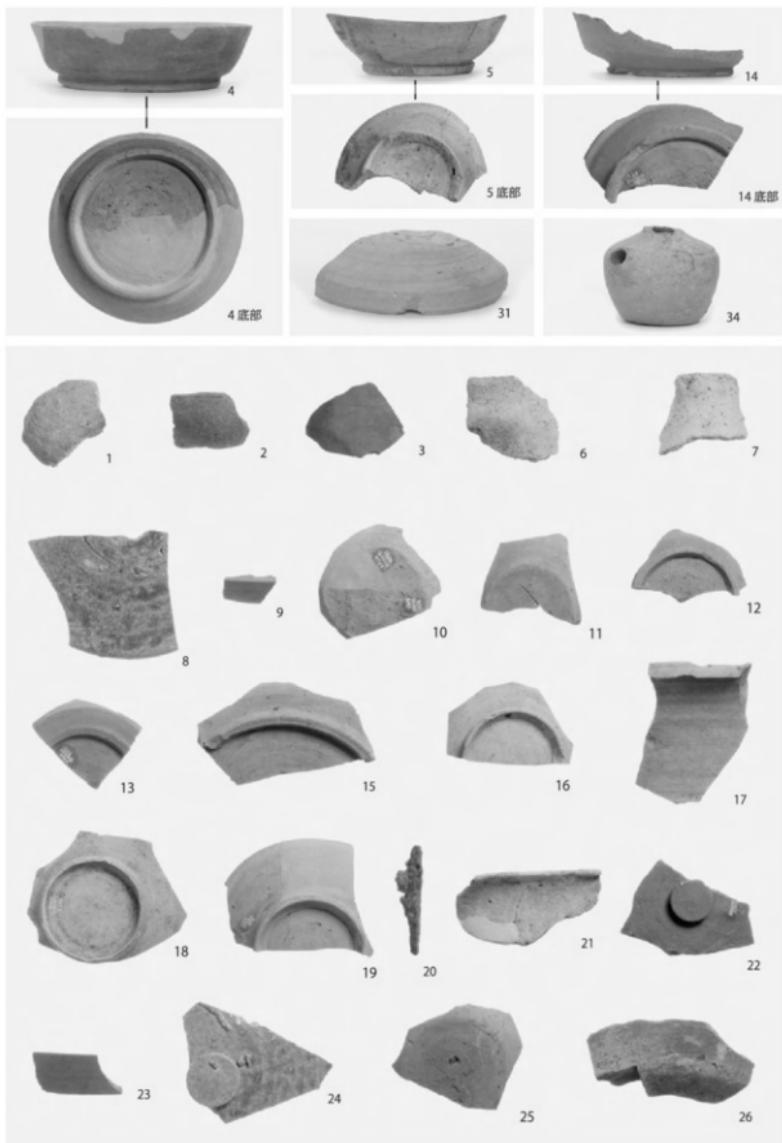


SK 119 完掘状況（南から）

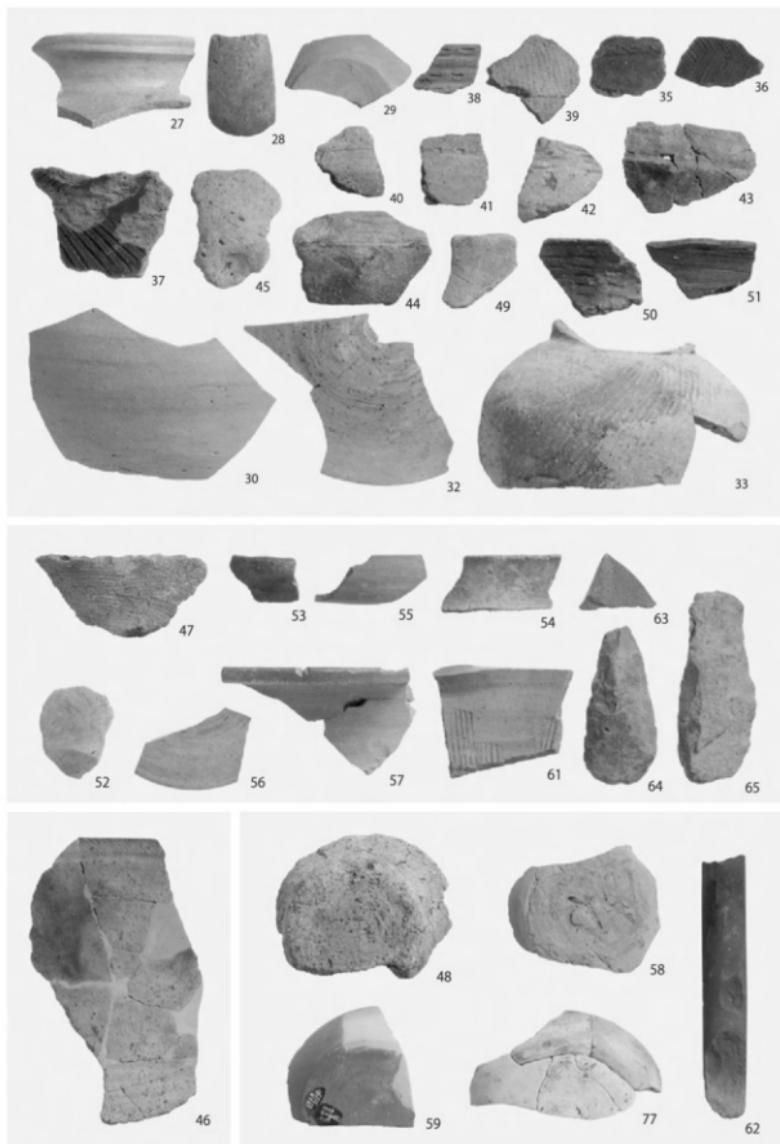


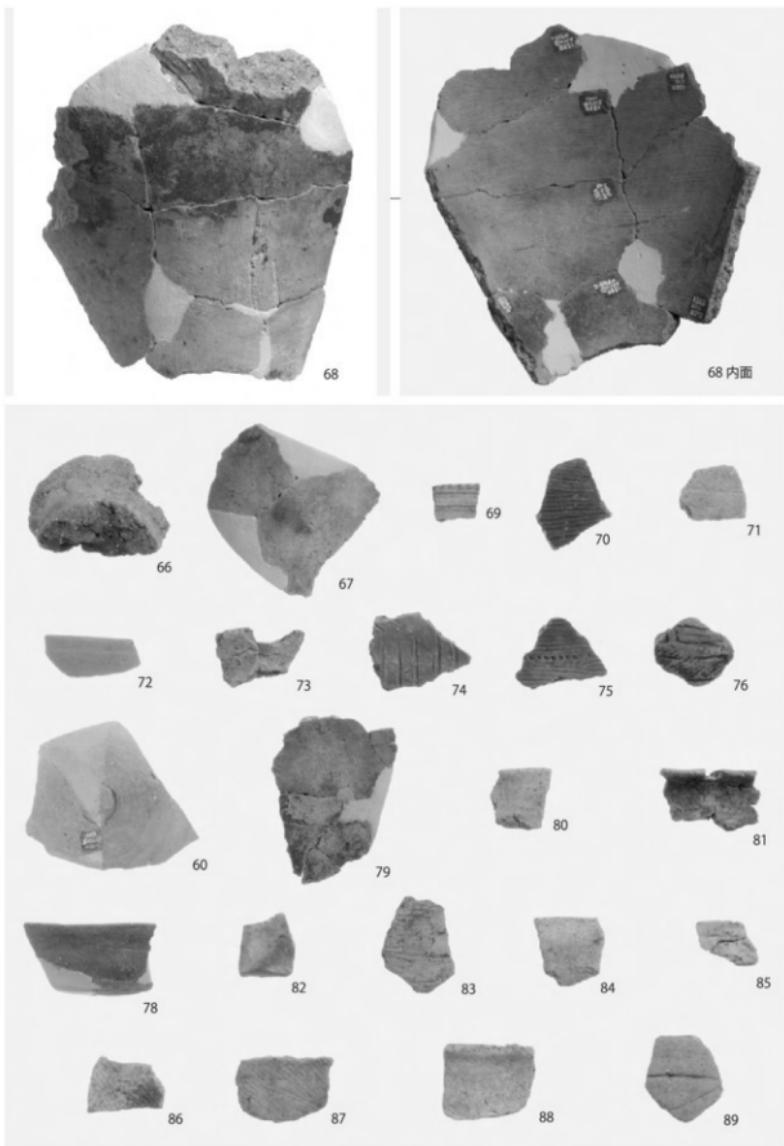
SK 172 完掘状況（西から）

図版 7

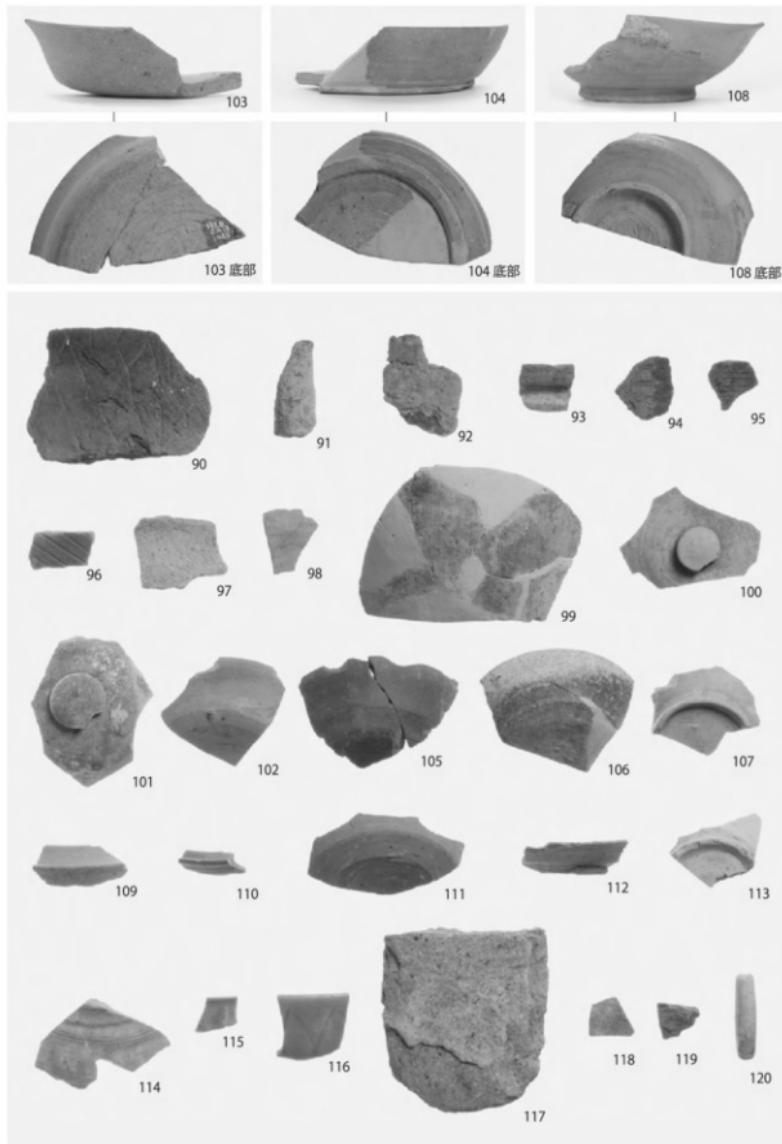


図版8





図版 10



報 告 書 抄 錄

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第134集

隨縁寺裏B 地点遺跡

2015年3月24日

編集・発行 岐阜県文化財保護センター

岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 株式会社もとすいんさつ